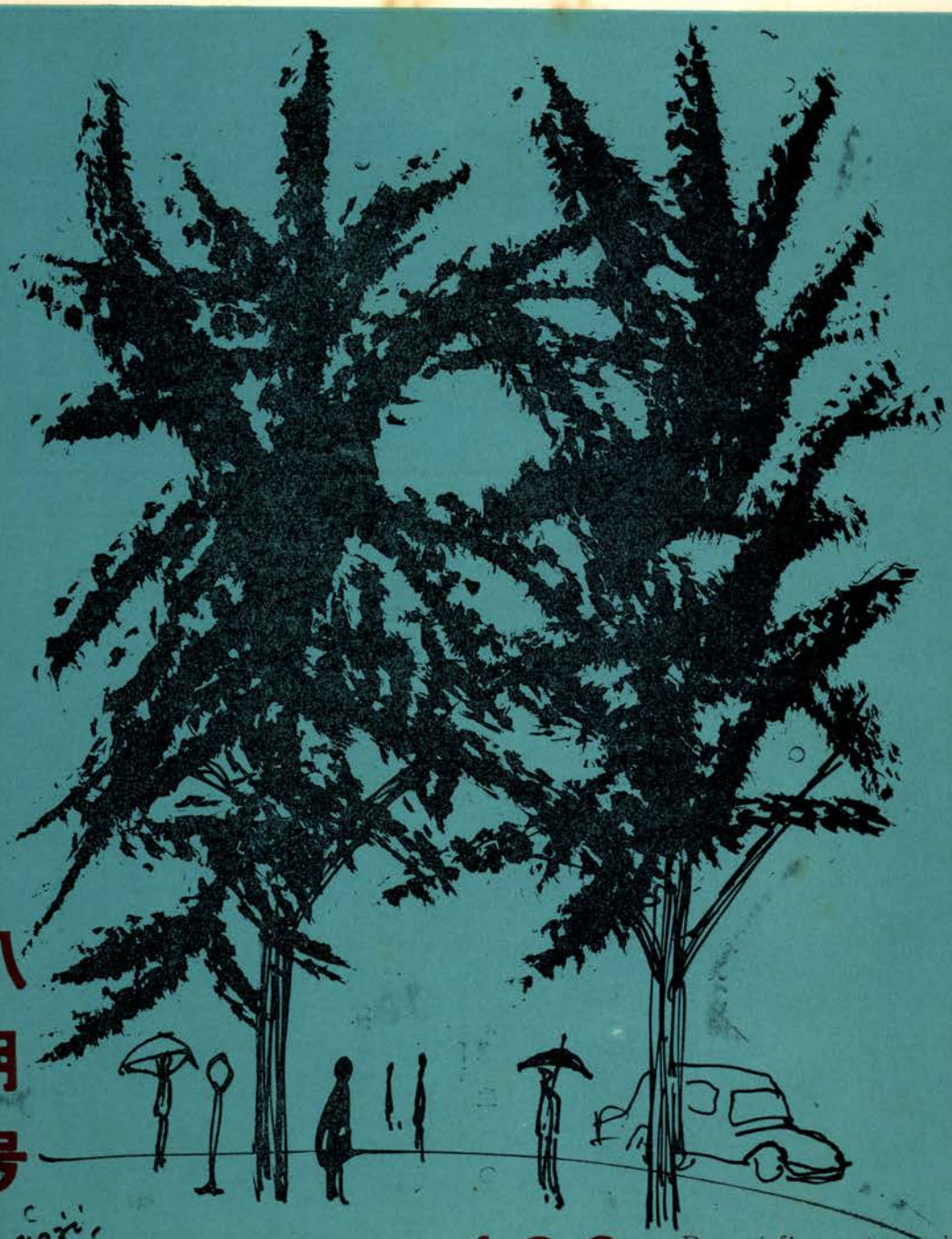
昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可　昭和卅七年八月一日発行卅七年八月号　（毎月一回一日発行）　創刊大正十三年通巻四二三号

川柳雑誌

麻生路郎☆主宰

八月号



Pensoj flugas trans la land - limon

No. 423

THE SENRYU ZASSHI

川柳雑誌社主催

本社八月句会

初心者歓迎！
川柳人口をもっと増しましょう。

日時 八月七日（火）午後六時

会場 自安寺（〔211〕一四七八番）
大阪市南区千日前電停東スグ北側

兼題 「石垣」（二句）麻生路郎選
（路郎選に限り七時半〆切）
「背中」（三句）土井文蝶選
「水」（三句）若本多久志選
「不意打」（三句）金井文秋選

席題 三題（当日発表）

柳話 清水白柳

呈賞 ☆各題天位・☆各題天位から路郎選により不朽洞賞

会費 百円

幹事 柴香・いさむ・南宗・文秋・庸佑・八郎・与呂志・清人・水洞・すゝむ・薫風子・柳宏子・舟遊・一三夫

★投句だけの方は郵券三十円
同封（〆切八月五日）

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地
川柳雑誌社句会部
電・大阪(691)六〇八一

9月本社句会
〃兼題〃
空白
骨
替え玉
ホルモン

大阪市民文化祭第14回川柳大会

恒例による大阪市民文化祭の川柳大会は左の通り第十四回を迎えるに至りました。初心者の方々も多数投句されますよう、おすすめください。又どなたも出句の有無にかかわらずご来場の程お待ちいたします。

主催 大阪市、大阪市教委
関西短詩文学連盟
後援 毎日新聞社

日時 昭和37年10月13日（土）
一時開場、二時開会

会場 毎日新聞大阪本社講堂（市電桜橋）

司会 西尾栞
武田北人

開会の辞 大阪市教育委員会

挨拶 関西短詩文学連盟 理事長 麻生路郎

同講演 北川春巣
講師もう一氏交渉中

席題 二題当日発表

兼題 「信用」堀口塊人選
「桟橋」中島生々庵選
「手相」石井黙平選
「ラッシュアワー」川村好郎選

余興 バイオリン演奏
CMC児童音楽サークル
飾間杏花

閉会の辞

川柳賞 席・兼題優秀句に大阪市長・教育委員長から文化祭川柳賞を贈呈。

兼題投句 各題毎にはがき型句箋及び官製ハガキ一枚に二句ずつ。裏面に住所・姓名・雅号を明記。大阪市北区中之島、大阪市教委内文化祭川柳大会係宛（**九月三十日着限り〆切**）

入選句集 希望者に頒布。（五〇円、郵券可）

不朽洞句帖

麻生路郎

パックボーン子が創作のネタにする
もう父も石燈籠に似て黙り

一行詩これが私の墓だとは
お手伝いさんのごきげん猫に口をきく

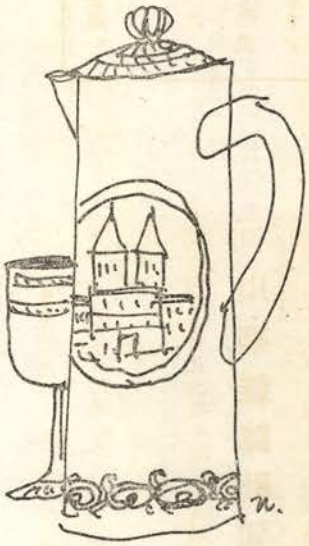
金でツラ張るとは云わず実力者
景色なんて何処も一緒だ飲んでいる

両親は遠うに亡くなり都会に居

葉光を悼む

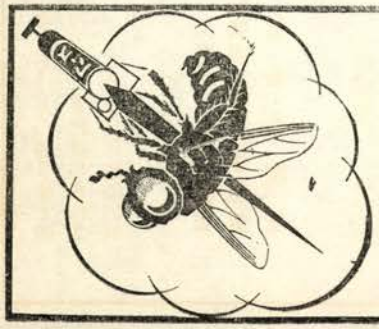
思いのこすこともなからん亡母(はは)のもと

前号正誤　宗教家即政治家の俗の俗



川柳雑誌八月号目次

題字……麻生路郎
表紙……野尻弘
不朽洞句帖……麻生路郎……(3)
芭蕉に返れ……山路閑古……(12)
似せ銭のアイデア……石曽根民郎……(16)
森繁と飲む……東野大八……(14)
特集　一路集の選をして
正本水客・若木多久志……(32)
河村日満・早川清生……(33)
川柳女シリーズ……水谷竹荘……(35)
名句と難句……麻生路郎……(4)
★現代柳人録……(31)
★川柳書架……(15)
川柳まつり（第九回）……(28)
特別課題「情熱」発表……麻生路郎……(26)
★不朽洞の人々……薫風子氏……(39)
★上田湧三近く……八木摩天郎……(31)
句評リレー……圭井堂・八歩・文月・むじな・舟遊……(18)
小督……冨士野鞍馬……(30)
遺稿……山本葉光……(40)
葉光近く（葉光句抄）……不二田一三夫……(41)
大万川柳「エプロン」発表……麻生路郎選……(25)
★
川柳塔……麻生路郎選……(6)
同舟近詠……諸家……(11)
近作柳樽……麻生路郎選　北川春巣選……(20)
金泥集……麻生馥乃選……(41)
各地柳壇……(42)
柳界展望……(38)
不朽洞会から……(39)
「抜け道」……土井文蝶選……(36)
一路集「空巣」……後藤梅志選……(37)
「影法師」……国弘半休選……(46)
柳樽室……(46)



す早い効き目！よい匂い！

安全殺虫剤

アース

旅行・登山等御携帯に
自噴式罐入

アースエアゾール

木村製薬

川柳 名句と難句

麻生路郎

〔三五二〕

旧友は一千万円輕く云う

（春巣）

同じ大学を出た旧友だが、環境の相違は斯うも隔絶するものであろうか。その後の学識に於いても、思想に於いて、才能に於いて、それほどの差が、われわれにあろうとは思えぬのに、彼は一千万円を斯うも軽く云うのに、自分は一年間シャチホコ立ちをしても、一千万円はおろか五百万円も稼げないのだ。金だけで人間の価値が評価される訳ではないが、金に関するかぎり彼の足もとにも寄れないことを思うと、時に淋びしい気持が湧くと云うのである。この句は人間の弱い一面へあっさりと、しかもいかんなくメスをあてている。

〔三五三〕

牛は使えますかと百姓の見合

（七面山）

よき日を選んで見合いをした。新郎となる青年は農家の長男であった。その時の第一問が、「牛は使えますか」であったと云うのである。

青年にとっては、ベターハーフとなるべき女性に要求する結婚条件として、余りにも当然な言葉であったのであろうが、いかに戦後の女性が、農家の仕事に興味を持たなくなっているかをこの句が証拠立てていると思える。面白いネライの句だ。

〔三五四〕

音もなく忍びよりけりわが老化

（千容）

老人心理をぶっつけに吐き出した句だ「音もなく忍びよりけり」と、サラサラと淡々と詠いあげてあるだけに、より寂びしさが迫って来る。

日に日に老化の迫って来る心情を思うとき、堪えがたいものがあるのであろう。「わが老化」の下五が強く響く。

〔三五五〕

タクシーの泥この辺で待つとする

（久米雄）

雨の日だ。タクシーが傍若無人に走って来る。泥をハネかけられて抗議する権利はあっても、けっきょく汚ごされてはこちらの負けだ。さわらぬ神に祟りなしと云う訳で、この辺なら大丈夫だろうと思うところへ、早くから遮けているのである。政治悪は斯うした弱い人間を日に日に多く作って行くようである。そこにこの句の穿ち味が存在する。

〔三五六〕

釜ケ崎（西成界わい）バクダンと云う酒を売り

（満潮）

焼きうち事件でスラム釜ケ崎は有名になった。しかし、それはもともと彼等釜ケ崎住人の純情が、世間やポリスマンの白い眼に対する反抗的のあらわれでもあり、バクダン的なノロシでもあったのであろう。そこへバクダンと称する酒を売っているのに作者は興味を感じたのである。

バクダンと云う酒は飲んだことがないので詳しくは知らないが、聞くところによると、日雇人種愛用の酒で、云うまでもなく密造酒である。サイダー瓶一本が三〇円、ビール瓶一本が四〇円で売っているそうだ。石油の匂いがして、終戦当時のカストリの味だと云うことだ。それを飲むと足を奪られるだけでなく、前後不覚に酔ってブッ仆れ、道バタであろうと、どこであろうとゴロゴロと転がっているさまが、戦時にバクダンにやられた状態に似ているので、この酒の名がいつのはどか、バクダンと呼ばれるようになったものらしい。しかし近ごろのものは目が潰ぶれたり、死んだりすることは余り聞かないが、常用していると神経系統をおかされ阿呆みたいになるそうだ。

〔三五七〕

粂仙がまたも落ちそうシームレス

（光郎）

近ごろの女性が、ショウトスカートにシームレスストッキングの姿で電車などに乗っているのを見ると、久米の仙人でなくともフラフラと来そうである。そこをとらえたのがこの句である。

次に、久米の仙人のことを少しく述べておこう。彼は大和の人で、深山に入って仙法を学び、神通力を得て大空を自由自在に飛行することが出来るようになった。ところが、ある時、故里の空を飛翔していると、小川で浣衣を踏んでいた女の白い脛を見て俗心を生じた。途端に神通力を失い墜

落したが、発心して、その地に伽藍を建立したのが久米寺であるとの伝説がある。

そこで、この句はシームレスストッキング（縫い目なしの靴下）の女性が、白い脛をあらわに見せているのを見て、久米の仙人がまたも落ちそうだと皮肉ったのである。

〔三五八〕

四選さすほど人材にことを欠き

（圭井堂）

アッチの市長、コッチの市長が、四選に立候補して当選している。新聞などでは、それを評して、現職は強いと云っている。この強いは市長として最適任者だと云う意味ではサラサラないので、この句が生まれたのである。四選のウラを考えると人材に乏しいのが原因だと云うのである。

〔三五九〕

飯よりも好きと三振ばかりなり

（文　庫）

「野球は飯よりも好きです」と云うのでやらせて見ると、三振ばかりだった。野球マニアをコキおろした句だ。近頃は日本の津々浦々まで、斯うしたマニアが子子のようにわいているので、この句はイキイキとする。三振は野球語。

〔三六〇〕

勉強へ停電バンザイ叫びたし

（虹　要）

勉強、勉強と近ごろの子どもたちは夜遅くまで本と首ッぴきだ。

たまたま停電にブッ突かると、明日は試験だと云うのに、困ったなアと云うよりも、バンザイが叫びたいぐらいだと詠んだのである。勉強し続ける子どもたちの気持ちを巧みにキャッチしてると思う。

〔三六一〕

よく見るとそばかすがある百合の花

（太　柳）

百合の花に、点々と斑点のあることは誰れでも知っているが、それをそばかすと見たところに作者の創意があって面白い。ちょっと美人の顔にそばかすのあるのに似ているからだ。このスポットがあるので、百合の花の美を一層印象的にさせる効果があるとも云えよう。「よく見ると」の上五がこの句のヤマである。

〔三六二〕

うちの娘のデモをたしかに見て戻り

（柳　志）

「おうちの娘さん、共産党ですか」

「めっそうな、うちの娘は人前では大きな声で話もしない子ですよ」

「でも、デモに加わっていられますよ」と聞かされ、あわてて出かけて見たら、成る程なるほど、プラカードをかついで先頭に立っているのは、まぎれもないわが娘だったと云うのである。いつの世も、うちの子に限ってと思うのは親ごころで、子どもは常に親を踏み越えて巣立ちしようとするのが定石のようだ。

〔三六三〕

定年のあとは名刺もメモがわり

（草　右）

定年になった。ホッとした。ヤレヤレである。しかし毎日犬や猫の相手ばかりもしていられない。

机の掃除をする。在職当時の名刺が二、三枚出て来た。まだこんなにも名刺が残っているのにと思うと、一寸シャクにさわる。マア、メモがわりにでも使うことにしようと思ったと云うのである。さし詰め食うのには困まらなくても定年後の所在なさを名刺を借りて巧みに描き出されている。

〔三六四〕

申訳ないでは仏浮ばれず

（井　蛙）

三河島事件のような事故で、多数の死傷者を出した場合、その当事者や監督者が、きまり文句で「申訳けがありません、深くお詫びします」と云うが、そんな言葉で仏が浮かばれるものではないと作者は公憤を感じて、この句を生んだのである。辞職や戒告ぐらいで取りかえせる問題ではないからだ。

〔三六五〕

見さかいもなく豌豆はすがりつき

（牧　人）

なかなか面白い句だ。たしかに豌豆を凝視している。一寸、擬人法の句のようにも思えるが、擬人法でなく、豌豆そのものを詠んだとしても、そのものズバリと云う表現で、しかもユーモア味を感じる。

〔三六六〕

外語カクテルオトイレには恐れ入る

（柳　葉）

ムヤミな造語は心ある人々のひんしゅくを買うに過ぎない。この句はトイレットにオをつけてオトイレと云うカクテル式造語をやったのに恐れ入ったと、一ト太刀あびせられた訳である。アルサロなども外人には通用しない。外地にいる日本人にアルサロて何んですかと聞かれ、アルバイトサロンだそうですと云ったら「へへー」と云って驚いていた。とにかく、日本人にしか通用しない外語はなるべく造ってもらいたくない。作者でなくても恐れ入る。

暑中御伺

麻生路郎

川柳塔

大阪市　市場没食子

停退へもう早いもの夏が来た
現実に勝てず予算も組替えさ

西宮市　若本多久志

金づまり重役室は低気圧

還暦記念旅行記

会費前納ドシャ降りを旅に出る
海女二人物価値上り話しとり

大阪市　正本水客

自分をさとす言葉になってやめる
海が盛り上って見える小さな湾の灯
僕は中立という嫌らしさ

大阪府　西　いわを

インテリと云われて語学には弱く
歯医者ではあくびも出来ず掛けさされ
長寿法老らくの恋してるなり

大阪市　北川春巣

ドライバーの余裕をくわえ煙草に見
労演だ労音だと夜の部がせわし

京都薪能所感

後学のためも来ている薪能

ホノルル市　築山快夢起

新聞社糊と鋏の記者も居り
孫が来てみな平げる稲荷ずし
十指に余る孫には青い眼も交り
ワイキキで日焼けも仰山金が要り
失業のパパも休暇と子は思い

ワイマル　羽佐周柳葉

男の子末恐しや酔った真似
親の眼の届かぬ距離に子は育ち

堺市　吉田圭井堂

口には出さぬが軍人墓地の広さ
盲腸に似た参院で棄権され
核持たぬ日本花火で憂さ晴らす
半歳もかけてもみ手で貰ろた鮭

防府市　長野井蛙

警察の無腰一入頼りなし
お膳立て出来たでボスが顔を見せ

岡山県　直原七面山

暖房でまた旅物(タビ)を読む社長
ビタミンがどうのとBG囁んでい

鳥取県　河村日満

終着駅車掌キョトキョトして廻り

有馬温泉にて

日が暮れて人待ち顔の筆こけし

大前鳴恍君を悼む

道草のながさよ君の訃も知らず

豊中市　足立春雄

盗む眼を知ってタイトの膝を組み
百匁種だけ買ったような枇杷

大阪市　木村水洞

雑草の強さを長屋持ち合せ
鍬を持つのが阿呆らしい程ひらけ
女房が病んで電化の有難味

大阪市　真鍋一瓢

至上主義称える姉はまだ嫁かず
端近に居るを帰さぬマダムの瞳
引込みのつかぬ倍増論だった
小人数になったこの頃縁を出し

大阪市　後藤梅志

一太郎ヤーイも嘘だったとは淋し
入学金父の小切手貰って来

満潮君の続西成界わい

よう種が切れん捨身の君をみる

米子市　小西雄々

早乙女の尻へ一礼する候補
また父母の生年月日すぐ忘れ

大前鳴悦氏逝く

打吹の山の柳も雨に濡れ

大阪市　山川阿茶

六等身シャツもパンツもラージ買い
女世帯隣が癪な話する
しかれても流動食でも生きてたい

大阪市　金井文秋

初孫を見せに来るまで待っとれず
本屋の蔵書たずねて来れば売るつもり
父の日へビールをおごる程になり
どこかが狂うてるのかツイストに夢中
公立へ行けるすれすれに親あわて

加賀市　那谷光郎

オブザーバー隅で鼻毛を抜くもよし
草生やしときや売れ売れ売れと地価上り

大阪市　福井野迷路

趣味きかれまさか散歩と云えもせず

岡山市　浜田久米雄

計画のとおりにえらい人が来ず
猛暑米色気を捨てた日がつづき
急坂へ車の中もちと力み

大阪市　水谷竹荘

旅便りダブルベッドの中で書き

鳥取市　杉谷湖山

月並みな文句を拝啓からつづけ
ハンターの空を保護鳥軽う行く

或る温泉場にて

惜しみなく混浴に女脱ぎすてる

奈良県　飯降白香

蹴散らして餌をむだにする鶏がいて
死体買う約束で待つその臨終

岡山県　福島鉄児

城崎にて

門限を聞いて出て行く宿浴衣

岡山市　服部十九平

東京の流石に厚い電話帳
ゴム靴を買えば子供等雨を待ち
レインコート買えないままに梅雨があけ

西宮市　若林草右

第二の人生肩書なしで始める気
恋語る播磨屋橋は汚なすぎ
譲られて座って顔髪(あたま)なでてみる

広島県　山田季賛

オコゼのような仲居やっぱり話好き
からくりの暮しと知らぬ故郷の母
上役に青汁飲みなとすすめられ

大阪市　山本葉光（遺句）

ガイ骨の言葉ガチガチ総入歯
ガイ骨が黒猫抱いて夢を見る
ガイ骨の食欲冷たく澄んだ水
霊鬼の透明となる朝の蓮
霊魂に原水爆の音もなし
霊魂に愛人があり逢いに行く

岡山県　田村藤波

蔓豆の素直さ杖にすぐ縋り
参観日委員の母の顔が栄え
薬にも飽きおがみやの口にのり
少しぐらい煙たい父でそれでよし

岡山県　本田恵二朗

墨染めに喜寿をつつんでこせつかず
子を褒めおうている　にらみおうている
毒舌のやりとり果ては泊らされ

京都市　松　川　杜　的

地球儀の一点ともかく俺は生きている
矢車も廻らず三十六峰雨の中
平行線に終る恋とはつゆ知らず

堺　市　高　崎　雄　声

明治の眼に無愛想もの足らず
百円札パチンコ玉になる不服

島根県　藤　井　明　朗

里帰りつめたく帰す男親
旅好きの夫へ妻もあきらめる

岡山県　永　松　東　岸

男の子すぐ金槌を探し出し
人間も一緒に会社ごと売られ
勲章が父の形見にあるばかり

倉敷市　野　田　素　身　郎

子沢山あみだの菓子を持ち帰り
欠伸してても部下の挙動はよう見とり
猫の額ほどを耕す旧地主

次子出生

リボンでも着けねば男と見まがう子

大阪市　木　村　十　悟

五六年あそぶ大学良いところ
飲むための喧嘩へ文無し口を出し

大阪市　伊　達　堰　子

風鈴屋えげつない露路振り返り
間に合わん犬と散歩に掃き出され
一票売らず断乎母屋にもそむき

大阪市　不二田　一三夫

自称詩人当用漢字がわからない
白紙投票声なき声の怒り込め

兵庫県　酒　井　ひ　か　平

ちょいとネとボクサーくずれ腕を見せ
一と言も妻を語らぬ愛妻家
ガスライター鼻焼くように点けて呉れ

菅屋市　丸　川　初　甫

奥さんのことも聞いてマダム如才なし
成長の記録末っ子まではせず

唐津市　新　岡　回　天　子

未亡人よこから見れば処女のよう

岡山県　池　田　古　心

釣日和などと雨降り家に居ず

大阪府　早　川　清　生

機の町子の描く母も糸を繰り
孤児院長笑顔つくるを武器とする
整肢学園かくれるように母がくる
サーカスで育ち十四で恋を知る

大阪市　西　田　柳　宏　子

ヤミタクの方が親切らしくみえ

堺　市　辻　　圭　水

どんぴしゃりあてて気象台寝てられず
籍おいた課で一生の運不運

岡山県　野　々　口　美　舟

桐下駄がちびて息子の嫁を決め

西宮市　小　浜　牧　人

ピッチャーへ野次言論は自由なり
ベレー帽をかぶり院長休診日
漁師町たばこの剰銭も生臭い

名古屋市　菱　田　満　秋

もう帰る酒は一気に飲みくだし
コカコーララムネの方が安かった

岡山県　池上知恵美

へそ曲りへ似ても似つかぬ子が生れ
途中下車コケシをあげるだけに降り

末ッ子が嫁いで

只猫の毛のみ掃き出す部屋になり

奈良市　宮口笛生

三河島職場に重い空気満ち
三河島機関士として思うこと
冷静にもどり轢死の始末する
興奮のさめない助士は降りて来ず

大阪市　西川晃

入試の子あって家中殺気だち
寝室を覗いたように書く「実話」
薄馬鹿に勿体なくも暇があり
怖そうにバスから観てる釜ケ崎
妻も児も捨てておかまの群に入り

鳥取県　田中蛙眠子

浮気にも定年制あり背のまるさ
中学生もうパパの才軽う見る
腰に灸すえて田植に耐え抜かん

岡山市　林葵丘

粋ということが判った地味な髪
遊説の予定食当りで狂い
子を叱る梅子の頃にたべた梅

神戸市　仲どんたく

赤電話へ折詰忘れて行かはった
寂しさをかみしめひたる場末の灯

平田市　久家代仕男

ツイストを真似て婆やを寒がらせ
ふたこと目からは面子で押し切られ

大阪市　本多柳志

男子一生の仕事と子らは見ておらず
正直は賞め作文は手を加え
大物が来るとよろめく浮動票

出雲市　原独仙

謙遜をして代筆のペンを執り
歯ブラシをくわえカナリヤ生んだこと
保険屋の根気へ頑固な父対す

西宮市　野呂鵜汀

子が死んで乳房悲しみ増すばかり
衛生に悪いとキッス拒まれる

西宮市　樋口舟遊

腰掛ける石も商いに馴れ定まる

新潟県　高野むじな

多数決俺も一人前になり
会計課しゃれの通じぬ人でよし
比較するくせも家の子隣の子
五カ月の子に盛る夢が多すぎる

大阪市　石倉旅風

中之島地上げを試すほどに降り
純情とそうでないのがしたキッス
裁判をしても悪玉勝ちにけり
エゴイズムむき出しに乗る往きかえり
国民の一人で無いよな政治する

大阪市　魚住満潮

続西成界わい

身分証明質札もついて出る
丸刈になって前科者の顔
指先の器用をスリは悲しがり
口八丁自分の姓名さえよう書かず
通天閣がもう見おさめになる手錠
陛下はんと同じ年やとキップ売り
自殺確認一番電車通り過ぎ

死刑求刑女さっさと席を立ち
愛媛県　村上旭童

ブームか知らんが易者ひそといる
うちの妻病気するとは知らなんだ
神戸市　傍島静馬

派手な服着ている方がおやじなり
母の日にちち父の日の念を押し
託児所のようにばあちゃんあてにされ
出雲市　野村岬月

カロリーで姑さんをだまらせる
大阪市　仲谷ハナ子

親心電話へ坊やも馴れさせて
姫路市　植村客遊子

うっぷんをビヤガーデンへ置いて来る
共稼ぎしてて旅行もよう行かず
布施市　森下愛論

第三者になれば案外楽に言え
双肌を脱げば寂しきあばら骨
大阪市　河井庸佑

斬られる役の苦労観客見てくれず
雲行きが変っているのに気が付かず
松江市　小林孤呂二

親の目で先生良し悪しはかられる
大阪府　谷沢好祐

新民法遺した家を割れもせず
歯入れ屋を見付けた南地の朝の軒
ツイストの腰が若さをまきちらし
泉大津市　高津徹也

寝間着姿の貴女に看病してみたい
天国に行ける資格のある乙女
愛媛県　槇紫光

銅像の顔さえ汗が出そうなり
揚げ足を取るのが好きで出世せず
あたためていたアイデアを出し抜かれ
誘導の車掌へ雨は容赦なし
青森市　工藤甲吉

半ば許し半ば拒んで悩ませる
金へ嫁くことに三十決めている
玉野市　伊原明林

プロポーズまだかまだかと薬をむしり
水着ショウ浮気しそうな顔並び
酔ってたかどうかは服が証拠なり
小松市　関戸宗太郎

立ち話貞淑にほど遠い妻
バスガイドきようのお客は困らせる
景気よいのが田甫買いに来る
豊中市　林夢虹

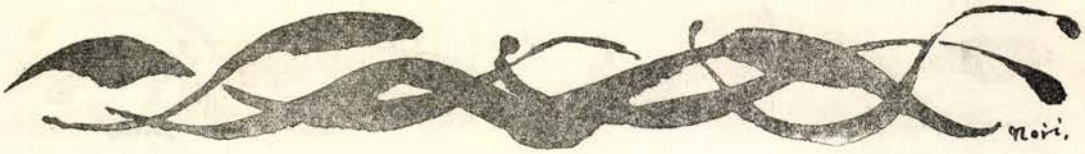
一日を父といて何も語ることなし
酒のみになって出稼ぎから戻り
西宮市　山本一傘

ぬるま湯で風邪も引かずに平社員
大阪市　今西生蓋

停年へ長距離選手となる入社
嫁さんがとお年上の披露宴
京都府　室井八九寸

入神のその技絶賛浴び貧苦
薪能お義理も見栄も神妙に
通訳は自己の理論も織り交ぜて
お誕生祝いも会社の交際費
岡山県　横山一声

トランジスター持って田植のつなを引き
目覚時計赤ン坊だけが目をさまし
国宝のかべにチュイーンガムがつき
小松市　関戸宗太郎



失政を集金人へまだぼやき
ベレー帽お弟子の方がよう似合い
予期しない勝利へ応援団あわて

石川県　高山凉髪

選挙事務所あんないい娘がすわってる
ガガーリンせまい日本をほめて去に

美祢市　安平次弘道

養老院昔の良さを愚痴にする
なさぬ仲などと近所が波立たせ
行倒れの予金の高がニュースにし

宇部市　平田実男

公用で受ける講義のねむいこと
坪万の土地で赤字の麦が熟れ

大阪府　高橋尚史

クラス会恩師をオイと呼べる酔
代読の祝辞生徒は聞いとらず

大和郡山市　中内孚彦

観光ブーム寺に有料便所出来

貝塚市　杉本一鶴

根負けをしてカヤをつる午前二時

大阪市　本多清人

部屋代はためてキャバレーのナンバワン
ドレミファソ親の欲ほどうまくなし

富田林市　浅川八郎

金のかたそれが形見となりにけり
漁夫昂然天気のことなら俺に聞け
新築へ急に白髪が多くなり

同舟近詠

大阪市　橋本緑雨

金沢へ来て
十三回忌ともなるとみんな朗かに
田植から帰える紺絣若く見え

長野県　高峰柳児

子に頭あがらず老らく続けてい
倦怠期テレビに気まずくくすぐられ
リバイバル年増は派手に声を張り

東京都　阿部佐保蘭

駅名も入れて記念に一つ撮り
初孫が出来血圧も気にならず
ガガーリン自宅であえば只の人

和歌山市　秋月宏方

二重橋わらじの足をまだ知らず
旅情楽し浜にさざえを焼く匂い

今治市　長野文庫

悪党の墓前に誰がたてた花
晩年は良いとの易を信じたし
気にならぬたちで重ねて借りに来る

大洲市　米沢暁明

いつからか亭主夜行で帰る癖
手さぐりという就任の御挨拶
肩書が増え良心が薄れかけ
貧乏の支えギターを手離さず

松山市　月原宵明

おせっかいばかりで田舎なお狭し
病院の窓から倖せばかり見え
シャーベットトーンあじさい赤い蟹
ビール冷やしましょうと子がせがみ

名古屋市　長谷川鮮山

取りのけたとこへちょこんと建つ飯場
心では拝んでいます意志表示
金にもの云わせてその座実力者

芭蕉に返れ

山路閑古

哲学界には、「カントに返れ」という標語がある。カントは十八世紀に現われた、近代哲学の開祖といわれる大哲学者で、「カントに返れ」とは、この大哲学者の権威を表彰する言葉であるが、実際には、カント以後哲学界が屢々混乱に陥り、人々が相警めて「カントに返れ」と叫んだ。それが常套語化して、この標語になったと伝えられる。

その筆法を用いて、ここでは「芭蕉に返れ」という標語を持ち出して見た。俳句、川柳のような短詩文学界に於ける先覚者として、カントに相当する人物を求めるとすれば、それは問題なく芭蕉に落着くであろう。

芭蕉以前にも、宗鑑や貞徳などの傑物がないでもないが、後世に与えた影響の度を考えれば、鑑・徳いずれも芭蕉の比ではない。宗鑑研究に関する著述は、今日までに僅かに十種をも出でないと思われるが、芭蕉研究の書に至っては、すでにそれだけで図書館が出来る程沢山あることでも知られよう。

「芭蕉に返れ」とは、俳聖芭蕉の権威を表彰する識語であるが、同時に芭蕉の昔に返って、吾々の考え方を立直す必要が屢々あることを示唆するものである。

一頃川柳界には「柳多留に返れ」という標語が行なわれた。それは「柳多留」によって川柳の本質を見極わめ、その上で伝統を守るなり、それを乗り越えるなり、保守・革新それぞれの態度をきめよという警告であった。川柳という名称を用いて仕事をする以上は、必ずその手続きを踏まねばならず、何も知らずに無手勝流で、革新川柳など唱えたりすると、存外それと同じような趣旨の句がすでに「柳多留」にあったりする。これは甚だ体裁の悪いことであるから、一応は「柳多留」を見て置きなさいという忠言でもあったようである。

この忠言は、その後ぽつぽつ反応をあらわし、柳界こぞって真剣に「柳多留」の再検討を試みるに至った。まことに慶賀の至りで、私なども双手をあげて賛成し、益々研究熱の旺盛ならんことを望むものである。

それはそれで結構であるが、それとは別に、近頃は又俳句と川柳が混線し始め、俳句・川柳どちらの雑誌を見ても、俳句とも川柳ともつかないものが並び、その量は号を逐うて次第に殖えて行く傾向にあるようである。殊に昭和以後に生まれた若い作家群は、殆ど俳句・川柳の区別を知らず、俳人の癖に川柳を作り、逆に川柳家が俳句を作り、その間に区別を置かぬのみか、その理想とするところは、いずれも「現代詩」であって、すでに「現代詩」の中に包摂せられることを、こい願うているように見える。

俳句と川柳との間に、このような混乱を生じつつある場合に於ては、最早「柳多留に返れ」というような警告では間に合わず、更に一段と遡って、「芭蕉に返れ」の標識を掲げ、これを俳句界と川柳界の両方に示して、反省を促す必要があるのではないかと思われる。

「芭蕉に返れ」とは「芭蕉俳諧」を見よということに他ならぬ。「芭蕉俳諧」は、万葉・古今・源氏・謡曲・浄瑠璃などと共に、日本文学のピークにある最高水準の文芸で、その亜流である俳句・川柳は、伝統のお蔭で文芸に繋がっている。こういう系譜がなければ、片々たる十七字詩は、よしこの、へなぶりなどと同じように、たとえ一時の流行を見ても、文芸としての永い寿命は保ち得ないであろう。このことは誰も知っているから、俳句も川柳も、共通の源泉である「芭蕉俳諧」を先祖に持つことは誇としているが、その癖「芭蕉俳諧」の内容というものは、あまり知られていない。正直のところ、現代人には極めて耳遠いもので、このような、エラそうな警告を発する私でさえ、実はそんなに委しく知っている訳ではない。

ここでは必要の程度に於て、その作品を展示し、又私の理解している範囲に於て、解説を加えるというのに止まる。ともあれ、御一覧を戴きたい。芭蕉の晩年の、円熟した連句作品を集めた「炭俵」の「深川」と題する一巻を取り上げ、これについて若干の所感を記することにする。

①空豆(そら)の花咲きにけり麦の縁(へり)　芭蕉

②昼の水鶏(くいな)の走る溝川　孤屋

③上張りを通さぬ程の雨降りて　岱水

④そっとのぞけば酒の最中　利牛

⑤寝所に誰も寝てゐぬ宵の月　芭蕉
⑥どたりと塀のころぶ秋風　孤屋
⑦きりぎりす薪の下より鳴き出して　利牛
⑧晩の仕事の工夫するなり　岱水
⑨妹をよい所からもらはるる　孤屋
⑩僧都のもとへ先づ文をやる　芭蕉
⑪風細う夜明け烏の啼きわたり　岱水
⑫家の流れた跡を見に行く　利牛
⑬泥鰌汁若い者よりよくなりて　芭蕉
⑭茶の買ひ置きをさげて売り出す　孤屋
⑮この春はどうやら花の静かなる　利牛
⑯枯れし柳を今に惜しみて　岱水
⑰雪の跡吹きはがしたる朧月　孤屋
⑱ふとん丸げて物思ひゐる　芭蕉

俳諧は連句とも呼ばれ、長句（十七字）と短句（十四字）とを交互に三十六句並べて、これを歌仙一巻という。ここにはその半分、即ち半歌仙を順に並べ、第一句から第十八句までを記した。

①空豆の花咲きにけり麦の縁　孤屋

とあるのは、連句の第一句で、これを発句という。発句は、「十七字」の長句で、「季」と「切れ字」を含み、そして「文語体」で記される。「芭蕉俳諧」のすべてを通じて、発句は右の形式を備え、殆ど例外がないから、すでに芭蕉によって、そのように性格づけられたものと見られる。「季」は「季題」で、この場合は「豆の花」を夏の季としている。現代では「豆の花」は春の季題とされており、恐らく当時も同様であったと思われるが、一方に「麦の縁」とあり、すでに穂麦の伸びた様であるから、この句の季感は晩春、初夏である。それ故②の脇句には、夏季の「水鶏」を持ち出し、発句と脇句は同季でなければならぬという規約と睨み合せ、「豆の花」が春から夏へと移されている。

芭蕉当時には、「季題」というものが、このように活用変化され、幅のある面白い工夫が加えられていた。「芭蕉俳諧」には随所に、このような「季題」の活用が見られるが、後世にはこれが規則化され「季題」を春夏秋冬に分けて、動きのないものにしてしまっている。今日の「季題」の制約に疑いを持つものは、もう一度芭蕉に立ち戻って、「季題」を検討する必要があるというものである。

次に「けり」とあるのは「切れ字」であって「切れ字」にはこの他に「や」「かな」などがある。これらの「切れ字」は章句のピリオドを示すもので、独立単句たり得るしるしである。そして「口語体」には、「切れ字」は絶対に使用されない。発句は「文語体」であるから、発句に限り「切れ字」が見られるのである。

「十七字」「季題」「切れ字」「文語体」の四つの制約によって固められたものが発句であって、発句は明治になって俳諧から単離して、俳句と呼ばれるようになった。しかし四つの制約はそのままであるから、今日の俳句も元祿の発句も、何等変化がない。右の「空豆の」の句のようなものが、現代の新作にも依然として見られるのである。

それはよいことか悪いことかは別として、俳句はこのような制約がある為に、発句・俳句を通じて、三百年の生命を続け得たのである。制約を変えない限りは、今後とも永続し得ることが期待される。

②以下の全部、即ちこの場合の十七句を「平句（ひら）」という。「平句」には「十七字」のものと「十四字」のものとあり「季」のあるもの、ないものさまざまであるが、一貫して「切れ字」を含まず、殆どすべてが「口語体」で記されていることは注目に値する。

「平句」が「切れ字」を含まないのは、ピリオドがないことを示し、各句が厳格な独立章句になっていないのである。それは隣接の句が相互に関連し合う必要上、そのような形式が採用されているのである。

試みに、右の十七句の二三について、説明しよう。

⑧晩の仕事の工夫するなり　岱水

「十四字」の短句で、無季である。句意はあまりに平凡過ぎ、単に軽いというだけである。

⑨妹をよい所からもらはるる　孤屋

「十七字」の長句で、同じく無季である。やはり平凡な世俗を写し、特に面白味も感じられない。けれども⑧⑨と二つ並べ、且つ両者の間に関連があるものとすれば俄然面白味を生じて来る。

⑧の「晩の仕事」は、⑨の嫁入支度の蒲団など縫う、あわただしい家庭の動きが描かれていることになる。

⑨の「妹」とあるのは、兄のところに引き取られ、良縁もなくて、くすぶっていたその妹に、降って湧いたようなよい縁談があったというのである。兄の家庭では、厄介者が片着くというので、愁眉を開き、一家協力して準備の仕事に掛っている様子である。このようにして⑧と⑨とは、互いに関連して、興味を盛り上げ、一種の共鳴作用を示すことになる。

「平句」というものは、それ自体はあっさりと軽く作られるが、二句関連すると、著しく躍動す

伺

暑中御

中島生々庵
大阪市南区鰻谷仲之町二〇

若本多久志
西宮市津門西口町五〇

松江梅里
大阪市阿倍野区松崎町三ノ一〇

森繁と飲む

東野大八

〝社長道中記〟のロケで、森繁久弥が岐阜にやってきた。地元有志が一夕、彼と小林桂樹、藤原釜足二人もまじえて盛大な歓迎会をやった。

森繁センセイとは、そのかみ、ぼくが大陸時代、新京でまんざら知らぬ間柄ではなかった。

あれは昭和十四年ごろだったか、とにかく彼は満洲放送協会の一アナウンサーに過ぎなかった。放送局といってもでっかい満洲電電の一部に部屋があって、関東軍第四課の指揮下に入り、一にも二にも国策、国策で味もスッポもない放送をやらかしていたころのことだ。

この電々会社にはうまいものを安く食わせるので知られるグリルがあった。そのホールが好きではとんど毎日のようにそこを訪れた。一つには電々の建築課長を勤め、川柳人であった奥本唯然さんがいたことにもよるが、いま一つはぼくと机を並べていた婦人記者のOさんが、うちの社をやめ放送局文芸部に籍をおいていたことだ。

このOさんは、ぼくといっしょに働いていた当時、満洲国の一官吏と恋愛関係に入った。双方大分アタマへきていたことだが、Oさんが東京の女子大を首席で出ている才媛にくらべ、彼氏の方は旧制中学中退、学力と資力の不均衡が双方の家庭でくすぶって、結婚は絶対反対ということになっていた。この二人を無断で同棲させ、愛の結晶が生れたところで双方の顔合わせとなった。この作戦をたてたのはほかならぬぼくだった。

そんなわけでOさんところへはよく顔を出した。（このときはまだ非公認の仲でこどもも生まれていなかった）

「アナ部にモリシゲというそりゃあ面白い人がいます、どこか大八さんとピッタリやわ」

とある日Oさんが言った。どうも〝面白い同志〟とアカの他人にいわれると、気分が会わないものである。そのうちに紹介してよ、でその時はすんだ。

ところがぼくの友人が現地除隊して「干柿と戦車」というラジオドラマをやった。その評判がいいのでぼくも征軍記者の体験をもとに「ある戦場」というのを書かされた。その放送打ち合せ会で、計らずも登場したのが森繁さんだ。いくらしゃべるのが商売といっても、彼氏はその水準を越えていた。当意即妙、へたな漫才師ハダシである。この男がぼくの作品のナレータにでた。

「なるほどキッウ、おもろい男や」

と後でOさんにいったことだが、機関銃のように口からとび出すギャグやシャレを扱いかね、それっきりのことになってしまった。

さて、その森繁センセイを迎えての歓談だが、こちらは雲霧バクとなった大陸の思い出など一切口にせず、ただ初対面の顔付で他愛なく飲んだりしゃべったりした。

「石原の裕ちゃんがね、酔っぱらうと〝枯すすき〟をやるんだ、わしの版権をとっちゃイカンね、といったことだがね」

る。それ故句自体には、何の制約もなく「十七字」乃至「十四字」を以て、極めて自由に無造作に作られる。そして狙うところは、勢い人間生活である。

「平句」は「発句」と違って、「季」や「切れ字」などの規約のない替りに、独立性に乏しいもので、これが独立して、一本立の川柳となるまでには、各時代に於て、幾多の困難を経過したことであった。決して「俳句」のような、平坦な道を歩んで来たのではない。或る時は「前句附け」と呼ばれ、「俳風」と称し、「狂句」と称し、明治以後は「川柳」となった。「川柳」となって後も、「俳詩」「草詩」「諷詩」などの提案があり、更に「詩川柳」「本格川柳」など――要するに「平句」が独立する為の、苦難のあがきを示すのに他ならぬ。其処へ「俳句」が越境して来て、昨今は一層混乱の度を深めた感がある。

けれども「芭蕉俳諧」の中では「発句」も「平句」も整然と所を得て、文学を形作っていたのである。その「発句」が「俳句」となり、「平句」が「川柳」になったという事実は動かし難い。俳人も川柳家もこの事実をしっかり摑んで、もう一度「芭蕉俳諧」に立ち戻って、検討して見る必要があると思う。

私は毎年「読売年鑑」の川柳記事を執筆担当している。「川柳」は詩歌篇の最後尾にあり、其処には「詩」「短歌」「俳句」「川柳」の四項目が並んでいる。「川柳」の項目は私が執筆するようになって、初めて追加されたものであるが、折角加えられたこの項目を消されないようにと、過去十年間に亘って、川柳界は相当に努力を重ねたことである。川柳記事以外の執筆者は、毎年顔触れが変るのであるが、川柳だけは十年一日の如く変らない。私以外に執筆者がない訳ではないが、矢鱈に投手を変えないのは、監督であるダッグアウトの川柳界無言の総意によるもので、今、投手を変えると、川柳が文学詩歌からノック・アウトされる危険があるからであろう。それ

暑中御伺

岩崎愛二

京都府乙訓郡長岡町梅ヶ丘二丁目三十八番地（阪急京都線長岡天神駅下車）

といったのをマクラに、彼、大いにゴキゲンで牧水の〝白たまの歯にしみとおる〟を森繁節でうたい出し、つづいて詩吟つきの黒田節に入った。

これがすむとエロばなし、新潟で八十四のおばあちゃんといっしょにフロへ入った話をし〝これもわしの大好きな女の端くれかと思ったらナミダが出ました〟といって、同じ新潟で後家さんの赤い長じゅばんに詩を書いた一席に移った。ところが、座中にいたさる会社の女社長さんが、

「あたしのにも書いて……」

といきなり裾をまくったことである。

「よろしい」

と快諾一番、床の間に用意のすずりを引きよせて、薄くれないの結構な長じゅばんを引きよせ、シワ押しのべてサラサラと書いた。

「むせぶ涙を手にうけて悲しきことのなからしめや」

路郎先生のごとき名筆ではないが、どうやらみられる。

むっちりした膝小僧を固くそろえてその女社長、書き終るや小じわだらけの顔をほころばせて

「おおきに、おおきに……」

と大法主さまのお筆先をうけたほどのうれしがりよう。

ぼくのそばにいた年増の芸妓が、その様子をはじめからしまいまでアナのあくほど眺めていたが、やおらぼくに向き直ると声をひそめてこういった。

「バカねえあのおばさん、大事な下着をスミだらけにして……」

こちらも根がさもしい方なので

「あれ、買うとするといくら？」

「これだけはカタイ」

とその芸妓パラリと片手をひろげてみせた。

「なあ、皆さん、むかしの金持ちのお女中はよく役者買いをしたもんです。今日みたいにね。われわれ役者を相手に大いにのみ、うたい楽しんで下さい。われわれ役者はタダでおよばれさせて戴く以上、何ごとによらずユーボク精神を発揮して、タイコ持ちのごとく、ホーカンのごとくサービスするでありましょう」

そう筆なげすてて森繁センセイは言いとばすなり

「おい秘書、何しとる。こんどはお前がうたわんかい」

と小林桂樹秘書をつついた。スクリーンの主従を地でいって、ハイとばかりにかしこまった彼は、いきなり野上彰の〝銀座のスズメ〟をうたい出した。

「ねえ、あなた」

だしぬけにそういう声がぼくの耳元でしたのでふりかえったら、黄色いドーランだらけの顔の藤原釜足さんで

「名もなく金もなく汚ならしく、われわれはただ飲むだけ、大いに飲もうじゃあござんせんか」

「結構ですね」

といったら、向うから森繁センセイ、どう小耳にそれをはさんだのか「役者は孤独なんですよ、独りぼっちのピエロなんですよ」とスクリーンでよくみる、あの深刻ぶった表情を大げさにしてチョビひげをしわしわさせた。

「そうです、人気スターは孤独です、金に不自由はしませんからねえ」

とぼくもいうてやったら

「儲ければ儲けるほどハラがたつ、それは税務署ですわい」

大分おみきが回ってきたらしい。そういうロレツが時折ひっかかりはじめた、この社長危し、とみたか秘書が

「社長この辺で……」

と助け起こした。うん、そうだね、と起ち上った森繁社長、ふいとぼくに視線があうとこうつぶやいた。

「どこかでこの長い顔とあったことあるな、ハテ、いずこなりきや」

わたしもニヤリとしていってやった。

「つじつまの合わぬ男にして稼ぎ、川柳です」

「ははん、よく食べる奴にかぎって歯をみがき、そんな句おましたな」

續 川柳書架 (22)

故私は柳界の寄託を受けて、大事にこのマウンドを守っている。

俳句界、川柳界が混乱して、彼等の理想の如く「詩」の中に包摂されると、「年鑑」の詩歌欄も「詩」と「短歌」の二項目となって、「俳句」と「川柳」は消えてしまう。これでは決して詩歌の発展とはいえない。やはり「俳句」は「俳句」として、「川柳」は「川柳」として、伸びて行かなければならない。項目の数を殖やしてこそ、詩歌は発展するのである。「年鑑」川柳記事執筆者として、敢て一文を草した所以である。切に川柳の発展を祈る。

篠原春雨集

（篠原春雨著）

★巻頭には山梨日日新聞社の野口二郎氏が序「春雨老と私」を執筆されている。

★次に春雨辞世「門口へ出てもお礼は述べきれず」の真筆を凸版で掲載。

★目次は作品・川柳講話・随筆・落語・自伝。

★昭和二十八年五月二十日発行。B6版二七七頁、定価三百円。発行所、甲府市東一条通一五、篠原春雨集刊行会。

★著者は久良伎派の重鎮、昭和二十一年四月十五日に六十七才で没した。

全米川柳 自選句集

★巻頭には雁魚・鈍突・白津・玉兎・大州諸氏の序並びに矢形溪山氏の「アメリカ川柳の全貌を顧みて」が掲げられている。

★一九六〇年七月一〇日発行。B6版五七五頁。（非売品）編集、国次史朗。発行各川柳吟社（北米・素市・ポートランド・オンタリオ・エタ・鹿子・シエルトン・マンハッタン・桜府・桑湾・セコイヤ・つばめ）

★全米柳人の堂々たる自選句集であるが、よい指導者のないためか句に特殊性が稀薄だ。

コーヒの味
モダン川柳
心斎橋大丸北の辻東へ
御門
TEL(271)6684
御集会には階上御利用下さい

似せ銭のアイデア

石曽根民郎

「大阪さん、こんにちわ」
そう呼びかけると、恐らく
「おいでやす、いつお越しかいな」
と、にこにこ応待してくれるに違いない。そんな心安さも手伝ってつい、うかうかと勝を乗り出したくなる。
そうだ、私が川柳を始めた頃、こんな句が印象に残っている。

大阪は輦かれかけても好い　かほる所

いまでも交通地獄という嫌な言葉は消されそうもないが、右往左往、乗物は目まぐるしいほどに激しさをほしいままにしている。
輦かれかけてもやっぱり大阪はええわ、そうつぶやく郷土作家の面目が躍如としてくる作品。
和服の着流しで、ぞろりっと、そして白足袋の人だった。
話したことはなかったけれど、大阪弁でしんみりさせて、微酔のうちに大阪の持つ肌合いの現代川柳に就いても打ち明けて下さっただろう。

大阪でだまされたのも修業や　山雨楼

東京でといわず、大阪でとずばりきめつけたところに張りがあり、魅力がある。下五の「修業や」の訛りがよく利いている。
この人とは会った。川柳論を手紙でしばしば交換した。晩年、横浜におちつき、ご子息の追悼録の印刷を引き受けたことがある。
既に死期迫るを自ら知り、遺愛のものをそれぞれ恰好のひとにおくった。私もおくられた一人である。情熱の人だった。川柳への情熱も多感で、着実だった。
忘れられぬ人である。「番傘」で募集した「川柳の定義」に応募し、採用されたのはこの人の労作だった。
私は川柳を知ってまもなく、路郎さんを訪ねた。おじおじした気弱な若い日であった。

円タクを値引る手筈も添えてある　民郎

打ち合せに緑雨さんを煩わせた。遠くから来る私のためにいろいろ手紙でお世話の言葉をかけていただいた。そして序でに大阪の学友にも会った。

生きているんだぞと顔を持て来た　民郎

もう三十年も前のことである。
旅馴れぬ私にとっては大阪も東京も、いずれも大都会であった。東京の味、大阪の味と殊更なムードを味わい得なかった。ただ大都会だなあと思うくらいのお上りさんであった。
此頃になって大阪の川柳家、東京の川柳家のふれあいというものを分け感じる程度で、さして差別的な偏向を持てずにいる。それが私の性質かも知れない。東京の句、大阪の句の流れも、あるにはあるが、それが持ち味というものだろう。

木の芽あえ旦那もいける口でんな　没食子

不機嫌な上司にとも角すみまへん　貫一

これは大阪人の川柳だ。大阪ことばがあるからともいえる。平叙な句だけれど、この大阪ことばで救われていることになる。関西の地方色があらわれて面白い。

ごたこくでねえとへそくり解きもせず　実茶

これは松本地方の方言の句。なかなかわかるまい。若い者の気持をよく心得ているオバサンにおねだりをした。若い者はへそくりのあることを知っているので、ちょっとカマをかけて見た。「ごたこくでねえ」とオバサンはすげない。
「オバサン、いいオバサンだってね、千円貸してくれない。千円ではいけなかったら五百円だっていいのさ、オバサン、なかなか蓄めているってね、聞いたよ」からかっているみたいに、そそのかしているみたいに、打診するのである。オバサンもなかなかしっかり者。「つまらないことをツベコベ言うものではない。そんなことよりせいぜい精出すことだよ」と相手にならないのである。「ごた」は、つまらないこと、「ごく」は、言う。
このように説明がいる。大阪の「口でんな」とか「すみまへん」はわかる。浪花千栄子らのテレビ・ラジオのマスコミでひろく普及し、大阪標準語として全国的に浸潤しているからだ。
演技力ということもあるし、また広範囲に耳で聞く公開性もあったりして、浪華ことばは関西地方のひとでなくとも、結構娯しめる舞台にしたのは、浪花千栄子らの地についた大阪人の苦労がにじみ出るからかも知れない。好き嫌いはあろう。大味で、ネチネチしてやにっこくて、という批判はあろうが私はたのしい聞きものとしている。しかし、大阪特有の方言はあろう。「がめつい奴」など、演劇・ラジオ・テレビで知られたから「がめつい」という言葉の意味がわかるが、あれほど普及する前にいきなり「がめつい」と聞かされても恐らく判断に苦しんだことだろうと私は思う。
三益愛子、中山千夏のしぐさは絶妙で、がめつさを発揮し、がめつさを援護した。がめついという大阪方言が出たので、こんな句が思い出される。

大阪で夏も信濃をこきつかひ　安永七年　古川柳

今から百八十年ほど前の作品。
この句だけ見ると、さしあたり大阪商人のがめつさがピンと来る。信州から働きに行った田舎まる出しの者を、せいぜい酷使している風にとれるのである。恐らく今なら労働条件を改善せよとその筋からお達しがありそうだ。まことにゆゆしき問題である。
しかしこの句は大阪人のがめつさをそんな風にいおうとするのではない。時間外勤務や「女工哀史」の江戸版では決してないからご安心になっていただきたい。わけを話すとこういうことになる。
信州人は働き者で、農閑期だけ昔は江戸へ出稼ぎに行ったもの。

雁（かりがね）と共に連れ立つ信濃者　柳多留　一〇六

一団になりグループを成して行くので、椋鳥（むくどり）の異名があるほど。信州生れの民衆俳人の一茶が

椋鳥と人にいはるる寒さかな

とあるように、打ち揃って江戸に出てゆくけなげな人々の姿が目に浮ぶが、いつも群をなして棲み、その鳴き声がやかましいと言われる椋鳥そのままに、野暮ったく、そしてガヤガヤうるさかっただろう。

これだけの規定ではまだ本題の句はわからない。ここに真田幸村を登場させよう。真田幸村といえば信州上田城で名高い。幸村、幸村の父の昌幸、そのまた父の幸隆を「真田三代」といい智将のほまれは天下に響いたが、幸村が大阪方に加担し、大いに奮戦、いわゆる夏の陣で波瀾万丈の生涯を遂げた。

ここまでナゾを解いてくると大阪で夏も信濃をこきつかひ

がおわかりになるだろう。信州人は冬、江戸へゆくが、夏も大阪に行って大いにその名を高めたというわけ、作者の意図はそこにある。

真田幸村といえば猿飛佐助、霧隠才蔵の忍びの術で知られた勇士をはじめ、三好清海入道とか、根津甚八といった、いずれも一癖も二癖もある連中を思い出す人もあろう。

幸村の命を受けて、諸国を漫遊、数々の武勇伝をくりひろげる物語は、立川文庫で堪能した通り。

ところがこれらの面々は実在の人物であったかどうか、その点ちと怪しい。それらしい名は古文書にあるけれど、その活躍が語られるほど縦横無尽ではない。血湧き肉躍るようにしたのはさすが立川文庫の作者の腕で、ヤンヤといわせられた少年時代がなつかしいというもの。

幸村は大阪城で徳川勢を悩ませた。しばしばタヌキ親爺の愛称のある家康の心胆を寒からしめたくらい、幸村の戦略は文字通り智勇兼備であった。

こんな話がある。幸村は手製の自雷火を発明して敵サンを苦しめたというが、実はその自雷火はサツマ芋の屁をつめて作ったものだそうな。ほんとうだか、嘘だか、まことにクサイおはなし。

ところでニセ札がいまもって横行、全く物騒な世の中である。よほど悪だくみにたけた智恵者にきまっている。幸村はニセ札でなく、ニセ銭を横行させた。幸村、敗戦の色濃きを知って遂に地に落ちたかと早合点をしてくれては些か困る。

真田家紋は六文銭である。武具にこのトレードマークがついている。れっきとした真田一門をあらわす一種のレッテルともいえる。

似せ銭を三十六字真田出し　柳多留　三五

真田幸村の身代りとなった大阪城の戦いに活躍した影武者があるが、いでたちは幸村に似せた六人。みんな六文銭の旗指し物を使い、神出鬼没、幸村のロボットになってはうまく敵の目をあざむいた。幸村の考えそうな智略である。

ニセ札人種の野郎どもとは月とスッポン。

この句、6×6イコール36。

なかなかの御賢答。よくお出来になる。

さてこんなことがいえる。

猿飛佐助、霧隠才蔵の忍術使い、或いは珍妙な自雷火、算数テキスト用の影武者の登場というものは、太閤秀吉ビイキの大阪の人たちが作った話といえそうだ。徳川封建制を批判し、そのウップンを晴らすという手段で、そしてまたそうしたコースのうちに、大阪の人たちが作り、語り伝えたことになる。

その意味で信州人の私は大阪のこの民衆的な発言の辿りというもののユニークなつながりを高く買いたい。正直にいって感激だ。

幸村が、上田城が、信州が浮びあがってくるからである。

私は上田に住んでいないが、郷党のよしみで、やはり嬉しいのである。上田でなくてどこかと言われれば松本。先年「月見ヤグラ」で日本中を賑わした松本城のお膝元。

ジャーナリズムを湧かしたため、汚名どころか、かえって天守閣ブームを呼びおこし、観光客で押すな押すなの活況振りだ。

松本でまず案内するのには松本城、それにいいことにバックは日本アルプスである。夏でもよし、冬でもよしという地の利を得た景観だ。百五十年ほど前、「田舎樽」という松本で発行された句集のなかに

名所にもならで信濃の夏の雪

というのがある。

むかしは名所にもならないで、ただむなしく夏の雪をいただいた山々を、この土地に住む人たちだけで眺めていた。

いまはどうだろう、信州の山々は登山家のあこがれのまと、冬もまた夏は尚更、大勢各地からやって来る。この句は今と昔のへだたりが如実にいいあらわされて興味深いではないか。

酒
清
金露
灘・魚崎
大塚合名会社醸

いま日本アルプスの玄関として連日登山客で賑わう松本で、昔、発行された句集にある作品ということを考え合せると、なかなか効果的だと思う。

私は日本アルプスをバックにした松本城を案内するとき、よそから来た川柳家にはいつもこの句を引き合いに出して得意がるのである。

路郎さんが来られ松本城を観に行ったとき、相憎雨だった。

雨の松本にて

遠く来て信濃に山のない日なり　路郎

この名作が生れた。日本アルプスを見たいというのに、折柄の雨でかすんで遠望がきかなかった。残念だったろう。

その日、路郎さんを近くの浅間温泉に誘い、一緒に泊った。

ねざめには湯の香の窓へ師をさそい　民郎

まことに愉しい一日であった。

やはりこの浅間温泉の宿泊を頼まれて堀口塊人さんが見えたことがある。五月のゴールデンウイークの頃だった。講演を聞かせては川柳界随一の評判が高い塊人さん、どっしりかまえた黙然たる日本アルプスの偉容に対し

旅人へ雪のアルプスこれでもか　塊人

よほど夏の雪に魅せられたらしい。

あとでまた句を寄せられた。

信濃人　石曽根民郎無精髭　塊人

ザックバラン、風采にはこだわらない無精髭だが、来ればどこの川柳家でも大歓迎する。こころおきなく来とくなはれ。

「大阪さん、さいなら」

句評リレー

吉田圭井堂	鳥取市	鍋市
大西八歩	佐渡市	尼崎市
高野むじな	小林文月	樋口舟遊

因業な背なへ金庫の半開き

白星

圭井堂—「因業な背なへ」ですから質屋の主人でも銀行の支店長でもなく老眼鏡をかけた猫背の高利貸の応接間の風景だと思います。人一倍疑い深い因業な男が不要慎にも金庫を半開きにして置くでしょうか一寸気になります。たとえ書類の出し入れと言う短い時間でも一々閉めねば気の済まぬ癖も因業だと言われる原因の一つじゃないでしょうか。

八歩—僕はこの半開きの金庫こそ因業の因業たるゆえんであると思う。条件さえよければ貸してもやろうが、この半開き、仲々本開きにならない。札束の端をチラチラ見せて、金庫の前にドッカと坐り込んでいる因業な主人に、平身低頭の借主を想像する時、この半開きの金庫はいよいよ威力を発揮するだろう。然し実際問題として、危険をはらむ半開きの金庫を持って来た事は、舞台装置がとのいすぎてる感じである。

むじな—二つの意見を読んで金庫というものを考えて見た。銀行、事務所の金庫は執務中は全開だし旅館、商店の金庫は日中も普通に閉めたままではないだろうか。とすると金庫の前にどっかり坐っている因業な金貸にして、半開きの金庫が因業らしい道具立てになって来るようだ。貸してやろう、嫌なら置こうという言葉を金庫に言わせるように。

文月—わたしは八歩さんの評の前半に共鳴します。この場合の借主はど弱いものはありますまい。平身低頭しながらも、何とかして金庫を全開きにする手段を考えて、汗をかいているのではなかろうか。

しかしエンジニアの僕だったら、大事な金庫を半開きにして、しばらくでも時間を経過さすことはしないでしょう。

舟遊—この句の問題は下五の「半開き」にある。いかに因業な高利貸でもやはり人間命より大事な金庫を閉め忘れて一生懸命に利子の計算をしているともとれますが、やはり八歩氏の評が正しいと思います。着想の高利貸しと金庫はすでに言い古るされています。舞台に装置がととのいすぎと言われますが、「半開き」の下五で、まず救われていると思います。

圭井堂—勿論下五の「半開き」が無ければ川柳になりませんが金庫に物を言わせているようでもありますし、因業と半開きでは一寸不自然なようにも思える。作者は全然別の角度から作ったのかも知れません。

八歩—どうもこの半開きには、作意のあとがあるように思われる。因業者ほど、金は大切がるものだから、金庫は恐らく閉め切っている場合が多いのではなかろうか。

むじな—金庫が開いていても閉じていても面白くない。半開きだから因業が生きて来ると思う。作意があっても半開きを強調している句だ。実際には因業さが金庫を半開きにするものと閉じて置くものとあるかも知れないが。

文月—半開きにしたままで、商談を続けるところに味があるので、交渉のなりゆきによっては、話の途中で閉じてしまうかも知れない。「半開き」はこの句の生命である。

舟遊—ただ金庫の扉の半開きだけの写生句だったら平凡で、因業と半開きは不自然になる。あくまでこの半開きは因業者の心理状態であってこそ、川柳のおもしろさとよさがあると思います。

○

一言もしゃべらず降りた一等車

雄々

圭井堂—自分でしょうか外の乗客でしょうか、昔なら車掌は三等客に威張り一等客に恐縮し二等客に威張られると言って二等客を一番嫌がったものでした。この威張る二等客は今どこへ行ったのでしょう、その層が一等客にせり上って居れば前よりももっと威張り散らしふんぞり返って「平民共には言葉を交さず」と一言もしゃべらず降りて行くだろうし、独り旅の自分なら他の客が余りにも気取っているので話しかけにくく遂に一言もしゃべらず降りたことになる。どちらにもとれず淋しい句ですね。

八歩—この一等車の客は、ソンマン、ボス階級乃至知識階級と見ていいと思う。一等車の乗客とか、いわゆる知識階級と呼ばれる人達には、こういうタイプをよく見かけるが、相手を警戒して、口を開かない場合もあると思う。この句の裏返しで、二等客になると、庶民的というか、未知の人でもすぐに親しくはなるが、其の反面、少しおしゃべりが過ぎるきらいがあるようだ。だいたいこちらから知らぬ相手に呼びかける場合には、相手の歓心を求める気持ちが働いている事が往々にある。その場合、庶民階級と違って、一等車の客ともなれば、面子の問題もあって、うかつにはものも言えず、側から見れば人間味のうすい存在に見えるが、案外本人にして見ると、それで満足しているのかも知れない。人生というものはむつかしいと思う。

むじな—一等車ばかりでなくこんな人はいるものだ。私も大阪から東京まで一言も話しをしないで下りたという人を知っている。しかしやはり我々庶民的な感覚では一人旅でも未知の人ばかりでもいつか話しをし合い又色々な話を聞く事に依って旅の楽しさを増すものだと思う。一言も話をせずに下りる人には何か一等車的人種のように感じ反撥を覚えるものである。こんな気持をうまく表わした句と思う。

文月—自分のことか他の客のことかを考えて見た、自分のことだろうと思う。

一等車の客は、他人でもわたしでも独り乗りの場合は、側の乗客になかなか話しかけにくいものであり、他客も簡単に話しかけてくれない。実はわたしは以前の一等

車に乗ったことはきわめてめずらしく、二等車・今の一等車にのる度数も少ないので、大きなことは言われませんが、世相はこの句のようなものでしょう。

舟遊—一等車に乗れる客、すなわちブルジョア階級で人前とか公用は別として、家庭は案外です。冷たさに馴れて平気なものです。其の反対に庶民は「川柳家は別」あまりにもつまらないことをしゃべりすぎる。句者は鉄道員でこうした場面にあわれたのでしょう。一等も二等もない世間に早くなりたい。しかし現実は、大衆を小馬鹿にした成金人種が多く、これに反撥をしたすらすらと句によく出ていると思います。

圭井堂—案外こういう種族は初めて行った土地でも物珍らし気に窓外を飽かず眺めるようなこともせず、黙々とカストリ週刊誌を読みふけっているものです。

八歩—一等車の乗客層のつめたさを皮肉って階級的反撥を詠っている。

むじな—一等車=ブルジョア階級と片づけてしまっている点は余り好きではない。

文月—夜汽車などで、うつらうつらやっていて、フト眼をさまし、ここはどの辺だろう。次の停車駅は何駅だろう?隣席に知っておりそうな客が座っていても、それに聞かず、わざわざ棚のカバンをおろして、中から時刻表を取り出し、あちこちページをめくりながら、左腕の時計と見くらべて、ようやく何駅だな……と想像して安心する。この所要時間数分ないし十数分、となりの客にきけば一秒か二秒ですむものを。

この光景は他人にも僕にもありそうだ。

舟遊—ただなんとなく読んでいると見落す句であるが、貧富の差がみにくい冷めたな争いとなるものです。句のリズムも川柳雑誌調というところで、私はこの句を天に頂きます。

○

日曜の子連れをじっと靴磨き　明朗

圭井堂—「靴磨き」ですから家庭での主婦でもなくその子供でもなく木枯し吹きすさぶ街頭に客を待つ本職の靴磨きを詠んだ句で「みつめ」ている人からは父親が浮んで来ない。母親かその少年かで一寸迷いますが淋しいよい句だと思います。母親なら「世が世であれば」と子連れをみつめていようしその少年なら「親にもっと甲斐性があったら」と思っているかも知れぬが。

八歩—日曜の句からは、うらぶれた靴磨きの親父さんを思い浮べる。甲斐性なしの自分に比べて、この幸福そうな子供連れの後姿をじっと羨望の眼で追っている顔。無性髭と、ほこりにまみれた身体につきまとう悲哀を感じる。圭井堂さんは、父親でなく、母親か、その少年が浮んでくると言うておられますが句から受ける感じは、人それぞれに依って違うのではないでしょうか。明暗二筋道の人間生活を詠んだ句で、渋谷天外の家庭劇にでも出て来そうな場面です。

むじな—同じ一つの句を詠んでも読むものによって色々に感ずるものだと思う。私はこの見てるのは男の子供の街頭靴みがきが頭にうかんで来た。考えて見ると親子づれの仲の良さそうな一行をうらやましさと夢のまじったまなざしでじっと見送る少年の眼に一粒の涙がたまってつっと流れる。イタリヤ映画のラストシーンをさえ感じさせられた。

父親か母親なら靴みがき生活につかれた姿を想像するのでじっと子供連れを見送るよりも次の客の来る方を見るのではないか。生きる為には感傷にふけっている間も惜しまなければならないだらう。

文月—靴磨きの人物（母親か父親かの無い少年・失業の男子・夫が無いか病床の女等々）は無数に想像できるが、この句では、夫に死なれまた長らく病床につかれ、子供を二三人もかかえて、生きんがために最近靴磨きになった母親と見るべきでしょう。

一足でも多く商売にありつきたいと、眼を皿のようにして通行人の足元ばかり見つめているとき、フト子供の靴が一足ならず、二・三足もチョコチョコと歩いているのが眼についた。見あげるとサッパリした服装の子供たち、背なのリュックサックには、お弁当、さてはお菓子・くだものでみんなふくらんでいる。おまけにそのうしろから立派な両親もついてくる。もしわが夫が達者であったなら…と一瞬商ばいを忘れて、ジッと見つめていた、悲壮であり母性愛のこもった句だと思います。

舟遊—「日曜の」で父親の引率する家族連れ、「子連れ」だから大人から見た場合で少年でない、「じっと」だから女、か母親だろう、男ならじっと見ないだろう、文月氏に同感します。靴磨きの母性愛がこの句からうけとれる。靴磨きだってりっぱな職業だ。たんまり儲けて、子供連れでパークぐらいは行きなさいと言ってやりたい。しかし現実は生活に追われてそれどころではないといいたそうだ。

圭井堂—私もこの場合母親だとみたいです。何故なら子供は案外家の貧乏金持ちを深刻に考えておらぬようです。母親だと思って読むと実によい句です。

八歩—靴磨きの人物で大分もめて、母親と見る方が多いようですが、現実的に母親の靴磨きは案外少いのではないでしょうか。だいたい日本人の男性は、母性愛に対して弱いようですから、意識的に母親を感じられてると思いますが如何ですか。

むじな—作者は母親と見て作ったか子供と見て作ったか知れないが作者は作者、読者は読者で感じたままでいいのではないか。私が作者の立場なら自分の感じて作ったとは別に読者が云々してほめられてもやっぱり自分は作者として自分の作ったイメージをそのまま抱いていたいと思う。

文月—何回も何回も読み返すうち、何だか自責の念にたえられない気持ちになった。この句は、うまく世相を表現し、なお或る種の人々を鞭撻する佳句である。

民生委靴磨きをば何と見る
靴磨き見てヒント得し民生委
知る人ぞ知る右の駄句二つ。

舟遊—お涙頂戴の映画を封切るたびに満員になるように、特に日本人は母性愛に弱いのは事実であるが、この場合靴磨きが誰であろうとかまわない。ただ現代の世相を民生委員より政治家なんと見ると云いたい。しかしいつの世も心に触れるものには句としての強味があると思います。

（担当—真鍋一瓢）

みんなの暮しが明るくなる
セキスイのプラスチックス
積水化学
本社　大阪市北区宗是町1

近作柳樽

麻生路郎選
北川春巣選

学力をカバーして来た力こぶ　青森県　木村　涼人
初任給歓呼の声に迎えられ　同
股引のようなズボンで少年A　同
食われない筈の給料とバーで逢い　同
自炊した自信を妻に邪魔がられ　同
本職はどちらレジャーをよく稼ぎ　竹原市　山内　静水
短大にしろ俺の子の金ボタン　同
ネックレスつけ花嫁さんは飯を　同
お言葉に甘えてグデングデンに酔い　同
わが村もアメリカさんのノーハット　鳥取県　鈴木村諷子
老境へ追いやる孫を背負わされ　同
耕耘機買う相談を牛が聞き　同
金が貯まると人物も出来てくる　同
出るらしい酒へご不浄先ず借りる　仙台市　平野　光道
菖蒲湯にニキビの顔をよく洗い　同
人間衛星持たぬ国なりアドバルン　同
気に入らねば離婚する気で嫁に行き　同
飲みに出る足は真っすぐ前を向き　枚方市　宮川　珠笑
結納へ招かれのろけに食傷し　同
初七日をすましてやっと泣ける寡婦　同
ご詠歌を唱えた口で嫁の愚痴　同
アイデアが面子に握りつぶされる　京都市　都倉　求女
がら空きの映画で気兼ねなしに泣き　同
長雨の合間の星で眼を洗い　同
インタービュー話せる女傑も女なり　同
オールドミス何思いけんお茶をくん　石川県　同村　虹要
女房への土産を浮かすノーチップ　同
旅行には行きたし菊が気にかかり　同
金を食う娘だと目を細くして　同
ど忘れをしたことにするじゃくるる　兵庫県　遠山　可住

暑中御伺

秋月安方
和歌山市今福東ノ町一二八

長野文庫
今治市港町八丁目

木山遠二
岡山県笠岡市山口

長野元一（号・井鄙）
山口県防府市大字西佐波令字幸地一三一六ノ一六

田村藤波
岡山県英田郡美作町湯郷五五一

米沢暁明
愛媛県大洲市常盤町九一

西川晃
大阪市西成区東入船町二

弘津柳慶
山口県柳井市柳町日本専売公社内

杉谷湖山
鳥取市職人町

横山一声
岡山県和気郡吉永町吉永一四〇

室井八九寸
京都市北区紫野連台野町九

槇紫光
愛媛県周桑郡壬生川町大曲り・富士紡水源地社宅

乳呉れる声ではないと泣きやまず　同

耕耘機に負けるなと牛叩かれる　同

転勤という手で役所逃げさせる　同

自惚れていたら女の平手打ち　竹原市　杉原愛鳩

奥様の不満踊りを習い出し　同

大根を値切り自炊になれてくる　同

アナウンサー度度トチる思いごと　同

サラリーはレコード代のお嬢さん　熊本市　田口麦彦

肩書の重さを墓場まで運び　同

蚊を叩く音にもあせり出てしまい　同

趣味欄にゴルフと書いて秘書課長　同

うどん屋の犬が尾を振る独り者　京都市　大久保和三郎

諦めて敷かれて無事な日が続き　同

警笛へバタヤ悠悠ふり向かず　同

仏壇を値切った足は飲むつもり　金沢市　山本木象

土一升金一升三角な板囲い　同

からだ張るチンピラもピモに成長す　同

わが道を悔いた日もある日記帖　神戸市　波多野美由起

糸巻きに貸りた子の手も成長し　同

酒を吸う衣裳をマダム気にしてず　同

市民税どこで消えてる悪道路　児島市　伊丹柳瓢子

働らける誇りスパナを握りしめ　同

やけくそで飲めばケロリとする胃病　同

軽いといて人の命を金に踏み　兵庫県　河原みのる

阪鶴国道昇格一句

祝盃はもう十年の先を行き　同

耕耘機互いにふところ探り合い　同

父の日も父は根っから家に居ず　伊丹市　小川静観堂

老春のはけ口京の社寺めぐり　同

往診は俳句の気炎きいてやり　同

今朝も無事破れ畳で眼を覚まし　出雲市　中川晃男

東京の空気頭によくこたえ　同

悲しくも親の斗志を子が継がず　同

鶯が鳴かぬ自由をもっていた　島根県　景山綾美

看護婦の恋は注射にひまがいり　同

二人で帰る祭りを母は待ち　同

那谷光郎
加賀市大聖寺荒町四三

渡辺暁童
愛媛県越智郡吉海町

戸倉普天
兵庫県氷上郡
氷上町小野四三二

後藤梅志
洋酒　食品　写真
日本火災代理店
北区梅ヶ枝町宇治電ビル別館
電話（三六一）〇九四六番
自宅　西成区玉出新町通一ノ一一

おしぼりが
汚れて戻る友情よ
川岡霊眼子
諫早市天満町一二九七

丸尾潮花
本名（茂）
高槻市富田町七六七
日本住宅公団36号館
三〇四号室

橋本写真材料商
大阪市東住吉区
平野西之町八三

血統番犬悠悠と肉を食べ　羽曳野市　島田　雄峯

コケシならべて愛情にうえており　同　同

貞操の軽さ損得だけ云うて　同　同

アパートへ恋の勝利は狭く住み　京都市　小黒　王石

気の弱い男と見えぬサングラス　同　同

月給をみな取り上げて内助の功　同　同

真先に夏服に替え出世せず　鳥取市　近藤　昭夫

テレビやっと買えば隣は冷蔵庫　同　同

鶏飼えば鶏卵相場安いこと　同　同

人事課にいるだけで人を呼びすてる　大阪市　西本　保夫

元軍人の課長へオールドミスもほの　同　斎藤たけお

胃の手術町の易者にみてもらい　兵庫県　同　斎藤たけお

嫁の話きまり鶏ふやしとき　同　同

パーマ屋で中華をとって待ちつづけ　目塚市　護川　梢月

大学のかわり自動車買えと云う　同　同

再会へ帆前だれの意地があり　竹原市　大洲大八洲

貧しさに慣れれば一年早過ぎる　同　同

制服にかえると挙手をする守衛　大阪市　堀　風仙洞

帰り道飲むたのしさでまたつとめ　同　同

折鶴へ蝶が来そうな窓を開け　羽曳野市　古川　静波

金運の相で療養続けとり　同　同

麦刈りに憎んだ雨を待つ田植　松山市　河本南牛史

くすぐった様に後輩賞めてくれ　同　同

恋なってベビーコーナー見て回り　西宮市　白石　良圭

わりかんの果物籠に見舞われる　同　同

有りていに云えと云うたら首になり　大阪市　万代句念坊

春日遅遅竹馬の猿は人を寄せ　同　同

初ものを値踏みしながら膳につき　羽曳野市　福井与太郎

誘惑に勝って婚期をとり逃がし　同　同

元をただせば華族のオペラグラス　八尾市　吉田　博一

夜の街なら顔の通る御曹子　同　同

力こぶだけが自慢で職がなし　奈良県　北村　一夫

就職をして冷飯の味も知り　同　同

特価品売り場で探す義理の品　津市　嶋野ひろし

採用の通知へ何度も靴磨く　同　同

中村九呂平
下関市上新地六町二五〇七

長谷川鮮山
名古屋市西区米田町十六

大阪逓信病院
烏ケ辻川柳会
会長　足立春雄　若林草右　市場没食子
幹事　中谷ハナ子　小沢史葉　西辻竹青　水谷竹荘
幹事　森下愛論　西口竹志　古谷まさる　桝本蕗児　小野木凡平　木村よしを
会計　橋本幸男　津村神峰
客員　北川春巣　生越正徳　久保正寛
客員　半田夏生
客員　堀風仙洞

暑中御見舞申上げます
川雑玉造支部一同

病人の不在投票二句

見えぬ目に希望をこめる投票紙　布施市　古谷まさる
み仏は不在者投票昨日すむ　同

デパートのお辞儀がつらいひまつぶし　高知市　須藤　俊江
梅雨空へ抵抗派手な浴衣着る　同

二人三脚今父ちゃんの顔でなし　岡山県　永宗　宗義
入院をしてへそくりの有がたさ　同

奥歯まで揃って年令は遠慮せず　河内長野市　森本黒天子
誰も彼も死んだ噂につき当り　同

ユーモラスに昔を語る出世して　羽曳野市　石川　太柳
働きに出る手へ過去のある指輪　同

二号だと聞けば興味のある女　大阪市　松川　美郎
一夫多妻鶏のどかな日を送り　同

神棚は掃除もせずに一家無事　玉島市　井上　旭峯
ポイントの狂い半生を棒に振り　同

見送りはしょんぼりしてる雨に発ち　愛媛県　村上　竹生
大仏殿僧の威力のように建ち　同

雑談へ煮しめたようなお茶になり　宮崎市　野口卯之助
貴公子のようにセールスマンが来る　同

スカートもズボンもやめて岩田帯　金沢市　根上　杏花
死の灰も混ぜて天空へにじの橋　同

ファッションから抜け出た女ガムを噛み　豊中市　稲増　久雄
欲と欲オブジェのようにからみ合い　同

親馬鹿の拍手は一人だけ続き　笠岡市　蔵本白梅子
子が親を教育をする世を嘆き　松江市　岡崎　雪美

嵩上げと沈下レースの中之島　茨木市　高木繁太郎
たまに来て酒まずく去ぬ友の愚痴　神戸市　吉田　隆史

定年の議論五十代が音頭とり　大阪市　山地　判志
可愛がってやると新参いじめられ　新居浜市　小林　孝正

イヤホーン野球ききき碁の立見　大阪市　藤冨　淀月
たまにくる水を蛇口が粗末にし　笠岡市　谷本鈍愚坊

白バイも黄色いママに整理うけ　京都府　西村句楽坊
新庁舎落成市長居すわる気　島根県　内藤　喜夫

愛情のかけら上手にくどく口　松江市　岡崎　祥月

川柳雑誌社ハワイ支部
ウイロー社
同人一同

南海電気鉄道株式会社
川柳部一同

川雑米子支部
松露川柳会
米子市富士見町一三五小西方
福田丁路
高槻市氷室六九二ノ四
友淵貴山
大阪府泉北郡高石町北五〇六

若番号連れに譲って炙待ち　守口市　樋口一峯

実家帰り味噌汁うまし母ありて　羽曳野市　岡本紀太呂

車庫の水かいだしてパブリカを入れ　芦屋市　里田一ン十

見ていても腕白小僧ら梅をもぎ　羽咋市　三宅ろ亭

選挙ビラ貼らせに困る広い塀　高知県　山川勝子

生きている事がこんなに恥をかき　玉野市　小谷仙山

東京出張

大東京歩けば何処も工事中　大和郡山市　松本峰水

あっさりと引受けあっさり忘れ　須崎市　高橋蟠蛇

老眼鏡拭えどふけど目がかすみ　大阪市　井石泰泉

あんな美人がギッチョで箸をとり　布施市　吉岡嘉子

云い訳のいる麦入りの弁当箱　大阪市　山田松太朗

花屋では買えぬ雑草土産にし　大阪市　宮尾あいき

理屈抜き子が持ち上げた力石　玉島市　田辺好女

あてにせぬ顔が寄附金ポンと出し　愛媛県　村上石峰

ろくろくに恋もようせず才女老い　大阪市　米田美夫

立読みをしてから別の本を買い　石川県　南傳一

お茶汲みに雑用職場の花といい　西宮市　鵜飼鮎子

県境ついでに放尿して帰り　倉吉市　奥谷弘朗

全快を信じてゼニにこだわりぬ　神戸市　大野木真砂

夢にまで見た賞金をもてあまし　埼玉県　神山幸士

邪教だと云われ邪教も腹を立て　兵庫県　常岡孝風

パパがパパがと故郷で鍬をふり　笠岡市　松本忠三

高校へやれぬ暮らしの段畠　今治市　越智一水

我が家の電化夫の用がふえ　広島県　山田スミ子

税務署がこわくないほど儲けたし　鉢鹿市　吉田俊和

遺家族の美名に母は老い給い　羽曳野市　岩井紫貞

戦後派は暖簾をつぶし墓を売り　岩手県　鈴木二文

PTAへ行く口紅を薄くぬり　七尾市　松高秀峰

女二人でこげばボートヘヤジが　大阪市　山崎佳津子

立話背負うた孫が耳をひき　姫路市　隠岐不酔

世帯ずれ夫へ見せぬうす化粧　玉島市　水粉千翁

暑中御伺

はじらいの顔へ
うちはの男前

大阪市阿倍野区天王寺町北
一の一八　男まえ
（岸南柳）

木村匡利
号水洞
匡余

大阪市東淀川区十八条町一丁目二一

川雑淀川支部
大阪市東淀川区十八条町一ノ二一

西森花村　坂田東洋男　志水礼司　早川清生　平田三十郎　小島孝夫　中村瑞歩　木村水洞

第百三十七回 大万川柳

「エプロン」入選発表

選者 麻生路郎先生
投句総数 六百八十四句
入選 五十五句

エプロンの狩出されたは過去の夢 大阪 双楽
エプロンも知らず日かげの身で暮し 堺 和郎
エプロンも入れて娘の家に行く 大阪 旋鳳
エプロンへ千円入れたまま洗い 大阪 あいき
無礼講それからエプロン顔を見せ 玉島 旭峯
エプロンで来たから寄附だなと思い 大阪 良
フィアンセの視線にエプロン手がすべり 堺 素郎
パチンコへエプロンのままちびた下駄 大阪 与呂志
エプロンのうしろ結びをくすぐられ 倉敷 方大
見習いのエプロンいの一番によごれ 大阪 恒明
投票へ先ずエプロンで来る会長 笠岡 二路
エプロンをはずして下座へかしこまる 大阪 晃
エプロンが三人寄って値切ること 富田林 八郎
甲斐性なしみたい男のしたエプロン 大阪 柳宏子
エプロンの母なればこそ子を育て 和歌山 木魚
エプロンを外して妻の小休止 笠岡 忠三
エプロンをつけるに鏡までのぞき 和泉 東天紅
里帰えり母のエプロン脱がして着 大阪 水京
花嫁の嘆きエプロンだけが知る 堺 狂二
エプロンをとれば流行作家なり 豊中 夢虹
スプーンレースエプロンがけが賞をとり 笠岡 遠二
げんしゅくな事実エプロンでまだかくし 岡山 東岸
エプロンのままずるずると後妻が来 岡山 知恵美
エプロンに縄張りのあるダフ屋 大阪 清人
エプロンの気勢へ首相も押され気味 岸和田 きさ子
エプロンのまま世話好きが飛んでくる 西宮 牧人
エプロンの小銭パチンコ屋でねばり 児島 恵二朗
エプロンが似合う女でよく値切り
エプロンを着ても芸妓はそれらしく 西宮 多久志
読みさしをポケットにエプロンいそがしい
細紐でついエプロンをぬぎそびれ 大阪 生々庵
再縁のすすめエプロンのままで聞く
エプロンを外してからの切れ話 大阪 小松園
エプロンのおばはん銀行で顔が売れ
ゼニの音させてエプロンよく稼ぎ 神戸 静馬
インスタント料理エプロンなどかけず
エプロンのまま婦人科へ気軽るに来 岡山 十九幸
エプロンもおしめも提げた里帰えり
エプロンで来て買い易い特価品 大阪 柳志
母の日も母エプロンのまま終る
奥さんがエプロンをして邪魔になり 石川 宗太郎
冷戦のエプロンたたんだままにあり
おんな憂しエプロンのまま抱かれ
託児所のみどりエプロンひるがえり 大阪 水客
エプロンから出たは値切った五円玉
エプロンで百円亭主おくり出し
エプロンを脱いでひとさし舞うてくれ 大阪 梅里

菊沢小松園
大阪市阿倍野区
王子町三ノ三四
電話(661)六六四四番

五客
応待にエプロン取る客とらぬ客 堺 素郎
エプロンのまま柏鵬へ坐り込み 大阪 兼治郎
小康を得てエプロンを脱ぐ未明 貝塚 一鶴
写真まで母はエプロン掛けており 和歌山 木魚
エプロンを汚したほどの味でなし 石川 宗太郎

人ノ句
岩波を読むエプロンのまだ生まず 三島郡 清生

地ノ句
エプロンの焼香婦人会ご代表 大阪 清人

天ノ句
エプロンに包んでくれた茄子の出来 岸和田 きさ子

昭和三十七年度（七月現在）
大万川柳ベストテン

一	藤波	一三、五	岡山
二	梅里	一一、〇	大阪
三	静馬	一〇、〇	神戸
四	圭水	一〇、〇	堺
五	清人	九、五	大阪
六	柳志	九、〇	大阪
七	十九平	九、〇	岡山
八	恒明	九、〇	大阪
九	方大	九、〇	倉敷
一〇	文秋	八、五	大阪
一一	きさ子	八、〇	岸和田
一二	生々庵	八、〇	大阪
一三	清生	七、五	三島郡
一四	狂二	七、五	堺
一五	晃	七、五	大阪
一六	水客	七、〇	大阪
一七	遠二	七、〇	笠岡
一八	恵二朗	六、五	児島
一九	圭井堂	六、五	堺
二〇	良	六、五	大阪

—梅里報

次ノ題「口癖」五句以内
〆切 八月十五日
発表 八月二十日
九月の題「チャンス」五句以内
〆切 九月十五日
発表 九月二十日
投句先 大阪市阿倍野区松崎町
三ノ十 大万川柳会

福壽司
心斉橋筋大丸前
電話(271)三三四四番

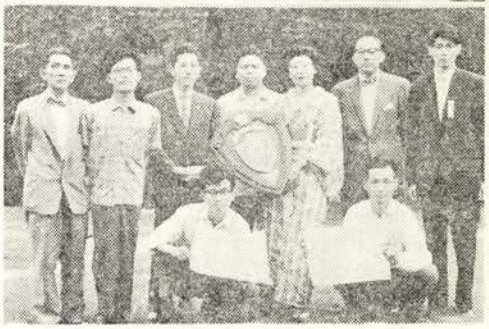
第九回

川柳まつり

会場　四天王寺本坊

路郎先生から賞状をうける三上支路さん

「空想力について」を講演する詩人小野十三郎先生



優勝盃を手にする芙路さんを囲む明和病院支部の人々

麻生路郎賞受賞作品決定（1962年度）

特別課題　情熱（入選発表）

（一席）川雑明和病院支部　三上芙路

情熱が木石のようにもさせて

（二席）川雑本社　林　宏子

いにしえの恋歌に負けず晶子生き

（三席）川雑阿倍野支部　今西　生薔

病牀六尺子規情熱を不朽にす

（佳作）川雑平部支部　安平次弘道

情熱が弟子へ叱咤の声となり

川雑備前支部　永松　東岸

外遊をさせて情熱さまさせる

川雑婦人友の会　石井かんな

組合旗情熱だけで振っている

川雑小松支部　園戸宗太郎

情熱にほだされ死金だしてやり

川雑明和病院支部　林　夢虹

情熱を黒につつんで宣教師

川雑阿倍野支部　加藤　繁雄

情熱の技術が生んだ夢の橋

（前抜き）南海電鉄川柳部　万代句念坊

情熱の余燃を次ぎは子に向ける

交通局支部　児島与呂志

情熱も老いの身あわれキッスだけ

川雑玉造支部　西田柳宏子

死してなおその情熱は承け継がれ

川雑本社　和田あきら

文相の情熱日教組を敵にして

川雑弓削支部　直原七面山

情熱に押し流された未亡人

川雑備前支部　目賀　芳月

情熱を打ち込む弟子が見当らず

川雑淀川支部　中村　瑞歩

清姫に負けませんわと凄んで来

川雑婦人友の会　久米奈良子

国救う情熱という話し振り

川雑本社　木村　涼人

情熱の一生古稀を書き続け

川雑出雲支部　久家代仕男

情熱をむき出しにして食いさがり

3・3・3川柳会　杉前　南宗

仕事への情熱意見くい違い

川雑本社　板倉天悟空

個展まで出した情熱だけは褒め

川雑阿倍野支部　小川　恒明

高く買われた情熱が重荷なり

川雑大鉄支部　山田　季賛

口ほどに情熱のないのを見抜き

川雑淀川支部　西森　花村

やけくそになるなと情熱なだめられ

川雑阿倍野支部　小川　恒明

情熱はとっくに失せてる養子の座

川雑本社　槇　紫光

特攻志願した情熱がいま欲しく

川雑本社　本田　清人

情熱の若さツイストとはかなし

川雑本社　里田一ン十

金メダルまでは結婚考えず

川雑玉造支部　城　正一

情熱のはけ場と見ゆるデモの列

川雑西宮支部　小浜　牧人

愛すれば旨のごとし情熱家

烏ケ辻川柳会　水谷　竹荘

情熱が足りないわよとせめられる

川雑明和病院支部　菱田　満秋

情熱が畳の上で死なせない

川雑明和病院支部　橘高薫風子

情熱家老いては涙もろくなり

川雑浜寺支部　吉田圭井堂

情熱に金主しぶしぶ従いて来る

川雑玉造支部　酒田　清子

ひからびていても情熱まだ燻り

川雑阿倍野支部　河井　唐佑

情熱に反対するのがこわくなり

川雑浜寺支部　吉田圭井堂

米寿なお徹夜で決めるプラン立て

川雑阿倍野支部　金井　文秋

情熱に負けて女の一代記

川雑本社　岸川　漣

結果から見て情熱を疑がわれ

川雑土佐支部　中西　酔柳

抱擁のその一瞬へ命かける

暑中御伺

西尾　栞

八尾市八尾木八七一

川柳雑誌社鳥取支部

鳥取川柳会　同

一

不二田　一三夫

交通局川柳会

北川春巣　冨岡淡舟　岡島孤舟　米虫一乃字　梅村文洛　橋本雅巣　浜畑胡蝶　児島与呂志　草深酔舛　福島正則　小田垣蝸牛　藤井力泉

川雑土佐支部　越智　義夫
情熱へライバル遂に打つ手なし

川雑土佐支部　山川　勝子
情熱もさめてキスさえ汚ながり

川雑土佐支部　竹村　温夫
情熱をゴッホの絵から教えられ

川雑土佐支部　横山　青果
死をともにする恋愛が視野にあり

川雑土佐支部　樫谷　桂縁
衰えを知る情熱を子に託し

川雑本社　栗原　光子
生活に情熱をもてと彼は病み

川雑大聖寺支部　梅田　久雄
ローマンス幾つもあった父おかし

川雑貴敷支部　田垣　方大
昼食をぬく情熱に動かされ

どんぐり川柳会　古川　静波
子に負けん情熱親父再婚し

どんぐり川柳会　岡本紀太呂
情熱の詩人を生んだ村貧し

どんぐり川柳会　福井与太郎
情熱を秘め沈淪の娘の瞳

川雑にしなり支部　後藤　梅志
情熱家らしく判コをぽんと呉れ

川雑篠山支部　常岡　孝風
情熱が支店の椅子に埋もれる

川雑本社　平野　光道
日焼けして天皇主権にのどからす

川雑本社　嶋野ひろし
情熱家ぞろい会社を危うくす

川雑本社　井上　旭峯
諭される方より諭す方が泣き

川雑篠山支部　沖野　三平
燃えたぎる心を女おしだまり

川雑篠山支部　行吉　照路
鍬を振る手つき情熱などはなし

川雑篠山支部　三宅　哲郎
へそくりが無くなるまでの情熱さ

川雑篠山支部　光好　陽子
情熱を燃やせと赤い花が咲き

川雑篠山支部　井上　久子
情熱がさめて家裁の世話になり

川雑篠山支部　岸　らん子
情熱を燃やして男馬鹿に見え

川雑岡山支部　岩道　博友
女教師の情熱薄い化粧にし

川雑本社　伊原　明林
情熱を燃したあとの欠伸する

川雑本社　永田六竜子
情熱は秘めていますと冷たい手

南海電鉄川柳部　高寺　和郎
有閑の筆情熱をもてあそび

川雑平部支部　中村　南風
情熱を世間は変り者と見る

川雑平部支部　原田万年青
精薄の子等に気長く教えこみ

川雑篠山支部　遠山　可住
情熱が吾が身の非力を忘れさせ

川雑平部支部　津秋　六花
情熱は金に背中を向けたがり

川雑大鉄支部　吉原　紅月
情熱を押さえ押さえて内気な娘

川雑本社　蔵本白梅子
清六の情熱援へほとばしり

杏林川柳会　中島　小石
情熱に燃える若さを恐がられ

川雑篠山支部　前川左文字
情熱も消えて翁の面のごと

帝化川柳会　中岸　雄水
風邪押して行く情熱を送り出し

川雑柳支部　八木摩天郎
老いの身に情熱国試まだ止めず

杏林川柳会　中島生々庵
情熱家隠居をせよと言われとり

川雑大鉄支部　正本　水客
情熱の師の銀髪のやわらかく

川雑本社　木象
パッションがあり先生でおさまらず

川雑篠山支部　内藤　白美
老いの情熱線香花火にたとえられ

川雑婦人友の会　光好　陽子
情熱の結晶双児までも生み

川雑本社　久子
雪にも恋匂わせる洗い髪

川雑ハワイ支部　宍戸　潮風
老眼境の奥に情熱まだ消えず

川雑大聖寺支部　那谷　光郎
情熱にほだされ会長引き受ける

川雑ハワイ支部　築山快夢起
情熱の余剰はデモとアジへ向け

川雑ハワイ支部　清水　浅太
情熱の外に保証という生活

川雑ハワイ支部　古川魔花麗
情熱を買われたまんま準社員

川雑ハワイ支部　市岡　暁舟
情熱が何やと戦後派逆襲し

川雑ハワイ支部　満生　拝山
情熱の恋を拾うた港町

川雑ハワイ支部　八重子
情熱に心ひかされ嫁くときめ

川雑ハワイ支部　森田　紅茶
情熱が勝って名の出た皇太子

川雑ハワイ支部　上田　紅溪
情熱は燃るだけの齢となり

川雑婦人友の会　高橋　操子
情熱を稼業にかけて嫁きおくれ

川雑本社　角出まどか
事金になると情熱家はしょげ

杏林川柳会　山川　阿茶
凡人の情熱とぎれとぎれなり

川雑宇部支部　神田　豊年
理屈ではないと情熱負けていず

川雑振支部　高崎　雄声
舞台ではまだ三十にひけとらず

川雑阿倍野支部　不二田　一三夫
老体がその情熱をもてあまし

川雑京都支部　大久保　和三郎
情熱の果てを不孝な記事にする

読早川柳会　川岡霊眼子
弁解無用君の瞳は燃えている

川雑本社　稲増　久雄
完全に燃えぬ情熱人を刺す

川雑本社　寿　美　司
情熱の刺青さながら生けるよう

帝化川柳会　佐野　白水
情熱の囚になって姉女房

川柳大聖寺支部　那谷　光郎
情熱にほだされ会長引き受ける

選後に

（路　郎）

★今回の特別課題は「情熱」とした。明治三十七年以来、短詩川柳と取っ組んで、情熱をもやし続けて来た私にとっては、まことにふさわしい題だと思っている。★応募作品の数は年毎にふえている。作家もオール日本から海外までに及んでいて、まことに盛観だ。殊に作品のレベルが、昨年度よりも優秀さを示している。選者にとってこれほどの欣びはない。★ことしは女流作家の進出が目ざましかった。一席も二席も女流で占めたことは全く前例のないことだった。

★一席・三上美路さん（明和病院支部）の「情熱が木石のようにもさせて」は川柳の形式に少しもこだわらずに、いっきに、その情熱をぶちまけているところに、句のいのちが躍動していると思う。しかし一歩誤まると句にならない危険さがある。★二席・林宏子さん（本社）の「いにしえの恋歌に負けず晶子生き」は万葉の恋歌に一歩も譲らぬ情熱に生きた与謝野晶子をいかんなく詠んでいる。★三席・今西生薑氏（川雑阿倍野支部）の「病牀六尺子規情熱を不朽にす」は病床にあっても情熱を失わなかった俳人子規を讃美したもの、二席、三席とも故人の情熱を詠った点は同工異曲の作だと云えよう。

南区医師会文化部
杏林川柳会

岩崎一伸
海野五十六
河村瑞川
中島生々庵
中島小石
平尾太希志
福井野迷路
牟田一哲
安岡珊枝郎
山川阿茶

・伺御暑中・

暑中御伺

中島生々庵
中島小石

大阪市南区鰻谷
仲之町二〇番地

燃えろ太陽

四天王寺本坊に展く川柳の祭典

七月の太陽は金色にかがやき、柳界に君臨する麻生路郎先生の情熱そのままのエネルギッシュな光が、ここ四天王寺本坊の会場を包むのだ。お誕生日は七十四回目、川柳まつりは迎えて第九回、今や柳界の一大行事として、いよいよ全国的なものになった感がある。

快晴に恵ぐまれ、さしもの本坊もさほどだだ広く感じらぬほどの盛会である。

会場である本坊とは、三万坪の四天王寺の東北隅の一廓であって、その敷地約八千坪、建築物の総建坪は約千坪に達し、しかもこれらの建造物中には古来有名なものが多く、通用門など重要文化財でもある。

この寺域にきょうの川柳まつりが展開されたことは、まことに意義深いものがあった。

さて会場に目を移すと、緑葉涼風に扇子をつかう人もないすがすがしさだ。麻生一歩氏が同僚の方と汗だくでマイク調整に大わらは、毎年のことながら有難いことである。

二時開会と同時に、満場嵐の拍手の中を路郎先生ご夫妻、詩人小野十三郎講師が、生々庵不朽洞会理事長の案内で入場されるころは、会場はいやが上にも柳趣盛り上がり、いよいよ祭典の幕が開くのだ。

司会川村好郎氏は、ご存じ名調子で進行のエンジンをかけられる。

開会の辞、若本多久志副理事長は、路郎先生に敬老会からある催しものの招待状がきたとき、「七十才を越してはいるが、まだ私は老人ではない」と、それを断わられたエピソードをテーマに、そのままに、きょうの七十四回目の誕生日を迎えられたが、情熱はまだ燃えに燃えていると結ばれる。

祝辞、中島生々庵理事長は、まず「川柳雑誌社」の隆盛は全柳壇のよろこびであるとされ、医家としての豊富な経験から男女の長寿法などを説き、角界の小鉄、さては梨園の吉右衛門（先代）等、老いてますますの逸話を路郎先生の健康法にむすびつけ、門下を代表して社運と師の長寿を祝われた。

兼、席題がその間に披講されていくが、句者と選者の柳魂が一つにぶっつかるところ、名句に会場がわく。

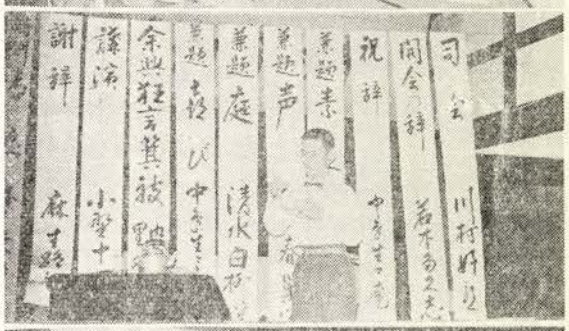
「空想力について」の講演は、今や日本詩壇最高の詩人としての小野十三郎先生とあって、会場はシーンと耳をかたむける。

大阪人の土性骨について「のれん」の山崎豊子氏、「日本アンデルセン」の石浜恒夫氏の文学作品からはじまり、本題の空想力の核心にふれていかれた。

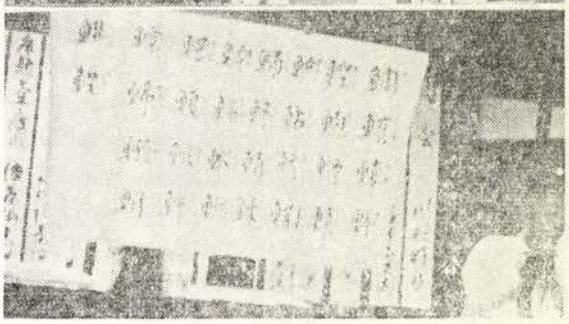
童話の森の中には悪魔の老婆がいる。城には美しい可憐な姫がいる。ということをそのまま信じてよいか。悪魔だと思った老婆は案外庶民の味方であったかもしれないし、可憐な美姫が、その実はわれわれの敵であるかもわからない。

「もう一度、考えよ」と、詩人としての川柳人としての空想力を養えと叫ばれた。

狂言「貧乏」有、内藤忠治郎氏、左、里田恋三氏



加藤繁雄氏の入神の奇術



クイズと出題者、若本多久志氏

六十一まだ情熱は燃えに燃え

月原宵明
松山市道後岩崎町三一五

高峰柳児
長野県須坂市太子町

木次支部
藤井明朗

山内静水

竹原川柳会

土井文蝶
大阪市西成区
松通り九ノ二二

大鉄・天鉄局支部

辻白渓子
野村初甫
松川杜的
保西岳詩
阿万万的
吉原紅月
永尾永断
植村客遊
宮口笛生子
塚脇笑太
大江秋月
都倉求女
正本水客

本誌三九〇号（34・11）のトビラで、

——**考える人となりたまえ**

と、路郎主幹も喝破されているが、ともにこの指導者はわれわれに「考える」力を植えつけられた。

謝辞、麻生路郎主幹は、開口一番、この盛会を目を細めてよろこばれた。先生は「実感を」テーマに、メートル法と尺貫法の実感について、明治と昭和の〝ビン〟とこない実例から、句には実感を盛れといつものように火を吐くような口調で柳話をされた。

詩壇、柳壇の巨星から、得難い〝作家魂〟をさずけられたわれわれは、たった今からその作家魂を句箋にあらわし、この意義ある金言を柳骨にたたきこまねばならぬ。

待望の大優勝楯のゆくえを決定する、特別課題「情熱」が前抜きだけ松江梅里副理事長によって代読され、佳作から入選作は路郎主幹みずからの発表である。

結果はこの八作のほとんどが新人によって占められたことは前代未聞である。ことに第一席の三上芙路さん、第二席の林宏子さん、とともに女流作家であったことも驚異的なものがあった。

大優勝楯は明和病院支部の獲得となったが、この九回までの大半は新人群によって優勝者が出ているところに、本大会の若さと力があるようにも思われた。

川柳は三十一文字の短歌の分身である。祖先は連歌であり、俳諧であるが、今日の川柳まつりの御馳走の一つとして用意されたのが、柳人一ン十里田亮三氏と内藤忠治郎氏による狂言「箕被」であった。これは連歌を主題にしたもので、連歌にこって妻と不仲になった夫が、箕を片身にして夫婦別れをするのだが妻が去っていくらも行かないところで、夫の苦吟をその妻がいい附け句をして、助け夫婦はもとの鞘に納まり、あらためて三三九度の盃をするという、今日にふさわしい、しかもお目出度い出しものであった。

余興にもう一つのプレゼントがあった。それはもうすでに柳人奇術師として令名高い加藤繁雄氏の松旭斉川柳師ぶりである。

数多い名技のうち、特に印象深く大喝采を浴びたものに、どんぶり鉢に入れた五色の紙の花吹雪へ、水をさあーと流しこみ、割り箸を口で割りそれでどんぶり鉢をかきまぜていくと、アラ不思議や、うまそうなウドンに化け、スルスルとつり上げてたべるビスチュアに満場は大よろこびだった。

小児科・沢田医院

・伺御中暑

沢田四郎作

大阪市西成区玉出本通り一ノ一三
電話（六六）二九一三

遠来の出席者、杉谷湖山（鳥取市）山内静水、山田季贅（広島市）藤井明朗（島根県）岩崎愛二、大久保和三郎（京都）吉原紅月（高砂）小西無鬼、酒井ひか平北山越山（篠山）南保酔升（奈良）諸氏を拍手をもって迎えた。

この盛会を祝して祝電があり、東京からは塚越迷亭氏の、

「ゴセイカイヲシユクス　ホンボウヲウズメルエガオ　マタエガオメイテイ」へ、これまた拍手の謝辞である。

○

天位賞者—八木摩天郎・里田一ン十・林夢虹・吉田圭井堂・今西生蕾・真鍋一瓢・岩本素人諸氏。

不朽洞賞受賞者—吉田圭井堂氏

フィナーレ川雑踊り、不朽洞の鬼才的須崎豆秋氏作の川柳まつりの歌を参会者が和する中を賑かに川雑踊りの輪が葭乃先生をリーダーとする閨秀作家によって賑やかにくりひろげられる。

○

祭親宴は、さきごろ篋綬褒賞をはじめ、門下一同が恩師を囲んでの祝杯が舞う和ごやかさだ。

葭乃女史と生々庵副主幹の常磐津「松島」は意気の合った名コンビで、なんといっても今夕の圧巻だった。

主幹と長老綠雨氏は四十年柳交の懐旧談か、文蝶氏の明朗洒脱、水客・柴香・潮花三氏の仲よしトリオ、春巣・白柳・小松園・満潮諸氏の笑顔がズラリという盛観である。各柳人思い思いの席で交歓の実を挙げる中を、竹荘氏の舞踊「黒田節」いわを氏の「独唱」〆女さんの「童謡」とつづき、炭坑節の総踊りのころには正にクライマックス。

静馬氏の「螢の光」に全員唱和して、「川雑万才」「路郎主幹万才」を三唱して七時半、さしもの豪華な川柳まつりもここにめでたくおわった。（**カメラ、河相すゝむ、ペン、戸田古方、橘高蕉風子、不二田一三夫**）

出席者

路郎・一三夫・阿茶・明朗・古方・小松園・繁・万的・潮花・柳宏子・一瓢・竹荘・すゝむ・春巣・文秋・与呂志・信明・清人・生蕾・生々庵・小石・文蝶・峰郎・・多久志・舟遊・梅志・水客・梅里・繁雄・いわを・静馬・白美・蕉風子・蚯水・狂二・湖山・圭井堂・静水・満秋・ナ女・鹿天郎・清風・紫香・和三郎・満潮・蜘子・きき子・三司・東天紅・句念坊・南宗・静幸・紅月・一栄・清子・あいき・越山・聖平・柳志・寒翁・八郎・松太郎・たねお・水洞・瑠歩・幸良子・雄芦・黒天子・水京・美喜・夢二・稲男・あきら・野迷路・圭水・和郎・季竹・酔升・素人・判志・晃・行人・事子・みさ子・蒿史・大丘子・鶴佑・正一・はめじ・十三郎・緑雨・左文字・可住・雄水・ひか平・無鬼・清郎・白柳・一ン十・孝夫・白水・夢虹・蕉風・長雄・良子・節子・天哲空・弘鉢・美路・宏子・酸乃・投句：忠三・神仙・虹眠子・砂利・紫光・泰巣・愛鳩・長始・日満・雨雨・ゞ髪・宗義・どんたく・四郎・苦楽坊・竜泉・静観堂・千歩・蕊眼子・恵二郎・宗太郎・蕉風・一酔・八九寸・一星・二文・まどか・力久・勝子・幸士・孝二郎・紅鳥・岩八・味平・代仕男・夕雄・喜仙・大八州・美代・仙山・静芋・六花・・木・花村・柱狭・かんな・牧人・歌子・知恵美・葉光・みのる・与太郎・鶴亭・孝風・宋男・紀太呂・信治・南風・静波・ひろし・万年青・玩柳・旭峰・佐吉・茂男・明林・弘道・万竿・加仙・風浪・紫貞・井平・東村・峰雄・宝泉・海美司・花江・博一・美蓉・松本・白梅子・ふみ子・遠二・一男・久雄・一平・弘明・真砂・一鶴・泰・木象・鬼・・光郎

ご寄贈感謝（敬称略）

若本多久志・金井文秋・中島生々庵・北川春巣・山川阿茶・正本水客・松江梅里・菊沢小松園・西尾栞・土井文蝶・八木摩天郎・真鍋一瓢・丸尾潮花・小西無鬼。

工藤甲吉
青森市長島三ノ二
東奥日報社　編集局内

関戸宗太郎
石川県小松市上寺町二八

書く隻手　蠅一匹に
からかわれ
高須啞三味
東京都港区芝南佐久間町一

川雑
大聖寺支部
石川県加賀市
大聖寺永町一五〇
野村味平方

八木摩天郎
八木徳子
堺市九間東一丁山之口筋
電話堺②七二三五番

・伺御中暑

川雑岡山支部

小督

（こごう）

冨士野鞍馬

安元の頃（一一七五）高倉天皇は、御寵愛であった葵の前がなくなられ、いたくお悲しみであったので、中宮（皇后）の御はからいで、桜町中納言成範の娘小督を、おそばへさしあげた。小督は、当時二十才の、ならぶ者なき美人で、その前、十五才の頃から、冷泉大納言隆房と恋仲であった。

ところで、中宮は平清盛の第二女、隆房の妻は第四女で、翌二人ともが小督にとられたのでは、清盛も面白くないので、小督を消してしまうことがよいと考えていた。それを小督が伝えきいて「わが身の上はいかでもありなむ。君の御為御心苦し」といって、ある夜内裏を忍び出て、身をかくしてしまった。

さがされぬ所へ小督かくれて
る　（タル六五）

そこで天皇は、弾正大弼源仲国に、小督を探して連れ戻れとお命じになった。

人の話では、小督は、嵯峨のあたりの片折戸のある家に居るというので、丁度八月十五日の名月の宵に、仲国は、月毛の馬に乗って嵯峨へ向った。

月毛に乗てきっとした文使
（拾　六）

名月のおたづね者は美しい
（タル二四）

提灯に及ばず仲国は出る
（〃二六）

十三夜だと仲国は栗毛なり
（〃二六）

十五夜にくらい勅使は嵯峨野
也　（〃四二）

月見もせずに西山を探がすな
り　（〃一八）

仲国の行く道すがらさわぐ音
（〃二五）

名月の夜であるから「月毛」と洒落、もし十三夜だったら「栗毛」だろうと洒落ている。「さわぐ音」は松風である。

小督は琴の名手だから、この名月に、陛下を思い出して、琴を弾じて居るかも知れない。仲国は笛の伴奏をつとめたこともあるから、その琴の音はよく知っている。行くほどに、法輪寺の方、亀山のあたり、松が一群ある方角から、琴がきこえてきた。

伽羅仏のあたりで桐の音を尋
ね　（タル二六）

「伽羅仏」は清涼寺の赤梅檀で作られた釈迦仏をいい、「桐」は琴である。

琴をしらべぬと仲々知れぬ所
（タル四五）

その琴の音をたどってゆくと、なるほど、片折戸の内に、小督だとわかる「想夫恋」の曲であった。そこで仲国は馬を下り、腰にさしていた笛をとり出して、ちょっと琴の音に合わしてみたのであった。

想夫恋美くしづくの御恨み
（万安五）

琴爪へ蹄をむける嵯峨の奥
（タル七九）

琴の音にひらりとおりる文使
（〃二六）

どうどうと云って仲国笛を出
し　（〃二〇）

小督が庵に忍び音のくつわ虫
（〃一四六）

爪音に勅使は嵯峨で駒をとめ
（〃四三）

おどろき給ふな仲国と馬を下
り　（〃八三）

松風の音に仲国駒をとめ
（〃五一）

さがしましたと仲国は馬を下
り　（〃四六）

仲国は笛で迷子をたづね出し
（〃四七）

枝折戸の笛に座敷で琴をやめ
（〃一〇）

嵯峨の奥馬のおならで琴を止
め　（〃一六七）

たそやこの夜中と小督琴をや
め　（〃一二二）

今でも、仲国が琴の音をきいたという「琴聞橋」がそこにある。仲国が笛を吹いたので琴の音はひたとやんだ。

そこで仲国は「内裏より仲国が御使に参って候あけさせ給え」といって戸をたたいたが開けないので、押し開けて入った。

仲国は宣旨せんじと戸を叩き
（万安三）

暑中御見舞

申し上げます

麻生路郎先生選

大万川柳会

投句ご希望の方は

大阪市阿倍野区松崎町３の10　松江梅里方へ

驚き給ふな仲国めでござる
（〃安七）
どうどうと云ひながら出す届け文
（〃安五）
柴垣へつないで笛をひっとどめ
（タル二七）

小督は此所に居ても危ないと思い、明日は大原へ引越すことになっていたので、この家の女房が別れを惜しみ、所望されるまま、琴を弾じていたのであった。

仲国は中々野暮でない男
（タル一二）
仲国が馬枝豆をふるまはれ
（〃二九）

十五夜だから、月に供えた枝豆をふるまわれただろうと、川柳はうがっている。

仲国は、天皇の御文を渡し、返事をもらって、明け方に内裏へ帰った。そしてその日の夕方、小督を再び内裏へ連れ戻った。

嵯峨様の返事仲国持っている
（タル二〇）
嵯峨様の返事に琴の音がとまり
（〃三四）

「嵯峨様」とは、角倉与一が書いた謡曲本の書風であるが、それで嵯峨を利かせてある。

それから小督は、清盛にわからないように、人の出入の少ないところにかくれて居たが、治承元年（一一七七）姫宮（坊門の女院）が生れた。清盛は、この事を知って、とうとう小督を尼にしてしまった。この時小督は二十三才で、その後もまた嵯峨に住んでいたといわれている。

仲国は西八条へ不首尾なり
（タル一五）

仲国の行動は、西八条（清盛）に悪く思われたであろう。

現代柳人録

（一）姓名（二）雅号（三）別号（四）現住所（五）生年月日（六）出生地（七）職業（八）電話（九）自信の句一句（一〇）川柳以外の趣味（一一）配偶者の有無（一二）川柳に手を染めた年月

（154）若林草右

（一）若林麟之助（二）草右（三）—（四）西宮市弓場町八六（五）明治29年1月1日（六）神戸市灘区大石東町四丁目（七）勤務医（八）西宮②七八四〇（九）**我が道を行く**鯨鯨の**白いあと**（一〇）写真・旅行（一一）有（一二）昭和二十四年頃

（155）足立春雄

（一）足立春雄（二）春雄（三）—（四）豊中市岡町南八丁目三七（五）明治45年7月5日（六）大阪市（七）医師（八）豊中②八二三二（九）**盗む眼を知ってタイトの膝をくみ**（一〇）読書・ゴルフ（一一）有（一二）昭和二十四年

（156）林野魁光

（一）林野茂実（二）魁光（三）緑舟（四）呉市吉浦中町一丁目一一（五）明治41年8月12日（六）広島県安芸郡倉橋町（七）会社員（八）—（九）**花の咲く日なり娘の肌匂う**（一〇）囲碁・野球（一一）無（一二）昭和十五年頃俳句より転向

（157）本田恵二朗

（一）本田明（二）恵二朗（三）—（四）岡山県児島市下津井三五二（五）明治40年4月1日（六）岡山県英田郡大原町古町一六五一（七）歯科医師（八）児島・九三三四（九）**真すぐに生きて苦杯をなめ続け**（一〇）カメラ（一一）有（一二）昭和九年頃大阪市で開業時代に興味を感じ、観賞するだけで数年間をすごした。

★五月号二二頁下段五行目深田治郎は深田治良の誤りにつき訂正。

上田湧三逝く

八木摩天郎

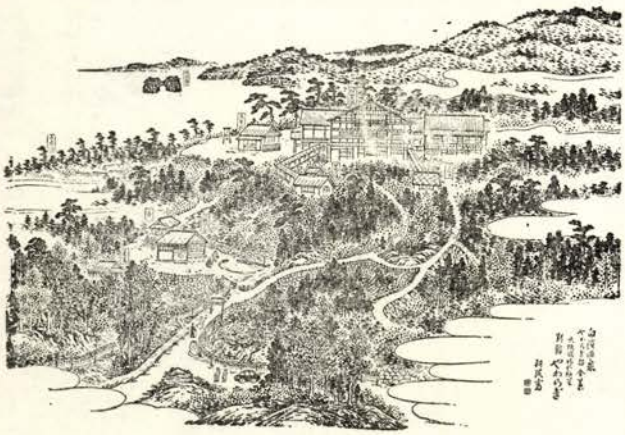
富柳会（富田林市）会員同市毛人谷五五四番地上田湧三氏（本名勇三）は五月十七日心臓衰弱にて逝去、享年六十六歳、三男六女の子福者、五月十九日夜の同市藤岡医院の富柳会五月句会を楽しみに病床で作句し、熱心であったので川柳句を沢山メモしつつ、傍らの夫人に、こんな楽しい気分に浸れる句会を、なぜもっと以前から知らなかったのかと残念がって居られた由。何分句会二日前の事として投句せられたが全部遺句となって会員を暗くさせた。

遺句

釣池に自転車立てて小半日
裏切の武将今尚あざけられ
一筋の線香悲しい通夜の鐘

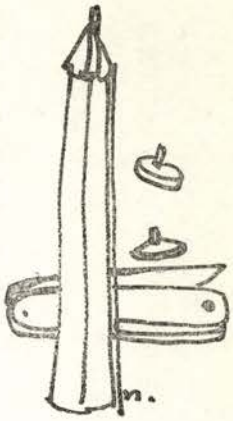
最後の兼題「一筋」の句は死ぬ予感があったのかと、いならぶ会員を悲しませた。富柳会では同氏の追悼句会を堺市西方寺で開催、遺族を囲んで故人をしのんだ。

大阪戎橋 北極星直営



白濱温泉やわらぎ台
万国観光旅館 やわらぎ
電話 白浜温泉 167
大阪案内所(641) 1275～7

一路集の選をして



一路集の選者諸氏が、どのような気構えで選句しているかを特集した。一読発奮、力作への種となれば幸甚

水滴

―一路集の選をして―

正本水客

夕立にしろ、滝しぶきにしろ水滴は夏には特に関心をもたれる。

ところで、この水滴、まん丸い球のように見えるけれど実は完全な球ではなく、かなり横長の偏平な形をとって落下するという。水滴の半径が〇・〇三ミリ位のときは霧であり、〇・一から二・五ミリ位で落下してくるのが雨になる。水滴が大きくなるにつれて偏平になり、半径四ミリ以上になると落下中に自己分裂して了うから、それ以上の水滴は存在しないことになるという。

「一路集の選をして」という特集原稿を編集局から仰せつかったときに、私はこんな意味の記事を読んだのを何となく思い出したのである。

句の選には、不可とする句を切り捨ててゆくものと、可とするものを出来るだけ拾い上げてゆくものと二つの態度があると思うが、一路集の場合は、主として新しい方を対象として、作句の修練を主眼にしているものと考えられるので（勿論、年季のはいった方々のけん引力も必要である）私が選に当った場合には、できるだけ全没を出さないよう、後者の心構えをもっているつもりである。

作句の目標は、自己の表現にあるのだから、表現の方法、着眼点の攝み方等の練磨という意味で、課題の存在価値が出てくると思う。点火剤として、触媒として、成るべくいい句が生れ易いような課題の選び方も必要であろう。

私が前回に選に当った三十六年の一月から今年の一月までの課題を拾ってみると、屋上・眼鏡・ポート・素顔というような物質名詞と、居心地・値上り・テンポ・留守というような抽象名詞とが、三十五対六十五の割合で出題されており、後者の方が題として、ふさわしいことを示している。それにしても上記の課題はオール名詞であるが、〝言葉や発言〟と〝喋る、話す〟とでは、そのニュアンスは大部違うし、時には動詞等も出題されていいのではないか。

次に佳吟以上に抜けた人々を拾ってみると、圭井堂さんの十五句をトップに、十九平・恵二朗・光郎・静水・生薑・宗太郎の方々が年間たゆまぬ出句に、安定した力量をみせている。わずかの差で、これを追うものに、圭水・旭峰・代仕男・八九寸・ひか平・初甫・どんたく・孝風・蛙水等の強わ者達がくつわを並べていられる。

以上を眺めてみると、常にたゆまぬ努力がいかに必要であるかがよく分る。

ここで初めの水滴の話に戻って、没になった句は半径がちいさくて霧のまま漂っている状態であり、半径が大きくなってくると水滴の世界から抜け出して、川になり自由な視界が展開してくるものと思う。

推敲に推敲

―格調高い作品を

若本多久志

一年に一度ぐらい廻ってくる一路集の選をする度に感ずることを二つ三つ述べて投句者のご参考になれば幸甚である。

正直に言って一路集の作品は、近作柳樽や本社句会の作品よりも格調が落ちるのは事実である―。それは何故だろう？

先ず第一に投句の態度に真摯さが欠けている。定められた投句笺によることが望ましいが、無い時はせめて普通の原稿紙ぐらいは使って頂きたい。

ノートの切れっぱしや、チリ紙のようなのに書きなぐったのは、尊い自分の作品に対する冒瀆でもある。

次に安易な作句態度に一矢を報いたい。

許された十句の制限を無視して十五句も二十句も無造作に並べられたのでは選者もウンザリする。

一つの課題でも句想は数限りなく生れる筈であるのに、十句共同じ着想で甚しいのは、てにをはの入替だけの句をズラリと十句も並べてあるのに出会うと、選者も人間である以上、つい投げ出したくなる。

一句、一句着想を変えて作句し

暑中御伺

冨士野鞍馬
東京都港区麻布宮下町三〇の二

阿部佐保蘭
東京都中野区鷺宮一ノ八四

虹川柳倶楽部
新岡回天子
唐津電二七一八

石倉旅風
大阪市西成区松通二丁目八

岡山県児島市下津井三五二
本田恵二朗
電話児島九三三四番

浅川八郎
富田林市大字彼身

高橋尚史
大阪府南河内郡河南町白木

久家代仕男
本名（義雄）
島根県平田市灘分町一八二二

田垣方大
倉敷市水島寿町三丁目三十一

推敲に推敲を重ねる努力が、格調高い作品を生むことになる訳である。そしてこの課題吟程、作句精進によい道場はないと私は思う。

柳歴は古くても感覚のフレッシュでない人は着想の範囲が狭く、若い人達のセンスに触れて目が覚めるというチャンスは、この道場でしばしばみられる事である。

まして初心者や中級者の方が一路集の道場で、自句と他の入選句を比較して錬磨されることは尊いことであり、真摯な川柳人としての在り方ではなかろうか。

私ごとき者がこんなえらそうなことを言う資格はないが、一路集の選を仰せつかった時の態度をご披露して、選者として責任感を買って頂きたい。

私は先ず、集まった句稿一人毎に番号を入れ、作者名を伏せて一句一句清記する——この時は句に対する感覚はゼロにして只、写し違いの無いことのみを心掛け、日を改めて真摯にその選を行う。

選に当っては、A・B・Cと三段階に選ぶ。Aは一通りの粗選、Bではその中から着想と調子で選び、最後のCで本格的な川柳を採って入選句とし、更にその中から五客・三才を頂く訳である。

処がその後が大変なので、私としては選者の責任感から、やむにやまれずやっていることだが、没句の整理である。少し添削すれば入選圏に入れるような句を調べ、添削して、没になった理由を付して投句者へお便りすることにしている。

こうしたご縁で得た柳友が十数人もおられることは、私の老後を楽しいものにして下さっている。仙台の光道氏などは、入選したより嬉しかったと句信を寄せられて、益々私の信念を深めた次第である。

—六、二四—

真実味のある句を

河村日滿

「名人」という題での発表で、「**パチンコの名人も居る路郎門**」という句が読みあげられた。ハハハッという笑い声と共に、すかさず「豆秋」という名乗りが挙がって、又ワッと湧いた。この人にしてこの句ありであったからであろう。私はこのとき以来課題吟にも、個性ということを真剣になって考えるようになったと同時に、モデルのない句は投句せぬようにすることにした。

私はどちらかというと、自由吟雑詠を主としている方で、だからという訳ではなかろうが課題吟には特に弱く、今回編集部から課せられている注文に対し、果して忠実且つ参考になるかどうかが心配であるが、私なりの考えを述べさせて頂いて、責をのがれることとしたい。

兎に角「題」がある、ということはやはり〃作り易い〃ということに通じるのは仕方のないようで、これがため「安易」ということが問題になるのではないか、とまで思うのである。それに人間の考えることは、日本人口の九割ほどが同じような生活環境にある現在、それほど変るものでないことは事実で、それが類想・類句となり、又全く同一句となって現われたりするのであるから、如何に、作句後の推敲が大切であるかが判るのではあるまいか。私も今年までに何回かの選をさして頂いたが、集句が四、五百句以上となってくると、類想は勿論、類句は当り前というところであり、時には同一句が三、四句と重なっていたときの体験もあったが、これらの句に佳句とする句が、これ又尠ないのも、誰でもが考えることをそのまま十七音字にした、というところにあるようである。柳三門氏は「古豪と新人は、川柳においては紙一重である」と言っておられたが、これはどうやら雑詠自由吟をさしてのことで、課題吟にはどうも当てはまらぬのではないかと、私は言わざるを得ない立場におかされているようである。それに初心者、新人の投句は数も少ない。私はもっともっと遠慮をせず、或いは制限句数以上にでも投句させて貰うべきだと思っている。勿論精一杯の結果が、これらの投句数となったであろうことは、よくわかるが、一句の表現が六通りにもなる路郎師の指導からみても、二句や三句の投句は余りにも粗末すぎる感じがする。

その点年期の入っている人々はさすがで、投句数は勿論制限一ぱい、若しくはそれに近い数だし、着想は広いし、というのだから今更ら私の云うところではないが、こんなような句もあるのではないかと感じられる点もあるので、ここに書かして頂くと「切角作ったんだからこれも入れておこう」という句が案外あるんじゃないかと、いうことである。それは類句、同句に、そんなのをよく見掛けるからであろう。

私の「一路集の選」は、そういう意味から、上手な句よりも真実味のある句の方を、優先して採らしてもらっている心算である。そして特にベテラン諸氏には、厳選でのぞんでいることも書き加えておこう。

思いきってぶちかませ

早川清生

はからずも一路集の選を仰せつかり、未熟を顧みずひとさまの作品を評価するという非礼をおかした。私は生来なまけもので、今まであまり句会に出たことがなく、

傍島静馬
神戸市東灘区本山町森三九八

大阪北浜・江口証券
金泉萬楽
大阪市東淀川区淡路本町二ノ六八九

川柳雑誌社阿倍野支部
事務所　大阪市阿倍野区松崎町3の10　電(771)3935（松江梅里方）

（ABC順）
坂東若芽　伊達堰子　不二田一三夫　橋田尚子　堀美智子　今西生薑　金井文秋　片山光福　加藤繁雄　河井庸佑　木口賀峰　木村十悟　菊沢小松園　久米奈良子　松江梅里　宮尾あいき　小川恒明　坂上山椒坊　新川博也　辻川喜仙　山本葉光

従って選をしたことも少いので、今度の経験がいろいろな意味でたいへん勉強になったことを告白し、出句して頂いたみなさんに心から御礼申し上げたい。

一路集は私が想像していたよりもはるかに応募数が多く、新しい人たちの熱心さには頭の下がるところがあった。だからもう少し古豪の参加があればまさに豪華絢爛たるページェントとなるであろう。また丁寧に書かれた句稿の多いこと、選者の傾向を意識したあてこみの句がほとんどないことなども愉快であった。

川柳塔や近作柳樽が真剣勝負の場とすれば、一路集は作句道場としての価値をより多くもつだろう。まず課題が二カ月も前に知らされるので作句期間が長く対象を十分に追究することができる。十句という比較的多い提出句数は豊かな句想の展開と実験的な創作を可能ならしめる。投句者が広範囲に及ぶので切磋琢磨する機会が与えられる。没とか入選とかを必要以上にこだわらなくてもよい。選者のヴァラエティが考えられている。選句も時間に追われることなく慎重に行なわれるなどの特徴があり、作句力を高めるにはもっとも適当な場所であろう。

しかし一路集をさらに充実させるため実際に選をした立場からお互いにもう一度考えたい点をあえて申し上げると、第一に句の密度である。短詩型が音数に拘束されない他の文芸に太刀打ちするには句の一語一語に作者の無限の思いがこめられていなければならない。緊縮性や深まりのない、無反省に定型によりかかって単調な平凡な内容を無理に十七音字に引き延ばしたような句は困る。もちろん一句にごたごた詰めこんで焦点の定まらない句も困るが、そんな句は少く素材の整理はよく行なわれていた。さらに望むなら平明な表現の奥に深い感慨をもつことだろう。次に句の個性である。誰もが作る句を安易に作り、あなたの作品も私の作品も同じではお互いに川柳に生命を燃焼させる意義がない。個性と独創性は文芸の基本であり、自己の唯一性は強く主張されなければならない。私の選は「植木鉢」であったが、定年や夜店を扱った句が非常に多かった。類想は普遍的な概念から生まれるから、一段と次元の高い発見、あるいは斬新な表現を得たときは万人を感嘆させ、同想の句の典型となり得るが、ありきたりの着想は屑屋も拾ってはくれまい。

課題に選ばれた物の実態を十分把握することも大切である。私は郊外に住むため幸い庭木を育てる太陽と鉢植を並べる空地に恵まれているが、都心部ではそうもいかないため「植木鉢」について観念的な句が多かった。故豆秋氏は「雨」の題にわざわざ雨の降る戸外へ濡れに出たというが、畳の上で「植木鉢」を空想する前に生きた眼ではんとうの植木鉢を見つめてほしかった。そうすれば作りごとがなくなり、形骸だけの句にいのちが吹きこまれ、迫真力が生まれたであろう。迫真力はまた作者の人生に対する思考の深さと切実さを示す。皮相的な興味から作られた句は決して読む者に感動と驚きを与えない。川柳には機智も許されているが、これにも人生への深い観察が裏打ちされていることが望ましい。自分の眼を通してものの本質に迫った作品でないと意味がないことは自由詠でも題詠でも変りはない。

一路集でもっとも意外だったことはみんなたいへんにお上品であることだった。これは決して意欲に欠けているということではないが、私はおざなりの句や問題だけを示して結論のない句を作って平抜きになるより、たとえ未完成なため没になっても、思う存分創造精神を発揮し真実の探究を企てた句の方がいさぎよいと思う。情熱においても自由吟にやや見劣りがするようだ。またまれに何か碁や将棋の定石に似たものがあって、こういう題にはこういった句の仕立て方がよいとかこんな添景がとくとか言った自らを狭くする考え方が伺われるのは奇妙に思える。いずれにせよ一路集は私たちに与えられた絶好の修練の場だからお互いにもっと活用すべきであろう。いっそうのご健吟ご活躍を切にお願い申し上げる。

・編集局から・

一路集の投句箋は、なるべくなら本社の柳箋を使っていただくと、整理に選句にッンとムダが省けるのだが、この際なんとかご協力願いたいものである。

句は楷書だが雅号がともすると判読しにくい走り書きがある。選者が清記してくださるのだが、これがよく誤植ということになる。

それから選者諸氏が××朗という雅号をほとんど「郎」とまちがわれることがある。清記のむずかしさがここにもある。（校正子）

光タクシー株式会社
大阪市西淀川区御幣島中二丁目四
電話 (471) 0923 0927 番

宝タクシー株式会社
大阪市福島区今開町二丁目
電話此花 (461) 1279 4440 番

柳川女シリーズ（一）

水谷竹荘

芸者と花柳界

女のいない酒はさびしき　路郎

芸妓というと、すぐ三味線を連想するのであるが、文政年間に琉球から蛇皮線が伝わりそれが堺の琵琶法師の工風で本手、破手などの組歌が出来、二絃から三絃にせられて三味線となり、次第に流行しだして、小唄・江戸・長唄・地唄・上方唄などがはやるようになると、それまで、ただ色だけを売っていた遊女の間にこれを歌うものが出来、又私娼の間にも上手な者が出来て、遂に三味線だけで独立する女が出来た。それが芸者の始まりである。

出雲大社の巫女お国が始めたお国歌舞伎だの、女郎のうちで三味線を弾き、唄の上手な者を指して呼んだ上方のたいこ女郎など、又湯女・飯盛女・傀儡なども広い意味からいえば芸者の前身ともいえる。このたいこ女郎は上方の芸者の前身になったが、江戸では町芸者の出来る前、天和年間に踊子というものがいた。この踊子を芸者と呼ぶようになったのである。そしてこの芸者を取締るために出来たのが、見番のはじまりでもある。

箱屋の初めは、天明時代には芸者の母親がしたものである。白襟無地の紋付に織物の帯、鬢は島田、笄一本、櫛一枚、かんざし二本という、さっぱりした渋いお座敷姿で、茶屋へ招ばれたものである。そして、その着付を手伝ったり、三味線箱を持って茶屋へ供をしたのが箱屋である。

それから関西で初めて芸者が出たのは宝歴元年京都の島原に現われたのがもとで、その後、祇園芸者が出たが、風俗は江戸と変っていた。大阪ではいつ頃からか不明だが、南地新地に現われ、次に曽根崎新地・堀江・今里という順に芸者が出た。そのなかでも京都の祇園芸者、大阪では南地の芸者が芸も粒も揃って、殊に南地の芸者が出入に乗った色駕の美しさと全盛は、たいしたものであった。

長持を見て島原をうなづける　鞍馬

幕末の名妓

春は花、いざ見にごんせ東山、祇園の夜桜、四条の夕涼み、通天の紅葉、山は緑に、水清く、鴨川でみがいた白い肌に、友禅染の紅をといた京女も、やはり京都の衿りである。

しかし万事がみやびな京都育ち、人形のように可愛らしさがあったばかりであったが、そこへ捲き起されたのが維新の風雲、政治の中心が京都にうつって、昨日までの悠長な京女で居られなくなった。そこで生れたのが、江戸芸者気質、意気と張とが三味線と同様お座敷になくてはならなくなった。そして幕府から京都の守護に来て居た江戸の旗本武士の自由のきく財布によって京都の花柳界は賑やかにされた。江戸の客を相手とするようになると、自然江戸前の気骨と張に対して知識と了解だけは出来るようになった。そこへ降って湧いたのが市中の騒動・暗殺・刃傷・召捕り・血判等みるもの、聞くもの皆、血まみれさわぎな事ばかりであったので、芸者気質にもいつのまにか、感情と熱とが加わって、ここに初めて「大小が恐くて芸子が勤まりますかいな」という気焔が当時の京都芸者の口からもれるようになったのである。

木屋町の朝閉された家ばかり　南北

円山へ車を入れて酔ふてゐる　良之祐

加茂川は帯帯止は四条橋　幸男

八文字一粒選りの足の爪　水府

京の夏河原を一寸歩かされ　路郎

とにかくこんなふうに、武士の土根性をすえつけられた京都の芸者たちは、或は勤王党或は佐幕党と、それぞれ好む処によって分れ志士や浪人に味方して色々な恐ろしい事件にあいながら、怯めずおくせずさまざまな保護や便宜や努力を国士や、幕士達にあたえたものである。勤王も佐幕も共に花柳界に入り浸り、互に機密をさぐり合ったものであるから、維新の大業は京都の花柳界で組立てられたようなものである。

「京の三条の鮨屋の娘、今じゃ参議の御台様」と維新後小唄にまで歌われたのが、後に岩崎弥太郎の養女となって後藤象次郎伯の夫人になった先斗町の芸者小仲である

長州志士の頭目、高杉晋作には祇園の小りかが当時、浮名を流した。桂小五郎（後の木戸孝允）の夫人は三本木の幾松である。

素人女も及ばぬ貞女烈婦で、色々の美談を残している。

また若くして夭折した久阪玄瑞には、島原きっての流行妓久本屋の芸者お辰があった。井上聞多（後の井上侯）には祇園新地島村屋の君尾がいた。阪本竜馬には寺田屋の養女お竜、その仲人をした西郷隆盛にも、芸者ではないが奈良富の仲居お虎というよく肥った豚姫があったのも有名な話である。こうしてみてみると政治と芸者の関係が現在の待合政治の源を開いたともいえるし、「英雄は色を好む」とはよくいったものであると思う。

顔見せの約束祇園先斗町　鞍馬

帯留の落ちた音から脱ぎはじめ　水府

長襦袢足袋をはたいて疲れてよ　路郎

もう酔が廻って芸者楽になり　一根

二次会へ来て先の妓かけて見る　一柳路

十二時を過ぎた芸者の横座り　紅太郎

酔ざめの水持ってくる長襦袢　竹荘

一路集

抜け道

土井文蝶選

抜け道があるので泰然自若とし　素身郎
抜け道を覚える頃にクビになり　久雄
抜け道をガイドが語る城の址　十九平
抜け道に古老の知恵を借りに行き　孝風
抜け道を作って懐士計を立て　幸士
つき合いと言う抜け道を妻は知り　雄声
抜け道をボスが一番先に逃げ　愛鳩
抜け道を売春宿が大手ふり　瑞歩
抜け道をさがす気公約読み返し　美郎
抜け道をふさいで猫にひっかかれ　宗太郎
抜け道を考がえバーの小半時　句念坊
抜け道の有る契約に引っかかり　生薑
抜け道をポチがデートの場所ときめ　野迷路
抜け道を考えながら登壇し　虹要
抜け道のあるのも知らず律義者　紀太呂
抜け道のないのを知って二人ゆき　頑柳
途中下車内緒の抜け道考える　弘朗
抜け道を知って機転が先に立ち　旭峯
金蔓にものをいわして言い逃れ　石峰
抜け道もすでに刑事が立っており　雄峯

一方通行へ抜け道をする運転士　季賛
商売のコツと抜け道教えられ　杏花
抜け道も勘働らかす刑事の眼　好女
抜け道があって話が旨すぎる　代仕男
抜け道を塞いで猟人煙草出し　静幸
抜け道を来たくもの巣つけてくる　むじな
ぼんぼんは抜け道通って入学し　痴亭
抜け道は守衛に煙草にぎらせる　静波
抜け道を教わる一升ビンを提げ　涼人
抜け道を行く悪役が気をもませ　葵丘
まだあった抜け道母を丸め込み　勝子
旨点を抜け道にしてよく稼ぎ　井蛙
酔う程に役得抜け道ほのめかし　同
あせってたさかい抜け道気がつかず　八郎
抜け道で別な借金取りに逢い　涼髪
抜け道を通れば無気味な風が吹き　雪美
抜け道を見抜く警ラの眼が光り　初甫
抜け道をゆけばかすかに水の音　詳月
抜け道を教えあってる夜の店　八九寸
抜け道が生まれ変った繁華街　藤波
抜け道を知らぬをアホのように言い　一峯
しぶしぶと抜け道のない寄附を出し　光郎
抜け道を逃げて土地カンあると知り　光一
抜け道はボスにまかせて闇切符　清人

抜け道があるとは知らず猫構え　可住
抜け道の憎い一字に気が付かず　木魚
抜け道を知ってる犬がさきにたち　光道
抜け道を下手に教えた手がまわり　静水
抜け道のツボ心得ている税吏　淀月
抜け道へその手は食わぬ網を張り　大八洲
抜け道もわからぬままに年をとり　季峰
税法の虫は抜け道だけで食べ　繁太郎
抜け道を考えて押す夜のベル　どんたく
料亭の灯で抜け道を組みたてる　和三郎
政治献金などと抜け道があり　一鶴
抜け道を見付けた頃にひっぱられ　庸佑
抜け道のやっぱり金はいるらしい　圭水
どうにでも取れる一項目を入れ　九呂平
抜け道があるのかあの娘も入学し　たけお
抜け道を若い税吏に感づかれ　晃康
抜け道は駄目とわかってからあわて　暁明
抜け道の味もおぼえる不倖　宗義
ままー一つ飲めと抜け道教えられ　ひか平

佳

抜け道があやしくなった仲間割れ　ひろし
三十年住んで馴の道も知り　圭井堂
抜け道が有りそうで無い日のあせり　恵二朗
規則にも温情がある但し書　王石
知る筈の無い抜け道に手が廻り　古心

人

取るだけを取って信仰足りません　清風

地

買うとすぐ教えてくれる種明し　久子

天

抜け道は言わず政治のせいにする　雄々

軸

抜け道を知らぬ暮らしで円う生き

空巣

後藤梅志選

戸締りをしろと空巣の置手紙　弘道
行き届いた掃除に空巣気をくばり　黒天子

空巣除けのラジオこんにちは／＼　宗義
会長辞任空巣を狙う五六人　暁明
いいものばかり空巣にしてやられ　同
造り声空巣二三度駄目を押し　句念坊
連休がふえて空巣のかせぎふえ　頑柳
空巣だけでまあ良かったと励まされ　紀太呂
へそくりの基地を知った子の空巣　静波
油断だと空巣の方の肩を持ち　千翁
空巣とは知らず昨日は家に上げ　保夫
妾宅へ空巣のように旦那が来　鵜汀
空巣に入ってまっせと留守に客　同
咬みつく犬がいるとは空巣知らなんだ　涼髪
あわてたか空巣その辺かき乱し　ろ亭
空巣ふと主婦の秘密をみてしまい　葵丘
簡単に開いて空巣が面喰い　涼人
盗難届出せと空巣を連れてくる　生薑
下ばかり空巣二階が苦が手らし　圭井堂
新婚の夢を空巣がふみにじり　宗太郎
冷蔵庫空巣に食べる物が無し　同
紹介名も書いて空巣へ置く名刺　八九寸
空巣もう歩るき疲れて日が暮れる　雄々

色紙短冊
書画用品
大阪成びし筋
丹青堂
電話 七二・七三

近所からの電話また空巣かと思い　初甫
新婚の妻は空巣におびえきり　美由起
海老錠が留守を空巣に告げるよう　光郎
御用聞き空巣をみつけて得意ふえ　光一
お隣りの空巣へうちも留守だった　清人
国宝と聞いて空巣がふるえ出し　可住
月賦だけ残して空巣持って行き　木魚
空巣にも思惑ちごう門構え　同
土蔵朽つつばめの空巣も残りいて　光道
空腹の空巣食べものからさがし　淀月
交番へ空巣らしいと郵便夫　同
空巣今日見かけだおしの家に入り　静水
へそくりを空巣にいかれたとも言えず　大八洲
空巣も入らぬ程のすたれよう　秀峰
一寸した油断を空巣にキャッチされ　繁太郎
赤貧は空巣に会わす顔が無し　どんたく
だしぬけに空巣へ鳴った掛時計　和三郎
内そとに残す空巣の足の跡　隆史
空巣にはいられ外出嫌らいなり　庸佑
用心の悪さが空巣にしてしまい　圭水
直ぐ帰るつもりが空巣のえさになり　杏花
空巣にも優しい音でオルゴール　王石
空巣でもしてやりたい程待たし　雄峯
警察も空巣ですかと驚ろかず　静幸
女物ばかり空巣にしてやられ　ひろし
子を寝せて空巣の様に居る二人　むじな
鼻唄で空巣はとって食って去に　石峰
山家住み空巣の心配無く暮らし　古心
押し売りが空巣にかわる農繁期　旭峯
空巣の足跡大事に残しとき　雄声
折角の行楽フイにした空巣　久雄
大胆な空巣昼寝をして帰り　十九平
この家に犬がいないと空巣知る　孝風
犬好きの空巣犬まで連れて行き　素身郎
家出の子空巣仲間に身を落し　たけお
どんくさいあんな男が空巣とは　八郎
空巣から映画へ行った事がばれ　藤波
アパートの不備を空巣に訓えられ　みのる
仏壇の写真で空巣気が変り　清人
人情にもろい空巣で突き出され　淀月
空巣さんどうぞと云わぬばかりなり　恵二朗
此の家の暮しを知って空巣出る　季費
空巣から見ればとんまな鍵をかけ　ひろし
玄人の空巣現金だけぬすみ　弘朗
ペチャクチャ〳〵空巣お尻から入り　好女
町内の知人訪ねるよな空巣　ひか平

佳

ひもじかったと見えて空巣食い荒し　一鶴

地

じだらくなくらし空巣にまだこりず　九呂平

天

空巣にもはずかしと思うちらけよう　美由起

影法師

国弘半休選

恙なく暮して無事な影法師　淀月
異郷の地歩む俺にも影法師　幸士
影法師消えてアパート寝静まり　孝風
完全犯罪影法師を忘れ　宗義
情夫待つ女月光ひたとふみ　文子
影法師だけを撮して法を潜り　八郎
影法師も負けずしっかり腕を組み　好女
孤独ではないぞと影がついてくる　美郎
平凡な男に見せる影法師　暁明
影法師だけがお供とはさびし　庸佑
汗ふいて帰る影法師が長い　むじな
デモ隊の影も色めきたって押し　孝風
影法師のように下積世を終り　丘
どれだけを読んだか二階影の消え　ろ亭
良心が影におびえる日もあって　清人
影法師のような男でようもうけ　たけし
一人ぼっちの僕について来る影法師　晃男
ベッドで影法師も起てない日を送り　光一
セールスが疲れ果てたり影が伸び　光郎
影法師もそそっかしいなと思い　弘道
影法師だけが左遷についてくる　圭水
影法師へ愚痴を聞かせて酎に酔い　井蛙
子守唄日暮れへ長き影法師　鵜汀
影法師孤独へそっと寄ってくれ　千翁
母さんと影法師に励まされ　痴亭
ライバルに頭踏まれた影法師　九呂平
おどければおどけて悲し影法師　涼人
影法師すねた私についてくれ　雄峯
父帰える影を映して夕焼ける　旭峯
空想と現実　影法師を想い　弘朗
影法師明治生れの目に余り　代仕男
影法師に怯えた犬は吠えて見る　雄声
秋の陽に誤算があった影法師　古心
コツコツと靴が鳴ってる影法師　ひか平
影法師踏んで段々坂を降り　句念坊
男かと思えば女の影法師　雄々
放火魔におびえ影法師におびえ　宗太郎
踏んでもどる夕陽に長い長い影　藤波
後悔をしているらしい影法師　与太郎
風評をハッキリ証拠だてた影　八九寸
終バスを母影法師と待ってくれ　紀太呂
金策が出来ずに戻る影法師　大八州
イーチャンが済まずうどんをする影　圭井堂
影法師不遇な俺をまだ捨てず　素身郎
気のせいか肩が落ちてる影法師　生薑
田を区切る電信柱の影法師　十九平

佳

高らかに歌えば影法師まで動き　十九平
胸張れば胸張る朝の影法師　旭峯
病院のまだ起きている影法師　秀峰
も一人の俺が路地から消えていき　静波
影法師のびて延長戦つづく　雄々
うちの子が頭かいてる影法師　清風
起ったり坐ったり子の影法師よく動く　美由起
追われてる不安影法師にもおびえ　光道
わが影の長さへ小猫身構える　恵二朗
影法師金魚の平和ふと乱れ　恵二朗

人

身代りになって呉れない影法師　石峰

地

影法師ゆっくり歩けと虫も鳴き　木魚

天

二人ずつ影が掃いてる月の道　和三郎

軸

転向はしたが影法師が慕い

柳界展望

句会

▼本社八月句会は七日（火）午後六時から千日前電停前自安寺で開催する。暑さに負けず柳友多数御誘いの上出席願いたい。▼南区医師会文化部杏林川柳会（大阪市）句会は七月十七日（火）午後七時から三休橋南詰中島小児科診療院楼上で開催。▼コクヨ川柳会（大阪市）句会は七月六日午後五時半から黒田国光堂で開催。▼南海電鉄川柳句会（大阪市）は七月十九日（木）午後六時から難波親和クラブで開催。▼第十六回青森県川柳大会は七月二十二日（日）午前九時半から青森市民会館日本間で開催。以上路郎主幹出席。▼川雑岡山支部七月例会は七日（土）岡鉄クラブで開催。▼川雑備前支部六月例会は三十日（土）午後一時から横山一声居で開催。▼川雑大鉄局支部みなと川柳句会は六月二十五日（月）午後六時から鷹取工場内鷹取診療所で開催。▼竹原川柳会五周年記念近県川柳大会は昭和三十七年九月九日（日）正午から国際観光ホテル佐々木旅館で開催、兼題、盃・帯・記念・夜店・足の裏・のれん・どたん場・手相・女盛り・汚職各題三句。投句は投句料五十円同封の上九月七日までに竹原川柳会松井可笑宛。▼故岡田鹿の子句碑除幕記念川柳句会は七月八日（日）午後一時から除幕式、二時から句会を堺市南旅籠町東三丁南宗寺で開催。故人をしのんだ▼梶川蘇堂居落成記念大鉄川柳会は六月十七日（日）午後一時から蘇堂居で開催。▼蝶五郎賞受賞記念句会は六月二十三日（日）八戸児童館で開催。▼第十回愛知県下物故川柳作家慰霊句会は七月八日（日）午後五時から桜天神社務所で名古屋川柳社主催の下に開催、百三十名の物故者の霊を慰めた。▼第六回かおる会川柳と俳句の集いが六月三日（日）一時から東京都中野区鷺宮の阿部佐保蘭居で開催。▼川柳きやり八月句会は一日（水）午後六時から毫摂寺東京別院で開催。▼観光川柳句会（東京都）は八月十二日（日）午後一時から港区芝新橋伊藤路天居で開催。▼蟹の目川柳社大会は七月八日（日）正午から金沢市山ノ上町小坂神社で開催。▼水郷川柳社（大洲市）では八月五日（日）午前十時から竜護山（寺院）で夏の川柳大会を開催、兼題良心・群集・英語・人生・交渉・速達・吃る（各三句）会費一〇〇円。投句料五〇円、三日必着。投句所大洲市常盤町、米沢暁明氏宅。

消息

▼岩崎愛二氏（京都府）は六月二十六日山本為三郎氏の招きで大森に出来たアサヒビールの新工場を見学に上京された。又七月六日佐渡ケ島へ渡りオケサ踊りに旅情を満喫され「あくびまでおけさ調出す佐渡の人」の句信を寄せられた。▼吉田圭井堂氏（堺市）は鮎の解禁以来釣の醍醐味に浸っておられるが、金の釣ばりで釣る訳ではないのに予想以上の収獲に満悦していられる。▼田中辰二氏（熊本市）は別項記載の住所へ新築移転、新居で柳友を招いて句会を開かれた。手足がやや不自由なので弱って居られるが、毎週録音でRKKの放送川柳は続けていられる由。▼中島生々庵氏（大阪市）は七月十四日午前十一時からNHK教育テレビの「はたらくおじさん」の番組に中島小児科診療院での医者の一日を興味深く紹介された。▼渡辺暁童氏（愛媛県）は六月十一日から高知市で開かれた四国四県教育長研修大会に参加されたが、折からの雨で観光も思うにまかせず土砂崩れを気にしながら十四日帰宅された由。▼永松東岸氏（岡山県）は七月初旬所用のため九州若松市へ行かれる予定だが、若松市の不朽洞会員三上春雄氏と是非歓談したく思っておられると。▼吉田圭井堂氏（堺市）は六月九日から六泊七日で北海道空の旅に出掛けられた。夫人同伴の旅で生活の垢を洗い落して居られ

生々庵副主幹の誕生祝い

諏訪の森の中島邸で七月一日午後から夜へかけて生々庵医の六十四回誕生日を寿ぐ集どいが中島家一門の人々によって催された。

（慶生日は二日なので日曜日に繰り上げた）。前列左から三人目が生々庵副主幹、四人目が路郎師。

—新進作家の川柳句集—

橘高黍風子著　麻生路郎序

川柳句集

定価二百五十円　送料七〇円

▼著者は新進作家で、繊細な新感覚の持ち主である。川柳不朽洞会に入って揉まれ、川雑編集部員として精進を続けている前途ある好作家である。約二十年間の習作「有情（うじょう）」を上梓して弘く世に問うことにした。

★出版予定日。九月初旬。

★五〇〇部限定版につき御申込は早く。

★御送金は川柳雑誌社振替口座大阪七五〇五〇番をご利用が便利です。（切手代用可）

大阪市住吉局区内万代西5丁目25

発行所　川柳雑誌社

電話大阪(671)6081振替口座大阪75050

るが、今のところ得た知識は原木一石で新聞紙が四千枚作れるとの事位ですと。「同伴の旅で帳消ししたつもり」▼大野風柳氏（新津市）は、「青森の大会にご出席されるとのこと「ねぶた」で拝見しました。お帰りに新津へお立寄り下さい。」主幹宛に書信を寄せられた。▼越智一水氏（今治市）は五月三十日の役員改選で今治地区労働組合協議会事務局長を辞任された。▼国弘半休氏（下関市）は防長観光旅行協会の常務取締役の要職に居られるが、目下秋芳洞に観光センターを設立、その方の仕事に忙殺されていられる由。▼戸倉普天氏（兵庫県）は五月二十日から十日間余、熱海から箱根、東京から仙台へと周遊の旅を楽しまれた。七月下旬には北海道への旅を計画して居られる。▼津秋六花氏（宇部市）から、「川柳宇部支部の句会も月を重ねて九月には百回になりますので記念大会を開催したく思っています。よくも毎月欠かさずに続けて来たものと感無量です。」と便りを寄せられた。▼不二田一三夫氏（大阪市）は七月十日本居宣長の遺跡をたずねて松坂へ行かれた。二階の勉強部屋が甚だ印象的でした。▼足立春雄氏（豊中市）は大阪市天王寺ライオンズクラブの会長に就任された。▼田垣方大氏（倉敷市）は、「青森への快適なご旅行を嚮祝に存じます。」と寄信された。▼加茂正一氏（東京都）は七月八日から大学の休暇を利用して上越国境の水上温泉郷に遊ばれ、当地から路郎主幹の誕生日の祝言を寄せられた。▼西尾栞氏（八尾市）は八尾ライオンズクラブ、若本多久志氏（西宮市）は尼崎ライオンズクラブの新年度の副幹事にそれぞれ就任された。▼直原七面山氏（岡山県）六月二十日以来座骨神経痛で歩行困難となり病臥呻吟して居られると。▼山田季蕡氏（高槻市）は六月二十九日大阪鉄道管理局厚生課レクリエーション主催の川柳研究会へ出席され楽しい一日を過ごされた。「先輩がよく戻って来たと言ってくれ」▼赤池五朗氏（川崎市）は三井金属川柳会の初代会長として川柳のため尽力を惜しまれなかったが、この程退職、姉妹会社に再就職された。▼宮口笛生氏（奈良市）は第六回全国国鉄川柳大会（日光）へ出席され十五位で入賞された由。出席者一三五名で盛会裡に幕を閉じたと。▼椙元紋太氏（西宮市）は六月十七日昼、外出の途中で左半身にしびれを感じ、以来動脈硬化の症状が続いているので療養専一を心掛けておられる由。ご快癒をお祈り申し上げる。▼河村瑞川氏（大阪市）は夫人同伴アメリカ観光の旅を続けていられるが、六月二十九日フードリバーから富士山に似たフード山の絵葉書を寄せられた。この地方の学校、区役所、保健所など日本のホテルよりも清潔で美しいとのこと。

句　集

▼国鉄川柳句集が六月二十五日全国鉄川柳人連盟から発行された。国鉄川柳人百六十余名の過去一年間の集大成で六冊目。正本水客氏の序文がある。B6型百十二頁定価百五十円。▼蟹の目同人句集第一巻「蒼い泡点」が七月八日蟹の目川柳から発行された。近来各地で合同句集が発行されているのは慶賀にたえない。

弔

▼山本葉光氏（大阪市）は背淮カリエスと胃弱による全身衰弱で七月十一日午後十一時十分死去、年五十三。告別式は十三日午前十時から阿倍野区王子町二ノ五三の自宅で営まれ、路郎、葭乃、梅里、小松園、文秋、十悟、堰子、一三夫、宏子の諸氏が参列焼香された。▼藤井米三氏（下関市）は七月十三日逝去されたとのことであるが次号で詳報することとした。氏は下関川柳会長老である。

転　居

▼田中辰二氏（熊本市）は熊本市清水町亀井岩倉六一八へ転居。▼西塚春魚氏（八戸市）は八戸市大字沢里字藤子一八ノ二二へ転居。

正　誤

▼前号二十一頁上段十一行目の句、ありませのよとあるはありますのんヨの誤りに付訂正。▼同十七頁金泥集の最後の句主葭乃とあるは周甫の誤りに付訂正。（薫）

不朽洞会から

☆新会員紹介

七月七日

▼内藤きさ子（岸和田市）正

—葭乃女史推薦

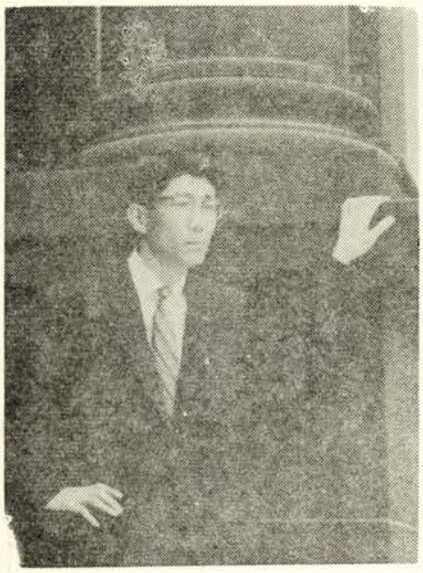
飛・燕・往・来

★河村瑞川氏より（大阪市）

—路郎・葭乃宛

七十才の老夫婦の外国旅行は時々忘れ物をしたり手違いがあったり弥次喜多以上の失敗続きです。ポートランドから七十哩のフードリバーの親戚の家に着きました。中略。村の子供らは皆愉快に家の手伝いをして働き色々の運動や集りをして遊びます。高校生大学生は夏は皆頭を短く刈ってしまい、夏は夏らしくします。若者達の服装は実にお粗末で町へ行くのにもおめかしなど爪の垢はどもしません。女の子のショートパンツ、これは少々誘惑を感じます。中略。次には「老人には旅をさせ」という通信でもさせて戴きます。ラスベガス、ロイヤルパルムホテルにて。

不朽洞の人々



日染大阪支店玄関の円柱を背景にして—播高薫氏

紫の椅子の愁いはわが愁い

（薫風子）

紫は沈んだ華やかさを持つ品格のある色だ。

私は二十前までこの色が最も好きであった。

今はどんな色にも興味を覚え魅力を感じとるようになったが、これは私の魂に純粋さが薄れてしまった故か、或は人間として幾分成長して来た故か、おそらくそのどちらででもあるのだろう。私は紫の椅子にしっくり腰を下ろして、沈んだ華やかさを持つ品格ある詩嚢を肥やして行きたい。

遺稿

夢うつつ 死生の境を さまよって

山本葉光

いつも終い風呂を浴びるのに、順を無視して先に裸になって、湯舟でしみじみとやせ細った腕を見て、寒くなったと想った感覚のまま、どうして床に入ったのか、夢のようになってしまった。誰かが医者を呼んで来て呉れて、注射をしながら「心臓が丈夫だから—」と言ってるのを断片的に聞いた。

別に苦しくも痛みもなくなっていた。あっ気なくノド仏が、鳴ったと思ったら、音響のない核爆発があって、ぐるぐるぐると、走馬燈が台風で舞い狂うように、生前に会って置きたかった路郎先生や、梅里さん、十悟さん、一三夫さんらの顔を見た。死んでしまったのだ。

黒幕が落ちると、同じ舞台のように、同じ生活をしているのだ。自分の葬式を魂になってから見るのを、愉しみにしていたのに—。

それからまた一眠りすると、軽く暖くなって、透明になって、いつも句会や会社の慰安旅行などに、連れて行って呉れる、親切で心やさしく内弟子修行をすました、同宿人の登久雄と、この眼で見残した彼の故郷の琵琶湖畔に彼の母を訪い、大台ケ原を越え、会社の慰安旅行で見た事のある、比叡山・新和歌の浦の奥・雑賀岬・冨士山の日の出・路郎先生の誕生日で、母と姉がしばらく生活をした尾道で、鯛の浜焼を食い、南のニューギニヤで戦死したS君に会った。その間で路郎先生等にも会った。亡くなった豆秋さん、今年三十三回忌をむかえる父、そして母にも逢った。ハワイに、アメリカにも行ったのに、富士山の日の出だけが、美しかったのみで、カスミか雲かの中で、行ったと思うだけで、印象に残っていない。核爆発にも会ったが、何の被害もなく、思うことは何んでも出来る神通力を、自由に使えるようになって、世界平和の為めに地球上を、裸で生活の快的なものにして、山と海だけの自然に、花咲き小鳥の囀えずる楽園に化し、天皇を世界一の人間とあがめ、経済界から約束手形を追放し、盲人等の不具者を一人もなくして、犯罪人は精神の改まるまで、不具、病臥させる。

新聞、雑誌等の文芸は川柳を中とする。そんなユートピアを、気がついてからも、しきりと、しゃべっては眠っていたそうだ。

脚・腰・腹が痛み、苦しくて大きい声も出なかったのに、初めて眼覚めた朝は、すばらしく明るかった。気分もよく、自分で冷蔵庫から牛乳を取り出して、飲んだ冷たい美味さは特別だった。それから二三日すると、痛み薄らぎ、いままで、一粒でも食えば吐いていた飯もすこしずつ食べられるようになったが、まだ、おとろえ切った骨皮の肉体がすぐにつかれて、まだ何だか心細くて困っている。

がい骨にすこうし凹むエバホーム
がい骨のうわ言感謝ばかりする

（三七、六、一九）

抄句光葉

句集「**私達**」から

あの世とやらを想う夕焼け
歩く愉しさ仔猫ひょろひょろして歩く
嗅ぎ分けるように盲人ものを言い
神国にまたなりそうな初詣

母近く（二七、一一、一）

黄菊白菊質素な亡母を取り囲み
修繕のきかない生命を恐くなり
地下足袋に義理人情が生きていた
身の程を知って笑ってくらします

四百号「**自選句集**」から

壺は孤独つめたい浮世知っている
這うてでも自分の事をする病苦
むかしむかしのはなしでかたずのむ
母の背で眠ってさめておぼろ月
耐え忍び日記にこまごま書いて寝る
蚊張吊って宵寝の好きな父だった
弱いものいじめの世なり逆らわず

35年度「**川柳塔**」から

親切な他人に頼り病いつづく
かすかな風をほめる病人
一つずつ欲がなくなり死が近し

桜川不水
下関市東大坪四町六ノ十一

川竹松風
高知市永国寺町一八

林昌夫
大阪府泉北郡忠岡町三九

真鍋一瓢
清水望峰

川雑不朽洞会員
ひろしま川柳会員
山田季賛
山田スミ子

帝化川柳会
一同

佐野白水
大阪市阿倍野区三明町
二ノ十三 電 七一〜二六九

川柳雑誌社
玉造支部
牛島水京
城正一
西田柳宏子

葉光逝く

ありし日の山本葉光氏

思いのこることも
なからん　亡母のもと

路郎

昭和三十七年七月十一日午後十一時十分、葉光・山本佐一氏が、

——法名　釈法珠

となられ、明治四十二年十月十日からの生涯をここに閉じたのである。病名は背髄カリエスと慢性胃カタルだったが、全身衰弱で亡くなられた。

本誌三六六号（32・11）に〝映画シナリオ　川柳に生きる葉光〟と題して故須崎豆秋氏が執筆されているが、葉光氏は不自由な身で川柳一本に生き抜いた人であった。

本誌三七〇号（33・3）葉光氏が、東野大八氏の「糞（くそ）べらだんぎ」を読んで、「有るは無きが如し」という一文を寄せられている。

—東野大八氏の「糞べらだんぎ」で双脚双手の話で〝無きは有るが如し〟は成る程と思った。私のは両脚とも細く腹につく程に曲って、立膝をすると這うだけの役にしかならぬが〝有るは無きが如し〟です。

と書いている。尋常（小学）二年生のとき、帰校途上愛染坂で荷車に轢かれた交通事故で足の自由をうばわれてしまった。

—中略、父に昭和五年に逝かれて、（氏の二十才のとき）その年の冬から川柳専門誌を知り、投句をはじめ豆秋、緑雨氏によって句会の味も知りました。尋常科は三年生で後は自習と雑誌への投書で勉強をしました。

「川柳雑誌」などの専門誌を知ってからは、川柳の味の巾を拡げるために雑俳短詩に全国的に投句に励みました。と、川柳へのたくましい意欲も見せている。

氏が生まれたのは大阪市南区天王寺椎寺町八四だが、伶人町時代には空襲にあったり、兄君の出征などで田辺の親戚のフロ屋へ身を寄せたり苦難の年月も相当につづいたようである。

父君を失なった翌年、つまり昭和六年一月号で路郎主幹から「葉光」の名をもらい、同年六月号にはじめて専門柳誌へ山本葉光の名を活字にした。

「一路集」竹内多聞選

童貞であって口笛朗らかに　葉光

近作柳樽には　昭和6年9月号

伊達投手
連投の疲労を見せるツース
リー　葉光

を、発表しているが、この雑詠らんには佐保蘭・普天・白柳子諸氏の柳号がならんでいる。

母堂のご在命中には、母におわれて句会へ出席したり、のちには阿倍野支部の木村十悟氏や伊達堰子氏などが、よく背負っては句会場いっぱいに友情の花を咲かせたものだった。ぼくも一度だけ背負ったことがあるが、あまりにも軽いので痛々しかった。人間を背負っているというより、ヒジのついた椅子をぼくのからだにハメこんだという感じだった。

七月十三日の告別式（王子町の自宅）には路郎・豆乃主幹ご夫妻ほか阿倍野支部の柳友多数が参列した。

不二田一三夫

金泥集

麻生葭乃選

「交　際」

マイナスになる交際へふりむかず　阿茶
つき合いは広いがケチで名が通り　同
すねかじりのくせに交際派手な事　小石
結婚のチャンスねらったおつき合い　同
交際が始まり仲人息をつきさき子
課長になり酒量だんだんふえてゆき　同
スケジュールぎっしりつまる交際家　一栄
スムースに先代からのおつきあい　同
栄転に交際ずきな妻がいて清子
交際はプラトニックと言う娘　同
交際費の出所疑う程に派手春栄
別会計にした交際費よくかさみ　同
一目惚れもう交際を申込み美喜
有望株だからと交際すすめられ　同
二十年という交際も金が仇友子
衣食住足りて交際さけたがり　同
交際費嵩み家計は四苦八苦勝子
婚約の交際中にメッキ剝げ　同
交際家こんどはお茶ですまされず好女
交際好きムードへ又も衣裳替え　同
交際費も原価へ入れて売価とし　あいき
酒飲んで外交論もひとくさり　同
相手方そっと調べて交際しカネ女
交際費予算に入れてのみまわり周甫
つき合うてようたしかめて嫁けと云う美代
社交界の花形妻の派手好み葭乃

次回題「月」〆切八月末日

前号「淡皮がむけて田舎に落ちつけず」は周甫さんの句につき訂正

川雑
婦人友の会
（有志）

暑中お見舞い申し上げます

麻生葭乃
山川阿茶
中島小石
太田良子
高橋操子
西出一栄
酒田清子
光好陽子
藤村〆女
内藤きさ子
小西富士子
竹内花代子
八木徳子
市場カネ女
沢田美喜
久米奈良子
置田ふじ
藤岡とも子
内藤白美
駒井由子
西川みち子
中村晴
林春栄
西村梨里
酒田章子
岩田美代

川雑婦人友の会連絡事務所
大阪市南区二ツ井戸町二三
山川阿茶

名地柳壇

いのちある句を創れ

投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼締切毎月十五日▼投稿先本社宛

本社　川柳まつり（大阪市）
7月8日　午後1時
会場――四天王寺本坊

川柳まつりの関連記事は26ページをご参照ください。
―編集部

兼題「喜び」　中島生々庵選

喜びと別に一日動く妻　万的
喜ぶ顔胸に描いて買う土産　黙平
老夫婦喜びごとに疎くなり　薫風子
喜びへ一筆書いてみとうなり　満潮
甲斐性の無さをこの頃喜ばれ　梅志
合格に喜び神様忘れられ　孝風
喜ばす為のうそとは気が付かず　庸佑
妻の喜び食卓へのせてあり　魯木
喜びが嗚咽となって幕が下り　万竿
喜びのインタービューは良くしゃべり　代仕男
喜びをマスコミそっとしてほしい　愛鳩
喜びはずばり批評して呉れる　菁風
喜んでいる顔まともから写し　日満
本当の喜び二三日して判り　七面山
金の入ることに素直に喜べず　小松園
喜びの席でも音痴飲むばかり　静馬
喜びに一瞬女気を許し　保夫
喜びがこんなところに小さい花　清子
ささやかな喜び定年後の背広　雄声
知らん顔して喜びを聞いてる娘　一瓢
喜びを丸出しにした国訛り　栞
喜びがまたうぬぼれになっていた　古方
洒落で言う嘘を真顔で喜ばれ　和三郎
健康を喜ぶだけの身がさみし　涼髪
当選確実ざわめいて来た台所　静観堂
喜びの誇張がすぎた荷が届き　紅鳥
喜びへママはちょっとも座れない　ひか平
喜びの笑顔見たさに母起し　正一
よろこびが今実感となり湯船　武助
いつの日か来る喜びへ共稼ぎ　仙山
なみだは塩からし喜びも悲しみも　三司
御堂を拝借この喜びを取り囲み　十悟
満ち足りたくらしに馴れて喜ばず　雄声
喜びを持てず女の美しく　文秋
夏山に若い喜びこだまして　晃男
喜んでいいのか母は確かめる　晃男
喜びを日日母と分かち合い　哲也
喜びをひっそり囲む老夫婦　水洞
寝返りを打って喜びかくしとく　水客
喜びは遠い方から聞こえて来　愛二
喜びの記念しかつめらしい顔　緑雨
喜びの皺は翁の面に似て　阿茶
片方は妻に入れさすだるまの目　恵二朗
喜びを母一人ではもてあまし　可住
よろこびに単箇半分あけたまま　摩天郎
喜びをかっさらって居る膝の孫　生々庵

兼題「声」　北川春巣選

十年振りの声間違いでない電話　すゝむ
観衆の声が重荷になって負け　武助
声援は聞こえなかった水しぶき　紅鳥
録音のわが声を聞くてれくささ　恵二朗
無事だった声聞くだけで母は泣き　圭水
ソプラノという声祖母は嫌いなり　泰
ソプラノが一人交って座がなごみ　恵二朗
音痴ですがと大声張り上げる　清子
まだのどをつかうことありうがいする　古方
分譲地母もはしゃぐ声になり　水客
かたぶつもその鼻声にひっかかり　庸佑
鼻声を何処へ捨てたか倦怠期　八郎
鼻声にのるチャンスだが妻の顔　頌柳
先代の声色も出る三回忌　梅里
声だけは先代に似てこの無慈悲　圭井堂
声がわりアラまあパパと間違えた　恵二朗
声がわりして母さんをてこずらせ　涼髪
女の子けんかに負けて声に勝ち　蛙水
お勘定声をひそめてのぞき込み　たねお
声を殺せば嘘のようでなし　栞
声立てて勉強してたにもう居らず　酔升
声だけの父はまたかと見くびられ　松太朗
人まねは上手個性はもたぬ声　幸士
正信偈和すまだ恥かしい小声　堀子
都々逸と別な声してお念仏　摩天郎
極楽へ行けそうな声で読むお経　井平
老優も一声あって熱あがり　正一
兵隊で鍛えた声でふり向かせ　静水
泣き声も遺産が欲しい声になり　多久志
泣き声がやんちゃになったのもしき　一栄
面接に声がどっかで引っかかり　清子
雰囲気で歌声喫茶声に和し　文秋
内証ばなしでもない声に酒がさせ　没食子
声量を押えて刑事マア座れ　真砂
教わった嘘言う声が吃り出し　光郎
お土産のある日の声を聞き分ける　青丹子
絶妙をはげましている試歩の声　一鶴
三次会年季を入れたらしい声　六竜子
大声を出すこと忘れ庶務の椅子　一三夫
ささやきの出来ぬ漁師の声と声　桂仙
工事場の声は六階までとどき　清人
待呆けが小さな声で腹を立て　白柳
ヤッホーの声一ぱいにするコダマ　季贄
声自慢三味のないのが物足らず　牧人
洗濯機唸る中なるひばり調　八九寸
子の声を聞き分けるのも女親　与呂志
板前で終るにおしい声を持ち　味平
うぐいすを鳴かした声ってこれかな　水京
双子です声で儲ける算段し　貴山
気の毒に公約をいう声が涸れ　梅志
声もかれ日焼けも残り落選す　好郎
当選をしたらひそひそ声になり　薫風子
いま別れた声が聞きたい電話口　梅里
声立てて笑う男で肚がなし　紅月
お別れに声にならぬ手振って見せ　生々庵
横綱が敗れた声をラジオ出し　水洞
文化住宅小さい声で叱られる　左文字
豆腐屋を声のリレーで呼びとめる　きさ子
その声やよしされた子の最後にて　一瓢
声変りセコのジーパンはきたがり　阿茶
愉快そうな茶の間の声をきいて病み　光道
審査員声には文句なく参り　ひか平
一声出して見たいとかすれ身構える　生々庵
政見へほんまかいなと影の声　どんたく
録音の社長訓示にかしこまり　狂二
妻の声の届かぬとこで昼寝する　小松園
声がわりモーパッサンを読んでいる　夢虹
包み金こころの声に耳ふさぐ　晃
時鳥聞いて蛸子を置き忘れ　一ン十

兼題「庭」　清水白柳選

校庭は緑健康優良児　文子
酔いざまし同志期せずに降りた庭　黙平
思いきや庭の向うに家が建ち　素人
この庭にかつては防空壕を堀し　薫風子
庭下駄をつっかけたままたちばなし　寿美司
庭下駄が父の余生の音であり　清風
枯山水へ息子洋館建てたがり　阿茶
藤椅子と囲扇を持って庭に降り　緑雨
呼び鈴へ庭の夫のたたずまい　六竜子
庭あって雪見月見と飲むチャンス　一栄
窓みんなあけてわが家の庭を見せ　竹荘
座蒲団の位置をずらして庭を賞め　代仕男
国地五年そろそろ庭が欲しくなり　天悟空
お庭拝見カメラを提げて踏み荒し　花村
庭掃いてこれから稼ぐ灯をともし　清人
特ダネへ庭から狙う顔写真　柳志
アパートが当れば庭が欲しくなり　どんたく
ままごとのお座敷になる庭の石　周甫
せめて土いじりのできる家が夢　万竿
大安の朝を庭石みな光る　旭峯
二階借り隣りの庭で四季を吸い　静波
一坪の庭に自転車乳母車　紅月
庭先で今日一日の背のびする　静波
名門の名残山まで続く庭　静水
本見れば蹲踞がどう桓がどう　愛二
庭園も含んだような料理代　繁雄
折さげてから庭石にけつまずき　越山

平凡な眼で観る人が庭へ塵　紅鳥
判押したばかりに荒れた庭となり　明林
ささやかなゴルフ庭の砂を打ち　ひか平
フラッシュを忘れ庭まで出てもらい　九文銭
一杯のバケツの水も余る庭　与呂志
産ぬ鶏かしわにならず庭に飼い　蛙水
日曜の子を刈るイスを庭へ据え　まどか
滞納の庭にも池の鯉がはねる　光郎
家庭菜園でなすびが五つほど実り　まどか
ひきがえる俺を誘うて庭歩く　静観堂
しかられて泣いてすごせる庭をもち　茂男
腹心として庭先へまわされる　水客
日当りの悪い庭でも咲いてくれ　春巣
銀河冴ゆ他人の庭で待たされる　小松園
電話取りつぐなと庭へ出る　菁風
殿様の庭も今ではデートの巣　涼髪
庭先で話せる隣でありがたし　雄水
庭が海までつづいて島の宿の風　万的
庭の苔隣りの鶏がきてつつき　宗太郎
建て増しをする決心のつかぬ庭　梅志
小庭よくととのいすぎて人臭い　旭峯
庭伝いで有無互いに相通ず　八郎
仏より和尚は庭へ掌を合わせ　句楽坊
苔生えた庭保守党に籍を置き　涼人
ご飯前客はお庭を見てまわり　閻甫
庭づたい小鉢に入れて礼にゆき　井平
子に嫁もらう間取りへ庭を埋め　文秋
雨よ降れ植木をまかせ酒に行く　愛二
ガレージに丹精の庭ちょん切られ　恒明
この狭い庭に天地と四季が来る　専翁
石庭のしじまへわれを見失ない　恵二朗
ほめ言葉さがしに庭へ下りて来る　一瓢
庭石の個性は鸚りものにされ　涼人
弱点があり庭下駄へついてくる　水客
子を亡くしてからの庭に雑草がなし　夢虹

兼題「素足」　西尾　栞　選

ステテコの毛脛蚊が刺すとこがなし　光郎
毛ムジャラの素足に下駄忠義見せ　専翁
湯上りの素足冷めたい山の宿　静馬
襟足と素足に見せる日本の美　万竿
ハイヒールやれやれ素足になれた今朝　生々庵
人形に似てる素足も孫のもの　無鬼
所作事の素足女形は白う塗り　生薑
四季の香を素足に見せた江戸情緒　すゝむ
ナルチャンも素足になれば嬉々として　白水
婚約をしてから素足で逢いにくる　夢虹
四畳半あっさり素足投げ出され　宗義
女房の素足が十文八分はき　和郎
傘持った素足が歩く築地の妓　愛二
斗病記夢の素足を注意され　六竜子
素足になって芸者本当の恋をする　六花
手入れして素足の表情年季入り　阿茶
十八の素足絣がよく似合い　満潮
捕まった時は素足に下駄をはき　梅志
絵ごころが動く素足のすばらしさ　小松園
塗り下駄の感触素足うれしがり　一栄
切れ話女素足のままで聞き　摩天郎
朝露にぬれて素足の百度石　花村
生きてゆく女の素足白からず　牧人
湯上りの素足男をまだ知らず　多久志
セクシーな素足に変わる浴衣がけ　ひか平
冷え性の素足を母にさとされる　奈良子
アッパッパ着ても素足になれぬ祖母　正一
土砂降りへあっさり素足になる女　満秋
口答えしてる素足の赤い爪　水洞
念入りにおしゃれ素足へ衣替え　美路
素足かと驚かされるシームレス　一ン十
ベラボー奴江戸ッ子素足でタサノをし　素人
奥様は水商売をした素足　愛鳩
産み月が近く素足を叱られる　きさ子
足ふいて上れと寝酒のんでいる　水客
記念像ペスタロッチも素足です　八郎
座ぶとんの白さへ素足恐縮し　清子
てんぐ屋の草履素足を叱られる　春巣
本明石素足が匂いそうに居る　三司
家元を継いで素足をもう見せず　圭井堂

席題「才女」　山川阿茶選

会うて見れば平凡な才女なり　明朗
境遇に応じて才女根をおろし　柳宏子
くねらせたポーズも打つこうする才女　古方
才女扱いされて窮屈な日を送り　清子
いつとはなしに才女尻にしき　梅志
インタービュ才女とぼけることも出来　梅志
白樺の径に才女迷い込み　栞
才女又離婚話で話題まき　栞
小説ほど才女の恋ははかどらず　狂二
才女今日はエプロンかけて女の座　狂二
添景の夫に才女いたわられ　生薑
ご近所はさほど才女と思うてず　摩天郎
才女今日一席ぶってくるつもり　晃
佐和子たまあきに並べと孫思う　愛二
独身の才女夫婦の機微を描き　和郎
東大出亭主遂に別居せり　好郎
BGの中の才女で踏みはずし　三司
記者煙にまいて才女のゴルフ熱　清人
鼻筋へ才女の勘が先走り　和三郎
芸術に嫁して才女にある孤独　文秋
横文字の本を抱えて才女ぶり　酔升
才女じゃないけど僕にすぎた妻　恒明
マスコミにだけは才女の弱いこと　圭井堂
時々は微熱も出して才女なり　春巣
失恋のあとの才女の筆が冴え　満秋
人生相談才女は男ふれという　満秋
才女だが尻に敷かれてアホらしく　八郎
才女出て長屋連中鼻高し　句念坊
才女だから焼き餅才女らしく焼き　生々庵
才女今日大阪弁でよく喋り　満潮
二女三女母をまじえてみな才女　きさ子
才女ではあったが妻で落第し　一三夫
才女のかげで良人肥えられず　奈良子
薄命の才女がのこす玉の文　奈良子
独り居の才女噂のまととなり　奈良子
外遊もしてきて才女箔をつけ　たねお
父親は才女を育てたことを悔い　文蝶
才女振り選挙違反にひっかかり　文蝶
先妻は才女であった資産税　雄声
撰りに撰り才女はノラの夫もち　雄声
才女もう世帯やつれの皺になり　雄声
才女にも跡つぎのない不倖せ　圭水
ご主人の用をば才女忘れとり　小松園
金の入ることに才女の乗って来ず　小松園
筆にさすが才女を肯かせ　小松園
マスコミに別れた妻の妻女ぶり　水客
評判の才女案外愛想よく　小石
綻びを見付けて才女たり　薫風子
親だけが才女のつもりまたすべり　好郎
才女だけ旧姓だったクラス会　静馬
朝顔の種へ才女の字がきれい　梅志
回答は才女微に入り細に入り　小松園
貫録を才女もヒップからつける　生薑
波にのる事にも才女加才なし　阿茶

席題「雨上り」　菊沢小松園選

泊る気で脱いだら雨が上りかけ　静馬
雨上りまだ遠雷の消えさらず　生々庵
雨上りやもめと知れる物干場　正一
相合傘雨が上がったのも知らず　一三夫
雨上る頃に手料理でき上り　水客
雨が上って来たらスナンコはいり出し　柳志
雨上りテルテル坊主そのままに　静幸
雨上りどっと洗濯機がまわり　満秋
雨上りデートの道の美しさ　文蝶
雨上り早速野球でよごれて来　堰子
雨降っても上っても奥さん忙しく　圭水
なめくじも蛙もうれし雨上り　圭水
雨上りゼニもないので街に出る　晃
雨上り親父が屋根へ上がされ　与呂志
雨上り今夜は夜店出るらしい　奈良子
雨上り二人で湯の街歩いて見　万的
洗濯の干場つかえた雨上り　南宗
雨上りまだ気ゆるせぬ傘を持ち　白美
お伺いも障子を開けた雨上り　多久志
雨上りでんでん虫も伸びをする　阿茶
雨上り地蔵のしめるよだれかけ　舟遊
雨上りもったところをたしかめる　水京
雨上りどの物干しも慌ててる　清子
露天商元食い込んだ頃に晴れ　狂二
蜘蛛の巣がきらきら光る雨上り　栞
干物がずらり団地の雨上り　明朗
子の砂場まだ濡れている雨上り　生薑
雨上り身体を干しに外に出る　生薑
雨上り断りきれぬ使いが来　湖山

雨上り飯場に笑い声が洩れ　紅月
長尻が雨が止んだらなおねばり　好郎
約束のデートへちょうど雨上り　多久志
雨上り迎えの傘がじゃまになり　竹荘
ビショ濡れになって哀れな雨上り　梅志
帰る気になった家出へ雨上る　水客
雨上り団地も見栄を捨てて干し　一瓢
傘持って待っている間に雨上り　小松園

席題「気疲れ」　後藤梅志選

ワキ役に師匠が回り気が疲れ　狂二
気疲れの原因たった千の株　恒明
気づかれはふすま一重の間住い　三司
近所の子海へ誘うて気が疲れ　文秋
新婚が宿につくころ気が疲れ　瑞歩
気づかれを卵のとこへほぐしに来　あいき
結局は気疲れというみたてなり　栞
次女嫁ぎ長女お産と気が疲れ　梅里
素人と見せるデートに気が疲れ　小松園
気疲れの顎まで仕舞い湯にひたり　水客
転宅の気疲れらしく妻がやせ　清人
気疲れの幹事へ酒豪まだねばり　清人
気疲れをいやすビールは妻がつぎ　与呂志
五黄の寅女房にもって気が疲れ　一三夫
気づかれが産声きいてすっと消え　小石
気疲れの夫いたわるひとがあり　庸佑
気疲れの連続ですとよくしゃべり　春巣
ハンドルを持つ身巡査に気疲れし　文蝶
気疲れか何んにも言わず寝てしまい　文蝶
緊張がとけて花嫁腹が減り　柳宏子
出世した息子の家で気が疲れ　操子
円満な家庭で嫁の気が疲れ　操子
気づかれを芯から直すひざ枕　正一
気疲れをねてる夫にいたわられ　蛙
気疲れな旅は社長と同じ席　蛙水
気疲れのお師匠さんのコップ酒　きさ子
気疲れを言うて大金届けられ　満秋
新入社ただオロオロと気が疲れ　一三夫
気疲れも知らず最高点を取り　専翁
飲み過ぎを気疲れらしく顔に出し　愛二
気疲れへ冷たいお茶がほしくなり　紫香
気疲れをさけて公社にまかす旅　あきら
年寄りと話が合うて気が疲れ　水客
灰皿も気疲れをした姿なり　薫風子
気疲れと別に落語へよく笑い　きさ子
気疲れにつくづく年を振り返り　素人
万引もある売店で気が疲れ　梅志
（庸佑清記）

川雑　**淀川支部句会**　（大阪市）　木村水洞報

メンツがメンツがとボーナスはたいて来　孝夫
より道が傘を忘れて帰って来　東洋男
ムードで飲むより道のうまい酒　一鶴
新聞を配る子供へ降りつづけ　水洞
長梅雨にわが家の屋根がひく見え　花村

川雑　**玉造支部句会**　（大阪市）　西出一栄報

氷雨も処変れば慈雨となり　正一
ぶりき屋へ電話は別なとこが洩り　白柳
石垣の穴からどしゃ降り見てるカニ　風仙洞
謄写刷薄れた文字はペンで書き　句念坊
一書いて運勢のよいの悪いのと　井平
前衛派説明付で字とわかり　京四郎
寄書きの隅に小心者の文字　珠笑
誤字当て字それでも母は行き届き　文秋
スケージュル社長時計の針に似て　呂人
長い針短い針と子の時間　宇佐夫
ときたまの逢瀬へ時間たちやすし　はる江
調べ室ずれた時間へ荒い語気　川柳堂
時間が違ったのかと思う程に待ち　一栄
母になる時間へ無我の神だのみ　あいき
独り居の悩み現なまあるがゆえ　寿美司
悩みごと絶えず瞼も浮いたまま　清子
母だけに言える悩みを娘もつ　六竜子

川雑　**阿倍野支部句会**　（大阪市）　金井文秋報

チンピラは逃げる早さを自慢にし　正一
吠ゆれども稚気脱し得ずチンピラの　八郎
チンピラの肩は斜めに道あるき　生薑
ひっこみがつかずチンピラ同志もめ　柳宏子
いい話傘の雫をきっている　水客
ねえパパ地味でしようとまたねだり　万里
地味に着てその情熱をひたかくし　宗義
形見わけまだ地味すぎる母の帯　双楽
特売場地味だ派手だで待つ長さ　青山
先生という職地味を親しまれ　恒明
未亡人地味に地味にと気をつかい　一三夫
地味だっただけに汚職を信じかね　良
後添えと言うひかえ目が地味にさせ　梅里
思案する暇もあたえず辞令くる　文秋
思案しいしい下戸二次会へついて行き　静馬
遮断機を待つ間に出来たいいプラン　文子
蜂の巣を残して植木屋降りて来る　清風
母鳥を信じ巣箱でじっと待ち　十悟
早よう巣を出えやと起す釜ケ崎　小松園
雑然として愛の巣にふさわしく　白柳
つばめの巣軒にあるのが子の自慢　あいき
新聞が悪の巣と書く街に住み楽　圭井堂
屋ではぼやきで通るコメデアン　清人
楽屋口出てコメデアンパパの顔　光葉
コメデアンさびしい真面目のぞかせる　良

川雑　**備前支部句会**　（岡山県）　横山一声報

風邪の子へ花見を二三日延ばし　三六
花を見るだけなら向うの山も咲き　芳月
夜桜へ肩触れ合うたまま歩き　東岸
お見合いと知らず花見に連れ出され　あやめ
傷心の花見は酒に酔い切れず　伊久野
プランだけ組んで花見の雨となり　美舟
花びらが酒に落ちたをうれしがり　一声
とてもいい花だと美人振りかえり　宗義
天気予報聞いて花見の海苔を巻き　胡風
芽を出した頃から花見を計算し　照路
ちっぽけな新芽ほめてるすしの膳　幸仙
胃袋がいやいやしても酒になり　久米雄

川雑　**京都支部句会**　（京都市）　田中烏雀報

断面を見せて巻き寿司皿に盛り　生薑
角砂糖とけゆく断面にいる女　尚平
断面はゼロのかたまり蛸わびし　真砂
エレベーター少年隅を得て眼澄む　司郎
無花果をくらう少年ツバを吐く　紫蘭
女と言う木乃伊は膝をくずしなん　晴芽
のど撫でて貰う小猫は目をつむり　烏雀
ありし日を木乃伊文字の謎へえおく　和三郎
青いカビをそだてペニシリンと名づけ　ゆきら
独房の日永く食パンの円い黴　枯粒

川雑　**ハワイ支部句会**　（ハワイ）　築山快夢起報

金婚の日を老妻と語り合い　平八郎
寝言かと思や老妻お念仏　紅溪
薄情に見えても無い袖振れません　静起
老妻と写す時には孫も入れ　魔花麗
老妻の変らぬものは黒子だけ　弦月
誰も彼も昔忘れて寄りつかず　快夢起
老妻の苦労を太い指に見る　あき坊
老妻と呼ぶ倖せの共白髪　柳葉
薄情と言われて女を卒業し　十四
年甲斐もないと老妻とり合わず　万里歩
老妻の知性に圧されている余生　笑有
薄情のようで頼りになる男　浅太
薄情な奴だが金に物言わせ　暁明
薄情な男と知らず身を任せ　カロ女
しみじみと老妻と没むお茶の味　エス子
老妻の方が段々亭主めき　拝山
薄情ねと甘えてすねて騙してる　よ志子
老妻が孫と競走若返り　静杉
泣いている子隣りの子だからほっておき　内海
嫁が来てから薄情な子に変り　泉水
新婚の気分で居ても顔の皺　紅茶
老妻の短いパンツ若返り　緑星
顔の皺気にする老妻女なり　周防

川雑　**米子支部句会**　（米子市）　小西雄々報

お別れへみんな笑って撮る記念　一机
後援会やっぱり皆が飲む話　無閑

秀才の共産党を惜しまれる　鶴丸
機関士の欠伸で助手も眠くなり　雄々
責任は他国のせいにして実験　一保
橋渡しした姐さんの眼が燃える　青溪
遊んでは食えぬ日本の民主主義　まさよ
早乙女の名前がわかる尻の巾　明甫
身内だけ残って飲みがまだ続き　秀峰
手を結ぶ心は何を思う道　忠之
盗作でないと念おす自信作　福女
保守革新二つに割れた療養所　幸子
前歴で票読み役人立候補　詩郎
ほれられる筋で山手は書きなぐり　日満

雑川　大鉄支部みなと句会（神戸市）

植村客遊子報

末っ子がおぼえ始めた酒の味　一九
ホウタイを巻く間も子供じっとせず　白溪子
大道の巾一ぱいに労働歌　初甫
おしゃべりの末っ子だけが母に似ず　白李
碁盤目の此処が京の僕の家　杜的
港から帰りしばらく気が和み　千津子
末っ子に家を継がせる羽目になり　客遊子
末っ子に親父やっぱり弱くなり　賀人
今更に友の楽勝に舌を巻く　惣太郎
活花の水のほこりも妻の留守　万的
末っ子にやっと挙った鯉幟り　軒滴
かんにんなと素直に走る水鉄砲　甲峰
山寺のしじま覚樋の水の音　朝気
平社員で終る時計のネジを巻く　飛鳥
とんぼ取りし古里の道に今立って　季笑
巻紙を歌舞伎の女形肩で読み　有法子
ハムエッグで子等に母の日祝われる　美由起
水郷に遊んで利根の古趣に満ち　修二
溜り水今日の天気を映してる　求女
岩田帯また巻きなおす里帰り　千甫
指に髪巻いて心をつのらせる　水客

雑川　篠山支部句会（兵庫県）

酒井ひか平報

どたん場へ来ると女は泣きもせず　永断
死んだ子を話せば乳が張って来る　可住
特売場漁りミンクもひねって見　みのる
馬鹿だわと言う彼氏を愛して居　青峰
女ごころはと男約束して呉れず　弥栄
老婆心つい泣き落しに投票し　枝葉
ハッピーエンド女心をほっとさせ　ひか平
ライバルへ女心か微笑する　無鬼

雑川　宇部支部句会（宇部市）

津秋六花報

明細はいらぬと部下を信じきり　弘道
明細書その他の点がふにおちず　南風
飲んだあと勘定書が気にくわず　仰天子
明細は後日知らすで茶を濁し　実男
明細に書かせて社長の盲判　山峰
常連となって明細書もくれず　豊年
明細に書けぬ弱身をつけこまれ　佐吉
へそくると見せぬ家計簿こまく書き　六花

雑川　高知支部句会（高知市）

大西迷窓報

思春期の手帖札に鍵をかけ　柏子
古手帖ああんな事もあったかな　百日紅
魚屋の手帖うろこで黒くなり　和香春
貸し借りを手帖に記す小商人　幸泉
記び言うて見たが警察手帖出し　砂丘
新人はすぐに手帖につけたがり　俊一郎
ボーナスの半分妻の手に光り　久江
指輪まで買ったあの娘に裏切られ　波浪
愛妻もリングと共に年をとり　武司
未亡人今日は指輪をはめていた　蟠蛇
酔いしれし情痴へ指輪はっとかれ　寛
指輪した身の置き所なき春の宵　紅梅
代償は指輪よと女酔うていず　迷窓
独り言いうて指輪へキッスする　呑洋
魅せられた指輪へ女もうくずれ　美知
指輪だけ光ってあなたのどこがいい　松月
女房も指輪もメッキか地金が出　敏路
ロマンスはいくつもありえた指光り　愛蘭
婚約をしたか指輪が光っている　青蛙
三文の指輪もかたみとしておくる　雪枝
ロマンスも指輪に秘めて妻も老け　利子

南海電鉄川柳会（大阪市）

辻　圭水報

免許迄ハンドル軽く持てたけど　八郎
ハンドルも軽し隣りに彼女が居　みなつき
ハンドルへっぴいお酒の臭い来る　圭水
ハンドルは片手得意の十八、九　雄声
仕組まれた輿にかかって本音はき　静幸
二次会へ誘い本心聞いてやり　宏子
ハンドルを握れば春の風に歌　句念坊
若社長のハンドル着いてホッとさせ　路郎

杏林川柳会（大阪市）

中島生々庵報

赤ちゃんの欠伸みんなをほほえませ　一哲
他所のまで入れてやってる冷蔵庫　五十六
冷蔵庫古道具屋でみじめすぎ　生々庵
中味なく唯寒々と冷蔵庫　一伸
冷蔵庫パパのビールが王座しめ　小石
黒板へ向いた序の生欠伸　野迷路
居残りの派手な欠伸へコーヒ来る　阿茶

大阪逓信病院川柳会（大阪市）

橋本幸男報

水キキン熱帯魚がうらやまれ　愛論
いとはんに頬よせられて熱帯魚　風仙洞
熱帯魚めだかかと祖母はのぞき込み　草右
紳士的に話合うたら損をした　没食子
紳士でも金のないのはあきまへん　露児
紳士だと安心してたらだまされた　史葉
洋服をぬげば我が家のパパであり　宏子
もぎり嬢ふとアベックを羨やむ目　春雄
モギリ嬢何時まで見てる二人連れ　まさる
モギリ嬢面倒くさそう切符切り　ハナ子
もう先きが見えて女優はパーを持ち　竹荘
テレビカメラ女優の皺へ容赦せず　春巣

雑川　明和川柳研究会（大阪市）

樋口舟遊報

恋に色があるなら碧い恋してみたし　夢虹
鶴の色重なり合うて原爆忌　新子
ウォタカラー女は落着きとりもどし　舟遊
気色ばむそこにかけひきなしとせず　すゝむ
新雪を踏む足跡の遠く見え　九州男
枠外の操作に経理の顔渋し　三舟
灯を消して椽側へ呼ぶ秋の月　六竜子
神苑の池を静かに覗く月　言也
戦争になるなとお月さま思い　梅志
波立たぬようにはなから別居させ　正薫
造船所の騒音波間にヴイ浮かぶ　草人
巌を打つ波音遠く漁港眠る　曙蝶
仲人も鮫肌までは知らなんだ　静馬
赤ちゃんの肌の匂いで気を静め　照児
人心が荒び女の靴光り　大丘子

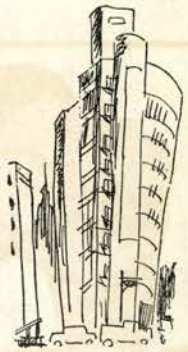
コクヨ川柳会（大阪市）

川口理休報

警察の蔭りでなげく無警察　千義
便箋にめんめんとつづる気かせ　節子
見ぬふりをして脱線をなげく親　理休
春の風邪いたわり合うて共稼ぎ　瑳巳
流感に家計簿までがやられたり　留鈍
婿さんとは俺の事なりめでたき日　ほたる
エズカレーターに乗るような気で入婿し　亀心
常連の話半分女将聞き　柳波
婿殿をまずうなずかせ真珠売れ　昭一

―記事フクソウのため次号へおくった句会報がありご諒承願います。

宴会・出張パーティ・折詰弁当
梅里ノ店
大萬
料亭　阿倍野区松崎町三ノ一〇　TEL（七七）三九三五番
鮨の店　アベノ橋近映地下食通街　TEL（七七）〇一四七番
串の店　千日前大劇裏　TEL（六三）二七一〇番



柳樽室

★さすがに暑い。皆さんのご健康をひたすら祈っている。私も一人前に汗を流している。★私がこん度、旅に出るので、さぞ忙しいだろうと山路閑古氏が「芭蕉に返れ」というエッセイを寄稿して下さった。情誼のたまものである昧読されたい。★ことしの「川雑川柳まつり」には里田亮三、内藤忠治郎の両氏の好意で狂言「箕被（みかづき）」が本衣裳で演じられた。私たちははからずも古典芸術の領域にまでひきよせられた訳である。ご承知の如く取材は連歌をとり扱ったもので、私たちの川柳につながるものだ。まことに、のんびりしたもの、ユーモアに富んだものとして、川柳家にとって多くの示唆を与えられたことと思う。徒らに新らしがって、先祖のことを少しも知らない人には、閑古氏のエッセイといい、この箕被といいよくよく翫味する必要があろう。★「川柳まつり」に詩人の小野十三郎氏に講演を願ったのも川柳人の視野を拡げるための微意に外ならないのだ。★東野大八氏は軽妙な快筆をふるって「森繁と飲む」を寄稿して下さった。本誌の至宝として敬意を表している次第、その他その折々に古人新人各氏の執筆陣で本誌を飾られるので感謝している。★編集局の橘高薫風子君が近く個人句集「有情」を本社出版部から出すことになったので、挙って応援的に購読して欲しい。新進作家ではあるが、その努力が素晴らしい成果を見せていることは私が保証する。今、若手であぶらののっている作家だと言えよう。★私の今、欲しいのは時間だ。したいこと、書きたいことが山ほどあるが一日が二十四時間では時間の方が足りない。

（路郎）

▼ペンの散歩▲

▼青森から東京方面へ一週間の強行旅程など、若いボクらがお手上げなのに先生は車中で原稿を書きながら敢然と強行される。そばで見ているほうがハラハラするほどの毎日だが、とにかくお元気だ。▼七月十四日午前十一時から十五分間、NHKの教育テレビ、学校放送「はたらくおじさん」シリーズ（小学校二年生向き）に、中島生々庵医博が「おいしゃさん」に協力出演をされた。なかなか堂々たるもので、これは十七日に再放送されたが、このときは全国放送だった。▼テレビといえば、宇宙人ガガーリン少佐が来日したとき、路郎主幹もソ連のテレビに映像を送られた。▼七月十日に松阪へ行って、本居宣長の遺跡を見学してきたが、当時の木版にいろいろ考えさせられた。▼九州方面の水害に柳人のご安否を気づかい、これからの猛暑にもあわせてお見舞い申し上げます。

（一三夫）

新刊紹介

▼前田勇氏著「悪いことば・下品なことば」が昭和三十七年六月十日東京堂から発行された。

著者は、われわれの言語生活は合理的でありたいというのが、この一書全編をつらぬくわたしの念願である。とはしがきで述べている。平言俗語を駆使する川柳人には興味ある内容で一読に価する。著者は大阪学芸大教授。B6型二百三十頁、定価三百九十円。

八月句会—川雑支部

★**淀川句会**・6日(月)六時、題、夏休み・標準語・仮病、所、十三西之町五丁目東淀川郵便局。★**玉造句会**・10日（金）七時、題、すだれ・居眠り・噴水、所、市電玉造電停南百米大阪信用金庫。★**明和研究句会**・19日（日）、一時、題、雑魚・水中花・星、所、阪神鳴尾公民館。★**南海電鉄句会**・16日（木）六時、題、カーブ・男まさり・むだ足、所、難波高架下親和クラブ。★**阿倍野句会**・20日（日）七時、題、フェミニスト・グラマー・ニューフェース・パラソル、所、阿倍野区松崎町三ノ一〇割烹大万。★**みなと句会**・27日（月）六時、題、無料・ハンドル・故郷・雑談、所、神戸市電相生町下車東五十米高架下国鉄神戸変電区会議室。

川柳雑誌社

麻生路郎
麻生葭乃
中島生々庵

編集局

北川春巣
戸田古方
清水白柳
丸尾潮花
真鍋一瓢
水谷竹荘
不二田一三夫
後藤梅志
橘高薫風子
西田柳宏子

句会部

黒川紫香
菊田いさむ

総務部

八木摩天郎
林宏子

すます上げます暑中御見舞申し

趣味の世界旅行案内参考書ともなる

唐崎専翁の川柳三千句集

人生と **世界一周** 旅日記

B6版上質紙美装246頁・現地写真百数十葉挿入

1冊定価¥350 〒90 市内50

川雑読者には送料を当方負担。

大阪市住吉区帝塚山東2ノ22 唐崎専右衛門

TEL (671) 0421・振替口座大阪3113

川柳で世界を罷り通りけり、川柳を、ともかく実用化したものとして、曩に、朝日新聞社の発行で、既に第三版を重ねている。

地球を巡り廻った約六万キロの遠い道中を、時速七、八百キロのZ機空路を初め、時速八十キロ前後の欧米陸路を驀進した慌しい、世界一周の旅の見聞を、単に十七音でメモした現地報告その儘を羅列したという、二千余句に、著者自伝の人生行路哀歓史を添えて三千余句集。猶多数挿入の現地スナップ写真も、興味あって面白い。

鎖夏の読物として敢て御一読を煩わしたい。

ドイツ・マック社製
強力 ローヤル・ゼリー 製剤

活力を高める アピ

強精と長生への天然の強壮効果

日本新薬株式会社

正式名 アピフォルティール

会長・麻生葭乃女史

川雑 婦人友の会会員を募る

川柳雑誌社内 川雑婦人友の会

入会希望者は往復はがきで……

連絡事務所 大阪市南区二ツ井戸町23

山川阿茶

麻生路郎著

好評噴々

新川柳鑑賞

川柳の味わい方・五百数十句

（毎日新聞評）

麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手がけているというから川柳歴はもう五十五年にもなる。

この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心にその他の柳誌や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁重な注釈を加えて、鑑賞の手引に資そうとしたものである。

句の方より実はその鑑賞文の方がなかなかうがっていて、一気に読ませる魅力がある。

価二五〇円
送費八〇円
B6版
二五〇余頁

発行所 川柳雑誌社
大阪市住吉区内方代西五丁目二五番地
電話大阪(671)六〇八一
振替口座 大阪 七五〇五〇

食品と科学

食品と原資材・機械・包装の総合誌

8月号発売中　150円（〒18円）

特集　防腐・殺菌

1. E型ボツリヌス中毒の問題　相磯和嘉
2. デハイドロ酢酸の性状と利用　市野一麿
3. ガス殺菌について　芝崎勲
4. 複合防腐殺菌剤について
5. 防腐、殺菌剤の功罪　田中薫樹

講座
食品官能検査
食品工場の衛生
食品品質管理

◇海外ニュース　◇特許ニュース
◇意匠ニュース　◇商標ニュース

〔展望台〕主食・罐詰・菓子・飲料・添加物

大阪市北区
浪花町5
電〔361〕9373～4

食品と科学社　振替 大阪6702番

募集

課題吟募集

缶詰（十句以内）松江梅里選
アパート（十句以内）山根白星選
老人（十句以内）木村水洞選
皺（十句以内）市場没食子選
外出（十句以内）長野文庫選
失恋（十句以内）菊田いさむ選
（九月十五日締切）

毎号募集

近作柳樽（雑俳廿句以内）麻生路郎選
川柳塔（雑俳十句以内）北川春巣選
文章（評論・研究・感想其他）麻生路郎選
（毎月十五日締切）

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。

▼「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募る。

▼▼「課題吟」は誰でも投句が出来る。「川柳塔」の投句は不朽洞会員に限る。

B列5号　毎月一回一日発行

川柳雑誌　三十七年　第八号

定価　九〇円（送料六円）

（禁転載）

半カ年　五七六円（〒共）
一カ年　一、〇八〇円（〒社負担）

昭和三十七年七月廿五日印刷
昭和三十七年八月一日発行

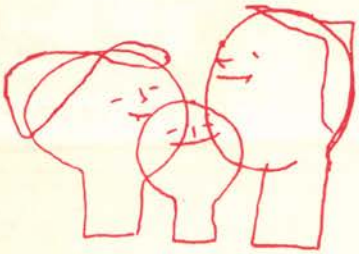
大阪市住吉区内方代西五丁目二五番地
編集兼発行人　麻生幸二郎

発行所　川柳雑誌社
大阪市住吉区内方代西五丁目二五番地
電話大阪(671)六〇八一
振替口座大阪　七五〇五〇

Printed in Japan

昭和廿二年七月一日　第三種郵便物認可
昭和廿七年八月一日　発行（毎月一回一日発行）
編集兼発行印刷人　麻生京二郎　発行所　川柳雑誌社
大阪市住吉区住吉町五丁目二五番地　電話大阪(671)六〇八一　振替口座大阪七五〇五〇番
定価九十円（送料六円）

一家そろつてホーライ党



廣東料理

蓬莱

大阪なんば・TEL（641）551－2

2階電車 ビスタ・カーは車内冷暖房 シートラジオ
公衆電話など設備した豪華特急です

大阪・名古屋・伊勢をいちばん便利に結ぶ

近鉄特急

大阪－名古屋 ノンストップ 2時間18分

●は 2階電車ノンストップ特急
ほかの特急は途中 鶴橋・八木・中川と津・四日市・桑名に停車

大阪上本町発	● 7.00	● 8.00	8.15	● 9.00	9.15	●10.00	11.15	●12.00
12.15	13.15	●14.00	14.15	●15.00	●16.00	16.15	●17.00	17.15
●18.00	19.15	●20.00						
近鉄名古屋発	● 7.25	7.40	● 8.25	8.40	● 9.25	9.40	●10.25	11.40
●12.25	13.40	●14.25	15.40	●16.25	16.40	●17.25	17.40	●18.25
●19.25	19.40	●20.25						

■ 伊勢へ
大阪から 1時間55分　名古屋から 1時間33分

座席指定特急券のお求めは
14日前から 近畿日本ツーリストと日本交通公社全国営業所
5日前から 近鉄上本町・名古屋・宇治山田と特急停車駅

近鉄特急のリザーブ・近鉄沿線へのご旅行は ゆき届いたサービスの近畿日本ツーリストへお申しつけ下さい　東京都千代田区八重洲口 国際観光会館1階 231—4131のほか全国に120営業所

本社 大阪市天王寺上本町6

近畿日本鉄道

麻生路郎先生著

川柳とは何か

—川柳の作り方と味わい方—

価 二五〇円
送料 七〇円

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたもろもろが十七音に圧搾された風刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的である。その川柳がいかにして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、所界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

取次所 川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区払方町27　振替東京29507

皮ふ病の中で一ばん多い

湿疹

くさ・ただれ・あせも

★カユミをすぐとり、掻くのを忘れるほどです。
★慢性・頑固症にもよく効きます
★カブれず、ベトつかず、クリーム状で爽快です

ゼム-A

山之内

東京・大阪　山之内製薬株式会社　福岡・札幌